

5. 資料

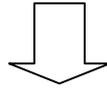
資料 1	研究代表者の変更	402
資料 2	Website 公開状況	403
資料 3	各種研究会・ワークショップ等開催実績	404
資料 4	各年度研究企画一覧	411
資料 5	慶應義塾大学外国語教育研究センター規程	416
資料 6	若手研究者育成の状況	419
資料 7	全体会議開催実績	432
資料 8	慶應義塾における外国語教育（組織図）	434
資料 9	コミュニティ整備状況	435
資料 10	主な研究装置	438
資料 11	慶應義塾外国語教育グランドデザイン（提言）概要	441
資料 12	実験授業	443
資料 13	主な教材の作成・公開状況	445
資料 14	CEFR 基準レベルの細分化	456
資料 15	慶應義塾評価・点検関連規程	457
資料 16	AOP プロジェクト出張に関する申し合わせ	462
資料 17	プロジェクトの報道状況	464
資料 18	Learning Design Project パンフレット	471
資料 19	各企画の最終報告会発表ポスター	473
資料 20	AOP プロジェクトパンフレット	507
資料 21	《複言語のすすめ》パンフレット	519

資料 1 研究代表者の変更

1. 研究者の変更状況

旧

プロジェクトにおける研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトにおける役割
言語教育政策提言	理工学部・教授	金田一 真澄	研究代表者



新

変更(就任)前の所属・職名	変更後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトにおける役割
経済学部・教授 外国語教育研究センター・副所長	経済学部・教授 外国語教育研究センター・所長	境 一三	研究代表者

2. 変更の時期 平成 19 年 10 月 1 日

3. 変更理由

本プロジェクトは、活動の母体である外国語教育研究センターの所長を代表として推進されている。これは本プロジェクトが外国語教育研究センターを核とする研究拠点形成を目指すものであることから、センター運営の統括責任者である所長が研究代表者を兼ねることが不可欠との判断によるものである。

当センターでは平成 19 年 10 月 1 日の任期満了による所長交替を受け、本プロジェクトを継続して円滑に推進すべく、研究代表者を前所長より新所長へと交替した。

4. 変更に伴う影響およびその対応策

本プロジェクトは構想調書に基づき計画的に進められていたことから、研究代表者交替に伴う研究活動への影響は極めて軽微であった。後任者は当プロジェクトの中心テーマである「複言語・複文化主義」「言語共通参照枠」「言語ポートフォリオ」を専門分野とする研究者であり、また、構想調書作成の段階から中心的な役割を担うメンバーとして参画し、変更前においても3つある研究ユニットのうちの1つの統括としてプロジェクトの中心的な役割を担っていたため、強いリーダーシップによる研究組織の活性化と研究内容の更なる深化をもたらすことができた。さらに研究代表交替後にも、前任者がユニット統括として本プロジェクトの円滑な遂行に継続的に責任を果たすよう対応した結果、研究の方向性・信頼性への影響を最小限に留めることができた。

資料 2 Website 公開状況



画像 AOP プロジェクト 日本語版 Website



画像 AOP プロジェクト 英語版 Website

資料 3 各種研究会・ワークショップ等開催実績

3-1) ワークショップ

- 公開授業「学校図書館で英語絵本を楽しもう—Let's read aloud!!!—」
開催日時: 2010年11月12日(金)13:20-16:00
開催場所: 慶應義塾普通部図書室
内容: 大島英美氏による、中学生を対象にした英語絵本音読の実践授業。
- 講演会『外国語としてのドイツ語における発音習得の方法について』
開催日時: 2010年11月9日(火)18:00-20:00
開催場所: 日吉キャンパス・来往舎大会議室
後援: ドイツ学術交流会・日本学術振興会
内容: ハレ・ビッテンベルク大学教授ウルズラ・ヒルシュフェルト氏による講演会。
- CEFR と English Profile に関するワークショップ
開催日時: 2009年9月11日(金)14:30-17:30 (14:00 開場)
開催場所: 日吉キャンパス・来往舎中会議室
共催: JALT Framework and Language Portfolio 分科会、ケンブリッジ大学出版
講師: Tony Green
内容: CEFR の現場での活用と English Profile について
- 「ことばの学びを育てる」プロジェクト PG3【Mac】および PG4【Podcast】第1回ワークショップ
開催日時: 2009年6月6日(土)、2009年6月27日(土)13:30-18:30
開催場所: 日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
内容: 外国語教育における Mac/Podcast の活用について
- 「ことばの学びを育てる」プロジェクト Project Group1 第1回対面ワークショップ
開催日時: 2009年4月18日(土)15:00-18:00
開催場所: 日吉キャンパス・第三校舎外国語ラウンジ
内容: Moodle のワークショップ
成果公開: http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_34.html
- 教職員対象ワークショップ「外国語の授業における ICT の利用」第6回
開催日時: 2009年3月7日(土)15:00-18:00
開催場所: 日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
内容: 第一部: ワークショップの内容を振り返る
第二部: これからのワークショップの運営方法をさぐる
成果公開: 『2008年度研究活動報告書』101-104頁
http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_33.html
- 教職員対象ワークショップ「外国語の授業における ICT の利用」第5回
開催日時: 2009年2月7日(土)15:00-18:00
開催場所: 日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
内容: 第一部: 「映像」を外国語の授業に活用するには? (2)
無料映像編集ソフト Partage(パルターージュ)を活用する
講師: 岡野恵・五十嵐玲美・谷内正裕
第二部: 外国語教育 meets Mac & Mac meets 外国語教育(5)
Apple による教育への取り組み(1)スライドショーの作成
講師: 益田玲子・倉館健一・濱野英巳
成果公開: 『2008年度研究活動報告書』101-104頁
http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_32.html

- 教職員対象ワークショップ「外国語の授業における ICT の利用」第 4 回
 開催日時:2008 年 12 月 6 日(土)15:00-18:00
 開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ 3
 内容: 第一部:「映画を外国語の授業に活用するには?」
 講師:倉館健一・濱野英巳・岡野恵
 第二部:外国語教育 meets Mac & Mac meets 外国語教育(4)iMovie の操作方法
 講師:徳永健一
 成果公開:『2008 年度研究活動報告書』101-104 頁
 http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_29.html

- 教職員対象ワークショップ「外国語の授業における ICT の利用」第 3 回
 開催日時:2008 年 11 月 1 日(土)15:00-18:00
 開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ 3
 内容: 第一部:Moodle ワークショップ(3)へ Moodle 利用の問題点, 解決方法を探るへ
 講師:倉館健一・濱野英巳・岡野恵
 第二部:外国語教育 meets Mac & Mac meets 外国語教育(3)
 講師:徳永健一・パトリス ルロワ・濱野英巳・倉館健一
 成果公開:『2008 年度研究活動報告書』101-104 頁
 http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_27.html

- 教職員対象ワークショップ「外国語の授業における ICT の利用」第 2 回
 開催日時:2008 年 10 月 4 日(土)15:00-18:00
 開催場所:日吉キャンパス・第三校舎外国語ラウンジ
 内容: 第一部:Moodle ワークショップ(2)へ効果的な活動の設定方法へ
 講師:倉館健一・岡野恵
 第二部:Keynote の使い方
 講師:徳永健一・倉館健一
 成果公開:『2008 年度研究活動報告書』101-104 頁
 http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_26.html

- 「外国語絵本ワークショップ」Part1.英語絵本の読み聞かせ
 開催日時:2008 年 9 月 20 日(土)
 開催場所:慶應義塾普通部図書室
 講師:リーパー すみ子
 <http://aop.flang.keio.ac.jp/img/ws080920.pdf>

- 教職員対象ワークショップ「外国語の授業における ICT の利用」第 1 回
 開催日時:2008 年 8 月 2 日(土)15:00-18:00
 開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ 3
 内容: 第一部:Moodle ワークショップ へ学習コミュニティの形成へ
 講師:倉館健一・濱野英巳・岡野恵
 第二部:外国語教育 meets Mac & Mac meets 外国語教育
 講師:徳永健一・パトリス ルロワ・濱野英巳・倉館健一
 成果公開:『2008 年度研究活動報告書』101-104 頁
 http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_25.html

- 教職員対象ワークショップ「"inprov" Your FL (Foreign Language) Classroom」
 開催日時:2008 年 6 月 28 日(土)
 招聘講師:John Wilkerson
 司会:William Snell
 成果公開:http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_21.html

- Fest-Deiz 「熱狂の日」@日吉キャンパス・多文化・多民族共生の祝祭
開催日時:2008年6月12日(木)~6月14日(土)
共催:HAPP (Hiyoshi Art & Performance Project)
成果公開:http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_20.html

- ワークショップ「からだと言葉をつなげよう—ドラマを通じた言語教育を考える—」
開催日:2007年7月28日(土)
開催場所:日吉キャンパス
成果公開:『2007年度研究活動報告書』54-59頁

- Hip-Hop 101
開催日:2007年1月11日(木)18:30-20:00
開催場所:日吉キャンパス・第四校舎 J414
講師:Clyde Henry Lewis, Jr. Richard Burrows
成果公開:http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_8.html
<http://flang.keio.ac.jp/modules/news/article.php?storyid=125>

- 教職員向け Jazz Chants ワークショップ
開催日:2006年12月12日(火)
招聘講師:Carolyn Graham
開催形態:2時間半の1セッション
成果公開:『2006年度研究活動報告書』58-60頁
http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_2.html

- 学生向け Jazz Chants ワークショップ
開催日:2006年11月15日(水)
招聘講師:Carolyn Graham
開催形態:90分×2回
成果公開:『2006年度研究活動報告書』58-59頁

- 「ドイツ語教授法開発ワークショップ」
開催日時:2006年11月1日(水)
開催場所:日吉キャンパス
講師:ケルン ダニエル

3-2) 『慶應義塾外国語教育グランドデザイン(提言)』策定全体会議

最終年度に、『慶應義塾外国語教育グランドデザイン(提言)』の提言をまとめるため、以下の会合を開催した。

- 第4回会合
開催日時:2010年9月14日(火)13:00-17:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
内容:グランドデザイン提言(最終報告書)の詳細について

- 第3回会合
開催日時:2010年8月19日(火)13:00-20:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
内容:グランドデザイン提言(最終報告書)の詳細について

- 第2回会合
開催日時:2010年7月20日(火)16:00-18:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
内容:グランドデザイン提言(最終報告書)のドラフトについて

- 第1回会合
開催日時:2010年6月4日(金)18:00-20:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
内容:グランドデザイン提言(最終報告書)の取りまとめ方針について

3-3) パネルディスカッション

- 多言語・多文化の学校を考える: 今私たちに何ができるか、何をすべきか

開催日時: 2007年6月15日(金)14:00-19:00

開催場所: 日吉キャンパス・来往舎シンポジウムスペース

主催: 慶應義塾大学 21世紀 COE「日本・アジアにおける総合政策学先導拠点」

共催: 外国語教育研究センター 学術フロンティア行動中心 複言語学習(AOP)プロジェクト

司会・企画: 吉村雅仁・古石篤子

プログラム:

講演 Ofelia García “Language policy and bilingual education in New York City”(ニューヨークにおける言語政策と二言語併用教育) 使用言語: 英語・日本語(日本語同時通訳)

プレゼンテーション

福田浩子 「日本の言語教育の諸問題: 国語教育と英語教育との齟齬」

上谷順三郎 「言語教育としての国語教育」

富田祐一 「言語教育としての英語教育: 異文化間教育の立場からの提言」

成果公開: http://aop.flang.keio.ac.jp/section_8/page_7.html

- 言語教育における多様性について: 初等・中等教育における政策と実践

開催日時: 2007年1月13日(土)14:00-17:00

開催場所: 日吉キャンパス・来往舎中会議室

主催: 慶應義塾大学 21世紀 COE 日本・アジアにおける総合政策学先導拠点—ヒューマンセキュリティの基盤的研究を通して—『ヒューマンセキュリティの基盤』としての言語政策チーム:

<http://coe21-policy.stc.kieio.ac.jp/>

共催: 外国語教育研究センター 学術フロンティア行動中心 複言語学習(AOP)プロジェクト

企画・司会: 古石篤子

プログラム:

講演 Christine Hélot “From bilingual to multilingual classrooms: Rethinking teacher education”

プレゼンテーション

吉村雅仁 「言語意識教育のためのカリキュラム開発: 『見える』カリキュラムと『見えない』カリキュラム」

金子昭生 「小学校英会話活動での外国語の紹介について」

跡部智 「中学校での複言語教育の試み」

古石篤子 「ヨーロッパの挑戦: Eulang と EOLE」

成果公開: 古石篤子編著『言語教育における多様性について: 初等・中等教育における政策と実践(1)(2)』慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科(総合政策学ワーキングペーパーシリーズ No.136, 137). 2008年

- 慶應義塾英語一貫教育フォーラム

テーマ: 英語教育の目標設定と評価のための共通参照を考える

開催日時: 2007年1月13日(土)16:00-19:00

開催場所: 日吉キャンパス・来往舎

プログラム:

第一部:

講演 境一三 「ヨーロッパ共通参照枠と Language Portfolio, Passport」

第二部:

意見交換会 「慶應の英語教育での Portfolio, Can-do list の応用を考える」

成果公開: http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_15.html

3-4) 報告会

- AOP プロジェクト 2009 年度研究活動報告会(中間報告会)

開催日時: 2009年5月9日(土)13:00-16:25

開催場所: 日吉キャンパス・来往舎シンポジウムスペース

プログラム

I. 言語教育政策提言ユニット

1. 境一三 「ユニットリーダーによる活動概要」

2. 境一三 「言語教育政策研究」

3. 境一三 「教員養成研究 教員養成・研修システム確立のための基礎研究」

4. 志村明彦 「慶應義塾における小中高大一貫教育のグランドデザイン研究: ニーズ分析」

II. 行動中心複言語・複文化能力開発ユニット 発表

5. 金田一真澄 「ユニットリーダーによる活動概要」
6. 跡部智 「言語プロフィール調査および共通参照レベル対応型テストの開発に関する研究」
7. 跡部智 「日本語版言語ポートフォリオ開発に関する研究」
8. 倉館健一 「多言語発音教材制作研究」
9. 倉館健一・ルロワ パトリス 「配信型マルチメディア教材製作研究」
10. 倉館健一・日向清人 「コミュニケーションアプローチによる複言語教材開発に備えた言語機能別の表現類型リストの研究」
11. 古石篤子 「より豊かな言語教育を求めて ―ことばへの気づき・インテンシブ外国語・ろう児教育―」
12. 斎藤太郎・吉村創・江面快晴 「ドイツ語リーディング学習における多読の環境整備およびその学習効果に関する研究」
13. 境一三・三ツ石祐子 「外国語学習入門期における発音指導の研究―ドイツ語におけるスーパーセグメンタルな要素を中心に―」
14. ヤング ジェローム <実験授業> 「Express yourself! The Music of English」
15. シャーロット ミハエル 「コンテンツとタスク中心の教授法におけるドイツ語学習過程の調査研究」
16. 森泉 「複言語・複文化能力開発」部門 ―「複言語のすすめ」プロジェクト―
17. 八代京子・吉田友子 「企業が求める異文化コミュニケーション能力」
18. 庭井史絵・跡部智 「多言語絵本を用いた言語意識教育に関する研究」

III. 自律学習環境整備ユニット

19. 倉館健一 「ユニットリーダーによる活動概要」
20. 倉館健一 「学校間連携による同期型・非同期型協調学習コミュニティ形成と学習環境デザイン研究」
21. 藤田真理子 「Interactive Voice Community (IVC) の構築に関する研究」
22. 藁谷郁美 「ITを利用した外国語学習環境の構築」
23. 倉館健一・濱野英巳 「Blended Learning のための教育・学習環境創出研究」
24. 岡野恵・井上京子 <実験授業> 「1ヶ月集中！オンライン学習法で英語を鍛えよう！」
25. 重松淳・倉館健一・濱野英巳 「リソースシェアリングプロジェクト」
26. 吉田友子・倉館健一・五十嵐玲美・ルイス クライド 「多文化共生に向けた感性の涵養のための外国語ラウンジにおける異文化体験の機会創出の試み」

● AOP プロジェクト 2008 年度研究活動報告会(中間報告会)

開催日時: 2008 年 5 月 31 日(土)13:00-17:00

開催場所: 日吉キャンパス・来往舎シンポジウムスペース

プログラム

発表

- 金田一真澄 「AOP プロジェクトの概要」
- 森泉 「複言語・複文化能力開発」
- 吉田友子 「異文化トレーニング」
- 跡部智 「言語プロフィール調査」
- 倉館健一 「異文化間交流と学習環境の創出」
- 境一三 「AOP プロジェクト総括」

アドバイザー

- 壇辻正剛 (京都大学教授)
- 嘉数勝美 (国際交流基金日本語事業部部長)
- 小池生夫 (明海大学名誉教授、客員教授)
- 吉島茂 (聖徳大学教授)
- 大谷泰照 (名古屋外国語大学教授)
- 朝吹亮二 (法学部教授)
- 伊藤行雄 (経済学部教授)
- 関根謙 (文学部教授)
- 萩原真一 (理工学部教授)
- 羽田功 (経済学部教授)
- 金子郁容 (政策・メディア研究科教授)

● AOP プロジェクト 2007 年度研究活動報告会

開催日時:2007 年 12 月 22 日(土)13:00-16:30

開催場所:日吉キャンパス・来往舎シンポジウムスペース

プログラム

カテゴリ A:「研究企画ごとの報告」

1. 倉館健一 「学校間連携による同期型・非同期型協調学習コミュニティ形成と学習環境デザイン研究」
2. 倉館健一 「研究企画:オープン外国語学習コース構築研究」
3. 日向清人 「コミュニティカティブ・アプローチによる複言語教材開発に備えた言語機能別の表現類型リストの研究」
4. 境一三 「言語教育グランドデザイン研究」
5. 太田達也・藁谷郁美・倉林修一・増子宗雄 「IT を利用した外国語学習環境の構築」
6. 吉田友子 「異文化トレーニングプロジェクト」
7. ルロワ パトリス 「配信型音声教材制作研究」

カテゴリ B:「出張調査報告」

8. 倉館健一 「ケベック州モントリオールおよびニューブランズウィック州における言語教育の概要と自律学習環境整備状況について」
9. 山下輝彦・松田かの子 「延辺朝鮮族自治州延吉市におけるバイリンガル教育について」

● AOP プロジェクト 2006 年度研究活動報告会

開催日:2006 年 12 月 9 日(土)

開催場所:日吉キャンパス・第三校舎

プログラム

1. 境一三・倉館健一 「アルザス地方のバイリンガル教育状況およびパリ EABJM での複言語教育状況調査報告」
2. 境一三 「ベルリンのヨーロッパ学校における複言語教育状況調査」
3. 山下輝彦 「雲南省における言語教育状況調査」
4. 及川紗良・横川真理子 「複言語・複文化環境のケーススタディーとしての Hockerill Anglo-European College」
5. 吉田友子・Clyde Lewis 「実験授業 Understanding Culture Through Photography プロジェクト」
6. 吉田友子他 「企業が求める異文化間コミュニケーション能力」
7. 倉館健一 「ストラスブール大学 ULP マルチメディアおよび外国語自律学習センターSPIRAL での自律学習状況調査」
8. 跡部智・江波戸慎 「普通部 Self-Access Learning Center・中等部 English Room での自律学習研究」
9. ルロワ パトリス 「配信型フランス語マルチメディア共通副教材制作研究」

成果公開: http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_3.html

3-5) 言語教育政策提言勉強会

● 第 13 回勉強会

開催日時:2010 年 9 月 21 日(火)12:00-14:00

開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ 3

● 第 12 回勉強会

開催日時:2010 年 9 月 16 日(木)16:00-19:00

開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ 3

● 第 11 回勉強会

開催日時:2010 年 8 月 19 日(木)11:00-13:00

開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ 3

● 第 10 回勉強会

開催日時:2010 年 8 月 9 日(月)15:00-18:00

開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ 3

- 第9回勉強会
開催日時:2010年7月26日(金)15:00-18:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
- 第8回勉強会
開催日時:2010年7月12日(月)13:00-15:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
- 第7回勉強会
開催日時:2010年6月25日(金)17:30-19:30
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
- 第6回勉強会
開催日時:2010年6月14日(月)15:00-18:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
- 第5回勉強会
開催日時:2010年5月31日(月)15:00-18:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
- 第4回勉強会
開催日時:2010年5月21日(金)16:00-18:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
- 第3回勉強会
開催日時:2010年5月14日(金)16:00-18:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
- 第2回勉強会
開催日時:2010年5月7日(金)16:00-18:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3
- 第1回勉強会
開催日時:2010年4月16日(金)16:00-18:00
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3

資料 4 各年度研究企画一覧

2006 年度研究企画一覧

No.	研究企画名	研究企画代表
2006-I-1	言語教育政策勉強会	境一三
2006-I-2	各国言語教育実態報告	境一三
2006-I-3	視察報告：日本におけるイマージョン教育と言語教育政策提言プロジェクト	志村明彦
2006-I-4	教員養成者育成の状況調査(フランス語)	倉館健一
2006-IIa-1	慶應義塾英語一貫教育フォーラム開催	跡部智
2006-IIa-2	高等学校における TOEIC Bridge, TOEIC IP, GTEC for STUDENTS	持原なみ子・ 倉本和晃
2006-IIb-1	ベルリン州ヨーロッパ学校視察	境一三
2006-IIb-2	アルザス地方、およびバリの私立学校におけるバイリンガル教育視察調査	倉館健一・ 境一三
2006-IIb-3	中国雲南省における複言語教育の実情調査	山下輝彦
2006-IIb-4	実験授業「複言語コミュニケーションクラス」	境一三ほか
2006-IIb-5	パネルディスカッション「言語教育における多様性について：初等・中等教育における政策と実践」	古石篤子
2006-IIb-6	ジャズチャンツ・ワークショップ	日向清人
2006-IIc-1	異文化トレーニング	吉田友子
2006-IIc-2	Capitalizing on cultural understanding: Creating a bridge of cultural understanding for American and Japanese students	ルイス クライド
2006-IIc-3	Alternatives in publicly-funded education in England: The case of Hockerill Anglo-European College	横川[室]真理子
2006-IIc-4	企業の求める異文化コミュニケーション能力：フォーカス・グループ インタビュー調査から	鈴木有香
2006-IIc-5	Using film and photography for intercultural communication in the language: Preliminary research	エインジ マイケル
2006-IIIa-1	テレビ会議	國枝孝弘
2006-IIIa-2	実験授業「メディアとドイツ語」	太田達也
2006-IIIa-3	フランス語とドイツ語の podcasting について	國枝孝弘・ 太田達也
2006-IIIa-4	普通部における多読授業	垂井香
2006-IIIa-5	実験授業「Reading for pleasure」	水野耕太郎
2006-IIIa-6	Interactive voice community	藤田真理子
2006-IIIb-1	自律学習のための環境構築 1: 外国語ラウンジのコンセプト化と再整備の試み	倉館健一
2006-IIIb-2	自律学習のための環境構築 2: 普通部における Self-access language learning center (SLC)の試み	跡部智
2006-IIIb-3	自律学習のための環境構築 3: 中等部における English Room の試み	江波戸慎
2006-IIIb-4	連携性向上のための基盤整備	跡部智
2006-IIIb-5	TV 会議拠点形成	重松淳

2007 年度研究企画一覧

No.	研究企画名	研究企画代表
2007-I-1	言語教育政策	境一三
2007-I-2	教員養成のための基礎研究	境一三
2007-I-3	慶應義塾における一貫英語教育のためのグランドデザイン研究:ニーズ分析	志村明彦
2007-I-4	一貫言語教育のためのグランドデザイン研究:プログラム評価	志村明彦
2007-I-5	ブリヤード共和国(ロシア・シベリア連邦管区)ウラン・ウデにおける調査	三ッ石祐子
2007-I-6	ニューメキシコ州のバイリンガル教育	岡田吉央
2007-I-7	延辺朝鮮族自治州延吉市におけるバイリンガル教育の現状について	山下輝彦
2007-I-8	台湾における小中一貫教育での英語教育、外国語教育の現状について	清水建詞
2007-IIa-1	言語プロフィール調査および共通参照レベル対応型テストの開発に関する研究	跡部智
2007-IIa-2	日本語版言語ポートフォリオ開発に関する研究	跡部智
2007-IIb-1	「複言語のすすめ」プロジェクト	金田一真澄
2007-IIb-2	コミュニケーション・アプローチによる複言語教材開発に備えた言語機能別の表現類型リストの研究	倉館健一
2007-IIb-3	ドイツ語リーディング学習における多読の環境整備およびその学習効果に関する研究	斎藤太郎
2007-IIb-4	多言語発音教材政策研究	倉館健一
2007-IIb-5	配信型マルチメディア教材制作研究	倉館健一
2007-IIb-6	より豊かな言語教育を求めて:ことばへの気づき・インテンシブ外国語・ろう児教育	古石篤子
2007-IIb-7	ドイツ語発音:ドイツ語のリズムにのろう!	境一三
2007-IIb-8	からだと言葉をつなげよう:ドラマを通じた言語教育を考える	横山千晶
2007-IIc-1	異文化トレーニング	吉田友子
2007-IIc-2	Corporate social responsibility (CSR)	吉田友子
2007-IIc-3	Preparing students for their sojourn abroad: A brief report	吉田友子
2007-IIc-4	Report on e-lounge	ルイス クライド
2007-IIIa-1	学校間連携による同期型・非同期型協調学習コミュニティ形成と学習環境デザイン研究	倉館健一
2007-IIIa-2	初年次外国語教育における大学間 CSCL 研究(OK プロジェクト)	境一三
2007-IIIa-3	遠隔テレビ会議による互恵的学習環境の創出の試み—パリ第七大学との交流を通じて	國枝孝弘
2007-IIIa-4	Interactive voice community (IVC)	藤田真理子
2007-IIIb-1	オープン外国語学習コース構築研究	重松淳
2007-IIIb-2	IT を利用した外国語学習環境の構築	太田達也
2007-IIIb-3	多文化共生に向けた感性の涵養のための外国語ラウンジにおける異文化体験の機会創出の試み	倉館健一

2008 年度研究企画一覧

No.	研究企画名	研究企画代表
2008- I -1	言語教育政策研究	境一三
2008- I -2	教員養成・研修システム確立のための基礎研究	境一三
2008- I -3	慶應義塾における小中高大一貫英語教育のグランドデザイン研究: ニーズ分析	志村明彦
2008- II a-1	言語プロフィール調査および共通参照レベル対応型テストの開発に関する研究	跡部智
2008- II a-2	日本語版言語ポートフォリオ開発に関する研究	跡部智
2008- II b-1	多言語絵本を用いた言語意識教育に関する研究	跡部智
2008- II b-2	多言語発音教材制作研究	倉館健一
2008- II b-3	配信型マルチメディア教材制作研究	倉館健一
2008- II b-4	コミュニケーション・アプローチによる複言語教材開発に備えた言語機能別の表現類型リストの研究	倉館健一
2008- II b-5	多言語パラレルコーパス構築とそれを用いた多言語学習ツールの開発	倉館健一
2008- II b-6	より豊かな言語教育を求めて: ことばへの気づき・インテンシブ外国語・ろう児教育	古石篤子
2008- II b-7	ドイツ語リーディング学習における多読の環境整備およびその学習効果に関する研究	斎藤太郎
2008- II b-8	コンテンツとタスク中心の教授法におけるドイツ語学習過程	シャールト ミ ヒヤエル
2008- II b-9	「複言語のすすめ」プロジェクト	森泉
2008- II b-10	外国語学習入門期における発音指導の研究: ドイツ語におけるスーブラセグメンタルな要素を中心に	境一三
2008- II b-11	Experimental class "Express yourself! The music of English"	ヤング ジェロ ーム
2008- II c-1	異文化トレーニング	吉田友子
2008- II c-2	企業が求める異文化コミュニケーション能力: グローバリゼーションは日本企業が必要とする異文化コミュニケーション・スキルにどのような影響を与えたか	吉田友子
2008- II c-3	Defining and identifying cultural dimensions of corporate social responsibility	吉田友子
2008- III a-1	学校間連携による同期型・非同期型協調学習コミュニティ形成と学習環境デザイン研究	倉館健一
2008- III a-2	実験授業「1ヶ月集中! オンライン学習法で英語を鍛えよう!」	岡野恵・ 井上京子
2008- III a-3	Interactive voice community (IVC)の構築に関する提言	藤田真理子
2008- III b-1	IT を利用した外国語学習環境の構築	太田達也
2008- III b-2	Blended Learning のための教育・学習環境創出研究	倉館健一
2008- III b-3	リソースシェアリングプロジェクト	重松淳
2008- III b-4	多文化共生に向けた感性の涵養のための外国語ラウンジにおける異文化体験の機会創出の試み	吉田友子

2009 年度研究企画一覧

No.	研究企画名	研究企画代表
2009- I -1	言語教育政策研究	境一三
2009- I -2	教員養成・研修システム確立のための基礎研究	境一三
2009- II a-1	言語プロフィール調査および共通参照レベル対応型テストの開発に関する研究	跡部智
2009- II a-2	日本語版言語ポートフォリオ開発に関する研究	跡部智
2009- II b-1	多言語発音教材制作研究	倉館健一
2009- II b-2	配信型マルチメディア教材制作研究	倉館健一
2009- II b-3	コミュニケーション・アプローチによる複言語教材開発に備えた言語機能別の表現類型リストの研究	倉館健一
2009- II b-4	より豊かな言語教育を求めて:ことばへの気づき・インテンシブ外国語・ろう児教育(2)	古石篤子
2009- II b-5	ドイツ語リーディング学習における多読の環境整備およびその学習効果に関する研究	斎藤太郎
2009- II b-6	外国語学習入門期における発音指導の研究:ドイツ語におけるスーパーセグメンタルな要素を中心に	境一三
2009- II b-7	コンテンツとタスク中心の教授法におけるドイツ語学習過程の調査研究	シャールト ミ ヒヤエル
2009- II b-8	複言語・複文化能力開発部門:「複言語のすすめ」プロジェクト	金田一真澄
2009- II c-1	企業が求める異文化コミュニケーション能力	吉田友子
2009- III a-1	学校間連携による同期型・非同期型協調学習コミュニティ形成と学習環境デザイン研究	倉館健一
2009- III a-2	IVC Blogger Journal 教職	藤田真理子
2009- III b-1	IT を利用した外国語学習環境の構築(3)	藁谷郁美
2009- III b-2	Blended Learning のための教育・学習環境創出研究	倉館健一
2009- III b-3	リソースシェアリングプロジェクト	重松淳
2009- III b-4	多文化共生に向けた感性の涵養のための外国語ラウンジにおける異文化体験の機会創出の試み	吉田友子

2010 年度研究企画

No.	研究企画名	研究企画代表
2010-I-1	言語教育政策研究	境一三
2010-I-2	複文化能力開発における弱者・マイノリティへのディスコースに関する基礎的研究	境一三
2010-II a-1	日本語版言語ポートフォリオ開発に関する研究	跡部智
2010-II a-2	日本語版言語ポートフォリオの実践と解釈に関する質的研究	跡部智
2010-II a-3	ハノイ工科大学生の専門分野と日本語学習に関する調査及びグループプロフィールの開発	平高史也
2010-II a-4	言語プロフィール調査および共通参照レベル対応型テスト開発に関する研究	跡部智
2010-II a-5	スピーキングテストに呼応した教材開発の研究	跡部智
2010-II b-1	「複言語のすすめ」プロジェクト	金田一真澄
2010-II b-2	複言語・複文化的「居場所」における自律的「学び」創出の研究:「三田の家」のエスノグラフィー	手塚千鶴子
2010-II b-3	より豊かな言語教育を求めて:ことばへの気づき・インテンシブ外国語・ろう児教育(3)	古石篤子
2010-II b-4	外国語学習入門期における発音指導の研究: ドイツ語におけるスーブラセグメンタルな要素を中心に	境一三
2010-II b-5	コンテンツとタスク中心の教授法におけるドイツ語学習過程の調査研究	シャールト ミ ヒヤエル
2010-II b-6	コミュニケーション・アプローチによる複言語教材開発に備えた言語機能別の表現類型リストの研究	境一三
2010-II b-7	ドイツ語リーディング学習における多読の環境整備およびその学習効果に関する研究	斎藤太郎
2010-II b-8	多言語発音教材制作研究	境一三
2010-III a-1	英語教育実習生の自律的成長を促す要因	藤田真理子
2010-III a-2	ドラマを使った言語教育法の開発	横山千晶
2010-III b-1	IT を利用した外国語学習環境の構築(4)	藁谷郁美
2010-III b-2	多言語絵本を用いた言語意識教育:学校図書館による外国語学習支援・学習環境整備の検証	跡部智
2010-III b-3	配信型マルチメディア教材制作研究	古石篤子

資料5 慶應義塾大学外国語教育研究センター規程

平成15年7月4日制定
平成19年7月10日改正

(設置)

第1条 慶應義塾大学(以下「大学」という。)に、慶應義塾大学外国語教育研究センター (Keio Research Center for Foreign Language Education)(以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、外国語教育に関する研究を先導し、義塾の外国語教育を充実させることを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 外国語教育に関する研究の立案・推進ならびに支援
- 2 一貫教育校・大学・大学院における外国語教育の支援ならびに連携推進
- 3 慶應義塾外国語学校の運営に関する支援
- 4 その他センターの目的達成のために必要な事業

(所在地)

第4条 センターは、本部を日吉キャンパスに置き、支部を日吉キャンパスおよび三田キャンパスに置く。

(組織)

第5条 ① センターに、次の教職員を置く。

- 1 所長 1名
- 2 副所長 若干名
- 3 所員 若干名
- 4 本部事務長 1名
- 5 支部事務長 各1名(日吉・三田)
- 6 職員 若干名

② 所長は、センターを代表しその業務を統括する。

③ 副所長は、所長を補佐し、所長事故あるときはその職務を代行する。研究推進、学事推進、事業推進、一貫教育校との連携推進等を担当し、関連する業務を統括する。

④ 所員は、専任所員、兼担所員または兼任所員としセンターの目的達成のために必要な職務を行う。

⑤ 国内および海外の大学、専門研究機関等からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。

⑥ 本部事務長は、所長の命を受けてセンター全般の事務を統括する。

⑦ 各支部事務長は、本部事務長の命を受けて各支部の事務を統括する。

⑧ 職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。

(委員会)

第6条 ①センターに、次の委員会を置く。

- 1 センターに、外国語教育研究センター協議会(以下、「協議会」という。)を置く。
- 2 協議会の下に、運営委員会を置く。
- 3 運営委員会の下に、研究推進委員会、学事推進委員会、事業推進委員会を置く。

② センターに、必要に応じて専門委員会を置くことができる。

(協議会)

第7条 ① 協議会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 本部事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 大学各大学院研究科委員長
- 7 大学通信教育部長
- 8 各一貫教育校学校長
- 9 外国語学校長
- 10 メディアセンター所長
- 11 日吉メディアセンター所長

- 12 インフォメーションテクノロジーセンター所長
 - 13 日吉インフォメーションテクノロジーセンター所長
 - 14 大学言語文化研究所長
 - 15 大学国際センター所長
 - 16 大学日本語・日本文化教育センター所長
 - 17 大学教養研究センター所長
 - 18 日吉キャンパス事務長
 - 19 その他協議会が必要と認めた者
- ② 協議会の委員長には、所長が当たる。委員長は、協議会を招集し、その議長となる。
 - ③ 委員長は、協議会の承認を経て委員若干名を加えることができる。
 - ④ 協議会は、次の事項を審議する。
 - 1 センターの予算、決算に関する事項
 - 2 運営委員会の発議に基づくセンターの教育・研究ならびに教員および所員の人事に関する事項
 - 3 センターに関するその他の重要事項
 - ⑤ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。

(運営委員会)

第8条 ① 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
 - 2 副所長
 - 3 本部事務長
 - 4 研究推進委員会、学事推進委員会、事業推進委員会の各委員から運営委員会が必要と認めた者
 - 5 各一貫教育校兼任所員 各1名
 - 6 外国語学校主事
 - 7 その他運営委員会が必要と認めた者
- ② 運営委員会の委員長には、所長が当たる。委員長は、運営委員会を招集しその議長となる。
 - ③ 運営委員会は次の事項を審議する。
 - 1 センターの教育・研究活動全般の基本方針と将来構想に関する事項
 - 2 専門委員会の設置に関する事項
 - 3 センターの教員および所員の人事に関する事項
 - 4 研究推進委員会、学事推進委員会、事業推進委員会の権限を越える判断を要する事項
 - 5 協議会から委嘱された事項
 - 6 その他必要と認める事項
 - ④ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。
 - ⑤ 運営委員会は、必要に応じて専門委員会に諮問することができる。

(研究推進委員会)

第9条 ① 研究推進委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 副所長(研究推進担当)
 - 2 本部事務長
 - 3 専任所員または兼任所員の中から運営委員会が必要と認めた者
 - 4 その他研究推進委員会が必要と認めた者
- ② 研究推進委員会の委員長には、副所長(研究推進担当)が当たる。委員長は研究推進委員会を招集しその議長となる。
 - ③ 研究推進委員会は、次の事項を審議する。
 - 1 外国語教育に関連する研究活動の企画に関する事項
 - 2 外国語教育研究の支援および研究全般に関する事項
 - 3 その他必要と認める事項
 - ④ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。

(学事推進委員会)

第10条 ① 学事推進委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 副所長(学事推進担当)
 - 2 副所長(一貫教育校担当)
 - 3 本部事務長
 - 4 専任所員または兼任所員の中から、運営委員会が必要と認めた者
 - 5 その他、学事推進委員会が必要と認めた者
- ② 学事推進委員会の委員長には、副所長(学事推進担当)が当たる。委員長は学事推進委員会を招集しその議長となる。

- ③ 学事推進委員会は、次の事項を審議する。
- 1 センターが設置する科目のカリキュラムおよびその担当者に関する事項
 - 2 センターが設置する科目の運営および教育全般に関する事項
 - 3 その他必要と認める事項
- ④ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。

(事業推進委員会)

第11条 ① 事業推進委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 副所長(事業推進担当)
 - 2 本部事務長
 - 3 専任所員または兼担所員の中から、運営委員会が必要と認めた者
 - 4 その他事業推進委員会が必要と認めた者
- ② 事業推進委員会の委員長には、副所長(事業推進担当)が当たる。委員長は事業推進委員会を招集しその議長となる。
- ③ 事業推進委員会は、次の事項を審議する。
- 1 外国語教育に関連する支援事業の企画、運営、広報等に関する事項
 - 2 外国語教育に関連する環境整備および支援全般に関する事項
 - 3 その他必要と認める事項
- ④ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。

(専門委員会)

第12条 ① 専門委員会は、運営委員会から諮問されたセンターの研究・教育・運営等に関する課題について広く検討を行う。

② 専門委員会は、運営委員会が必要と認めた者をもって構成し、委員は所長が任命し、委員長は委員のうちから互選する。

(教職員の任免)

第13条 ① センターの教職員の任免は次の各号による。

- 1 所長は、協議会の推薦に基づき、大学評議会の議を経て塾長が任命する。
 - 2 副所長は、所長の推薦に基づき、協議会の承認を経て塾長が任命する。
 - 3 所員は、運営委員会の推薦に基づき、協議会の承認を経て塾長が任命する。
 - 4 本部事務長、各支部事務長および職員については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。
- ② 所長、副所長の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。
- ③ 兼担所員の任期は2年とし、重任を妨げない。
- ④ 専任所員は、有期の大学教員とし、大学評議会の議を経て塾長が任命する。
- ⑤ 助教の任用期間は、最長5年とすることができる。
- ⑥ 兼任所員の任期は、1年とし重任を妨げない。
- ⑦ 訪問研究者については、別に定める。
- ⑧ 専門委員の任期は、運営委員の任期内における専門委員会の活動期間とする。ただし最長2年とし、重任を妨げない。

(経理)

第14条 センターの経理は、「慶應義塾経理規程(昭和46年2月15日制定)」の定めるところによる。

(規程の改廃)

第15条 この規程の改廃は、協議会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附 則 (平成15年7月4日)

この規程は、平成15年10月1日から施行する。

附 則 (平成19年7月10日)

この規程は、平成19年10月1日から施行する。

資料 6 若手研究者育成の状況

センター助教(有期)

氏名	学位	着任時期	就職状況
鈴木 雅子	慶應義塾大学大学院専攻政策・メディア研究科後期博士課程単位取得退学	2010年4月～ 現在	—

PD

氏名	学位	着任時期	就職状況
吉村 創	慶應義塾大学大学院文学研究科独文学専攻研究科後期博士課程単位取得退学	2008年4月～ 2009年3月	慶應義塾高等学校教諭
井本 由紀	DPhil in Social Antholopology, University of Oxford	2009年4月～ 2010年3月	慶應義塾大学理工学部助教
鈴木 雅子	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程単位取得退学	2009年4月～ 2010年3月	慶應義塾大学外国語教育研究センター助教(有期)
島崎 のぞみ	日本大学大学院文学研究科ドイツ文学専攻博士後期課程満期退学	2010年4月～ 現在	他大学非常勤講師

RA

氏名	学位等	着任時期	就職状況
江面 快晴	慶應義塾大学大学院文学研究科独文学専攻後期博士課程・大学院生	2008年4月～ 2010年3月	慶應義塾大学文学部非常勤講師
谷内 正裕	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程・大学院生	2008年4月～ 2009年3月	他大学非常勤講師、 民間研究機関研究員
中村 文紀	慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻後期博士課程・大学院生	2010年4月～ 現在	他大学非常勤講師

常勤研究補助員

氏名	学位等	着任時期	進路・就職状況
ルイス クライド	Master of Educational Administration, University of Hawaii at Manoa	2007年6月～ 2008年7月	他大学非常勤講師
原田 依子	慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了	2008年4月～ 2009年3月	他大学非常勤講師
五十嵐 玲美	パリ第3大学フランス語教授法修士課程修了	2008年4月～ 2010年3月	他外国語学校講師
佐野 彩	東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士課程修了	2008年4月～ 2010年3月	他大学大学院博士課程進学
蓮見 二郎	PhD in Education, University of Cambridge	2010年4月～ 2010年9月	九州大学法学部准教授
神原 慧	国際基督教大学大学院比較文化研究科博士前期課程修了	2010年10月～ 現在	—

若手研究者の研究業績一覧(五十音順)

若手研究者<雑誌論文>

● 五十嵐 玲美

著者名	論文標題		
倉館健一・五十嵐玲美・濱野英巳・岡野恵・三橋紫・ル=ラディク モニク	多様化する学生とその『学び』のあり方:ことばの『学び』を育てるプロジェクト:教師の『学び』のコミュニティ創出の試み		
雑誌名	巻	発行年	ページ
関西フランス語教育研究会	24号	平成22年	21-25

著者名	論文標題		
Kuradatge, K., Leroy, P., & Igarashi, R.	Moteur!, vers un plurilinguisme pluriculturel: Pourquoi faut-il reconstruire les savoirs? (Production ou reproduction?)		
雑誌名	巻	発行年	ページ
Rencontres Pédagogiques du Kansai	23	平成21年	8-13

著者名	論文標題		
五十嵐玲美・吉田友子・ルイス クライド・三橋紫・倉館健一	ラウンジの冒険: 互惠的学習環境の創出(言語と文化)		
雑誌名	巻	発行年	ページ
Rencontres Pédagogiques du Kansai	23号	平成21年	35-40

● 江面 快晴

著者名	論文標題		
吉村創・江面快晴・斎藤太郎	慶應義塾における「ドイツ語多読授業」の試み:ドイツ語で読書を楽しむための環境整備		
雑誌名	巻	発行年	ページ
ドイツ語教育(ドイツ語教育部会報 58)	10	平成20年	58-64

● 神原 慧

著者名	論文標題		
中村文紀・鈴木雅子・神原慧・境一三	他人の視点を代弁することによる危険性:国際ディベート大会に見る議論における中傷表現の収集と類型化		
雑誌名	巻	発行年	ページ
第27回社会言語科学会研究大会発表論文集		平成23年	

● 佐野 彩

著者名	論文標題		
佐野彩・小林潔	世界の言葉とつきあうための導入教育:《複言語のすすめ》パンフレットの試み		
雑誌名	巻	発行年	ページ
リテラシーズ研究集会 2009『複言語・複文化主義と言語教育』予稿集		平成21年	129-134

● 島崎 のぞみ

著者名	論文標題		
島崎のぞみ・林良子・境一三	ドイツ語母音発音の獲得に関する基礎調査:A Basic Research on the Acquisition of German vowel[ü]		
雑誌名	巻	発行年	ページ
慶應義塾外国語教育研究	7	平成 23 年	73-82

著者名	論文標題		
菊地歌子・島崎のぞみ・境一三	日本人フランス語学習者のための発音学習教材:発音領域設定の試みと指導表現の類型		
雑誌名	巻	発行年	ページ
電子情報通信学会技術研究報告(音響学会)		平成 23 年	99-103

著者名	論文標題		
島崎のぞみ・跡部智	言語ポートフォリオに関する基礎的調査と展望		
雑誌名	巻	発行年	ページ
日本教育工学会第 26 回全国大会予稿集		平成 22 年	769-770

● 鈴木 雅子

著者名	論文標題		
Suzuki, M., Yano, Y., & Sakai, K.	Adaptation to Adjudication Styles in Debates and Debate Education		
雑誌名	巻	発行年	ページ
International Society for the Study of Argumentation Proceedings	2010	平成 23 年	CD-R

著者名	論文標題		
中村文紀・鈴木雅子・神原慧・境一三	他人の視点を代弁することによる危険性:国際ディベート大会に見る議論における中傷表現の収集と類型化		
雑誌名	巻	発行年	ページ
第 27 回社会言語科学会研究大会発表論文集		平成 23 年	掲載予定

著者名	論文標題		
鈴木雅子・境一三	コミュニケーション摩擦と社会公正:国際ディベート大会での調査から		
雑誌名	巻	発行年	ページ
慶應義塾外国語教育研究	7	平成 23 年	47-72

著者名	論文標題		
Suzuki, M.	The Japanese Perspective: Japan Returns!		
雑誌名	巻	発行年	ページ
iDebate	9(4)	平成 22 年	89-90

著者名	論文標題		
鈴木雅子	慶應義塾言語教育フレームワークの構築の可能性について:学術フロンティア推進事業「行動中心複言語プロジェクトの試み」		
雑誌名	巻	発行年	ページ
外国語教育フォーラム	4	平成 22 年	27-35

● 中村 文紀

著者名	論文標題		
中村文紀・鈴木雅子・神原慧・境一三	他人の視点を代弁することによる危険性:国際ディベート大会に見る議論における中傷表現の収集と類型化		
雑誌名	巻	発行年	ページ
第27回社会言語科学会研究大会発表論文集		平成23年	

● 谷内 正裕

著者名	論文標題		
谷内正裕	ローカル環境で映像管理が可能な映像編集 Web アプリケーションの実装		
雑誌名	巻	発行年	ページ
コンピュータ&エデュケーション	28	平成22年	61-66

著者名	論文標題		
Yachi, M., & Karimata, E.	Online dubbing system for language learning		
雑誌名	巻	発行年	ページ
Proceedings of World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare, & Higher Education 2008		平成20年	4029-4034

著者名	論文標題		
Yachi, M.	Web-based online video editing system for English activity		
雑誌名	巻	発行年	ページ
Proceedings of The Centre for Language Studies International Conference 2008		平成20年	CD-ROM

著者名	論文標題		
谷内正裕・狩俣恵美	映像の吹き替え活動をネットワーク上で協調的に行う Web アプリケーション		
雑誌名	巻	発行年	ページ
コンピュータ利用教育協議会 2007 PC カンファレンス論文集		平成19年	185-188

著者名	論文標題		
ロルビン ポール=C・谷内正裕	日本教育を支える発信型英語教育		
雑誌名	巻	発行年	ページ
日本教育工学会第23回全国大会予稿集		平成19年	789-790

著者名	論文標題		
古市憲寿・長谷部葉子・谷内正裕・譜久里ともみ	学生・教員のコラボレーションによるあたらしい授業シラバスの提案		
雑誌名	巻	発行年	ページ
コンピュータ利用教育協議会 2006PC カンファレンス論文集		平成19年	243-246

著者名	論文標題		
Yachi, M., & Murai, J.	An active viewing system to utilize streaming video for education		
雑誌名	巻	発行年	ページ
Proceedings of the 2007 International Symposium on Applications and the Internet Workshops		平成 19 年	38-41

著者名	論文標題		
谷内正裕	Web ブラウザ上で動作する動画編集環境の実装		
雑誌名	巻	発行年	ページ
コンピュータ利用教育協議会 2006PC カンファレンス論文集		平成 18 年	377-378

● 吉村 創

著者名	論文標題		
吉村創・江面快晴・斎藤太郎	慶應義塾における「ドイツ語多読授業」の試み:ドイツ語で読書を楽しむための環境整備		
雑誌名	巻	発行年	ページ
ドイツ語教育 (ドイツ語教育部会報 58)	10	平成 20 年	58-64

● ルイス クライド

著者名	論文標題		
倉館健一・五十嵐玲美・吉田友子・ルイス クライド・三橋紫	ラウンジの冒険: 互惠的学習環境の創出(言語と文化)		
雑誌名	巻	発行年	ページ
Rencontres Pédagogiques du Kansai	(23)	平成 21 年	35-40

著者名	論文標題		
横川(室)真理子・ルイス クライド・吉田友子	Learning cultural interaction through teleconferencing : observations of the first UCTP class (2006-2007)		
雑誌名	巻	発行年	ページ
慶應義塾外国語教育研究	5	平成 20 年	69- 114

<学会発表>

● 五十嵐 玲美

発表者名	発表標題		
五十嵐玲美・倉館健一・三橋紫・濱野英巳	多様化する学生とその「学び」のあり方		
学会名	開催地	発表年月	
第24回関西フランス語教育研究会	大阪府大阪市	平成22年3月	

発表者名	発表標題		
ルロワ パトリス・五十嵐玲美・加留部秀岳	"Moteur" ou le rond point des apprentissages		
学会名	開催地	発表年月	
第24回関西フランス語教育研究会	大阪府大阪市	平成22年3月	

発表者名	発表標題		
五十嵐玲美	異文化・複文化アプローチ型言語教育の可能性について:文化とイメージの考察から		
学会名	開催地	発表年月	
リテラシーズ研究集会 2009「複言語・複文化主義と言語教育」	東京都新宿区	平成21年9月	

発表者名	発表標題		
Kurokawa, I., Yoshida, T., Lewis, C. H. Jr., Igarashi, R., & Kuradate, K.	Creating intercultural encounters on campus: A step toward establishing intercultural understanding and world peace		
学会名	開催地	発表年月	
International Academy of Intercultural Research (IAIR) 6 th Biennial Conference	Honolulu, Hawaii, USA	平成21年8月	

発表者名	発表標題		
倉館健一・三橋紫・五十嵐玲美	『プルリリンガルラウンジ』から見える複言語・複文化主義の文脈化		
学会名	開催地	発表年月	
京都大学国際研究集会 2009	京都府京都市	平成21年4月	

発表者名	発表標題		
五十嵐玲美・吉田友子・ルイス クライド・三橋紫・倉館健一	ラウンジの冒険: 互惠的学習環境の創出(言語と文化)		
学会名	開催地	発表年月	
京都大学国際研究集会 2009	京都府京都市	平成21年3月	

発表者名	発表標題		
Kuradate, K., Leroy, P., & Igarashi, R.	Moteur!, vers un plurilinguisme pluriculturel: Pourquoi faut-il reconstruire les savoirs?		
学会名	開催地	発表年月	
第24回関西フランス語教育研究会	大阪市大阪府	平成21年3月	

● 井本 由紀

発表者名	発表標題		
井本由紀・プール グレゴリー・堀口佐知子	Incorporating the European model of language education in Japan: Examining the implementation of CEFR in foreign language education programs at Keio		
学会名	開催地	発表年月	
日本国際教育学会創設20周年記念大会	東京都府中市	平成 22 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Imoto, Y.	Working as an "international" preschool teacher: Perspectives on the organization of gender, class and ethnicity in early childhood English education in Japan		
学会名	開催地	発表年月	
ICJS Wakai Project Youth Conference: Youth Work in Contemporary Japan	Minato-ku, Tokyo	平成 21 年 6 月	

● 江面 快晴

発表者名	発表標題		
濱野英巳・江面快晴・倉館健一・坂宮朋基・谷内正裕	教員再研修のための協調学習支援基盤の構築および展望について		
学会名	開催地	発表年月	
日本独文学会 2009 年春季研究発表会	東京都港区	平成 21 年 5 月	

発表者名	発表標題		
吉村創・江面快晴・斎藤太郎	慶應義塾における「ドイツ語多読授業」試み		
学会名	開催地	発表年月	
日本独文学会関東支部主催ドイツ語教育研究会第 108 回例会	東京都港区	平成 20 年 1 月	

発表者名	発表標題		
太田達也・藁谷郁美・マルコ ラインデル・江面快晴	外国語学習環境における動画・音声配信教材の意味と機能: Podcasting を中心に		
学会名	開催地	発表年月	
日本独文学会 2007 年春季研究発表会	東京都目黒区	平成 19 年 6 月	

● 神原 慧

発表者名	発表標題		
Kohbara, A., Suzuki, M., Nakamura, F & Sakai, K.	English-language debate as an (anti-)oppressive practice: Through the lens of Social Role Valorization Theory		
学会名	開催地	発表年月	
International Journal of Arts and Sciences, Malta Conference	Gozo, Malta	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Nakamura, F., Suzuki, M., Kohbara, A., & Sakai, K.	A Classification of Offensive Speeches: Data from International Debate Competition		
学会名	開催地	発表年月	
International Journal of Arts and Sciences, Malta Conference	Gozo, Malta	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
中村文紀・鈴木雅子・神原慧・境一三	他人の視点を代弁することによる危険性: 国際ディベート大会に見る議論における中傷表現の収集と類型化		
学会名	開催地	発表年月	
第 27 回社会言語科学学会研究大会	東京都町田市	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Nakamura, F., Suzuki, M., Kohbara, A., & Sakai, K.	Don't speak for others!: Offensive speeches in international debate competitions		
学会名	開催地	発表年月	
European Conference for Academic Disciplines	Gottenheim, Germany	平成 22 年 12 月	

● 佐野 彩

発表者名	発表標題		
佐野彩・小林潔	世界の言葉とつき合うための導入教育 《複言語のすすめ》パンフレットの試み		
学会名	開催地	発表年月	
リテラシーズ研究集会 2009 「複言語・複文化主義と言語教育」	東京都新宿区	平成 21 年 9 月	

● 島崎 のぞみ

発表者名	発表標題		
島崎のぞみ・林良子・境一三	ドイツ語母音の発音トレーニングに向けた調査		
学会名	開催地	発表年月	
電子通信学会&日本音響学会音声研究会	東京都文京区	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
菊地歌子・島崎のぞみ・境一三	日本人フランス語学習者のための発音学習教材: 発音領域設定の試みと指導表現の類型		
学会名	開催地	発表年月	
電子通信学会&日本音響学会音声研究会	東京都文京区	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Shimazaki, N., Hayashi, R., & Sakai, K.	The Effect of Pronunciation Training in German vowel [ü]		
学会名	開催地	発表年月	
International Journal of Arts and Sciences, Malta Conference	Gozo, Malta	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
島崎のぞみ・林良子・境一三	発音指導方法の類型化に向けた試み: 母音の特性を利用した自律学習への糸口		
学会名	開催地	発表年月	
日本独文学会 2010 年秋季研究発表会	千葉県千葉市	平成 22 年 10 月	

発表者名	発表標題		
島崎のぞみ	指導初期の教員が抱える問題点と授業の試み:学習環境設定と評価		
学会名	開催地	発表年月	
日本独文学会 2010 年秋季研究発表会	千葉県千葉市	平成 22 年 10 月	

発表者名	発表標題		
島崎のぞみ・跡部智	言語ポートフォリオに関する基礎的調査と展望		
学会名	開催地	発表年月	
日本教育工学会第 26 回全国大会	愛知県名古屋市	平成 22 年 9 月	

発表者名	発表標題		
島崎のぞみ	学習目標および学習環境の設定:指導初期の教員の立場から		
学会名	開催地	発表年月	
日本独文学会関東支部ドイツ語教育研究会第 120 回例会	東京都港区	平成 22 年 9 月	

● 鈴木 雅子

発表者名	発表標題		
中村文紀・鈴木雅子・神原慧・境一三	他人の視点を代弁することによる危険性:国際ディベート大会に見る議論における中傷表現の収集と類型化		
学会名	開催地	発表年月	
第 27 回社会言語科学学会研究大会	東京都町田市	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Kohbara, A., Suzuki, M., Nakamura, F. & Sakai, K.	English-language debate as an (anti-)oppressive practice: Through the lens of Social Role Valorization Theory		
学会名	開催地	発表年月	
International Journal of Arts and Sciences, Malta Conference	Gozo, Malta	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Nakamura, F., Suzuki, M., Kohbara, A., & Sakai, K.	A Classification of Offensive Speeches: Data from International Debate Competition		
学会名	開催地	発表年月	
International Journal of Arts and Sciences, Malta Conference	Gozo, Malta	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Nakamura, F., Suzuki, M., Hasumi, J., & Sakai, K.	What should be avoided in intercultural communication?: Collection and classification for new language education		
学会名	開催地	発表年月	
Rhizomes VI	Brisbane, Australia	平成 23 年 2 月	

発表者名	発表標題		
Nakamura, F., Suzuki, M., Kohbara, A., & Sakai, K.	Don't speak for others!: Offensive speech in international debate competitions		
学会名	開催地	発表年月	
European Conference for Academic Disciplines	Gottenheim, Germany	平成 22 年 12 月	

発表者名	発表標題		
<u>Suzuki, M.</u>	An Approach to Analysis on Discourse toward Minority		
学会名	開催地	発表年月	
The 3 rd International Conference on Argumentation, Rhetoric, Debate and the Pedagogy of Empowerment	Maribor, Slovenia	平成 22 年 10 月	

発表者名	発表標題		
Hasumi, J., <u>Suzuki, M.</u> , Shibuya, K., & Atobe, S.	The learning of empathetic aspects of inter-cultural understanding through an international debating activity: A case of students in a Japanese upper-secondary school		
学会名	開催地	発表年月	
London International Conference on Education	Heathrow, England	平成 22 年 9 月	

発表者名	発表標題		
Hasumi, J., <u>Suzuki, M.</u> , Shibuya, K., & Atobe, S.	Rational argument and cultural sensitivity: A case of Japanese students in international debating competitions		
学会名	開催地	発表年月	
The 6 th International Citized Conference	St. Andrews, Scotland	平成 22 年 7 月	

発表者名	発表標題		
<u>鈴木雅子</u> ・蓮見二郎・跡部智	Examining the relation between eye contact ratio and speaking assessment		
学会名	開催地	発表年月	
第 10 回日本第二言語習得学会	岐阜県岐阜市	平成 22 年 6 月	

発表者名	発表標題		
<u>Suzuki, M.</u> , Hasumi J., Yano, Y., Atobe, S., & Sakai, K.	Adaptation to adjudication styles in debates and debate education		
学会名	開催地	発表年月	
The 7 th Conference on Argumentation of the International Society for the Study of Argumentation	Amsterdam, Nederlanden	平成 22 年 6 月	

発表者名	発表標題		
<u>Suzuki, M.</u> , Hasumi J. & Atobe, S.	Examining the relation between eye contact ratio and speaking assessment		
学会名	開催地	発表年月	
The 2 nd International Conference on Second Language Acquisition and Foreign Language Learning	Szczyrk, Poland	平成 22 年 5 月	

発表者名	発表標題		
<u>鈴木雅子</u>	慶應義塾言語教育フレームワーク構築の可能性について		
学会名	開催地	発表年月	
金沢大学外国語教育研究センター	石川県金沢市	平成 22 年 3 月	

● 中村 文紀

発表者名	発表標題		
中村文紀・鈴木雅子・神原慧・境一三	他人の視点を代弁することによる危険性: 国際ディベート大会に見る議論における中傷表現の収集と類型化		
学会名	開催地	発表年月	
第 27 回社会言語科学会研究大会	東京都町田市	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Kohbara, A., Suzuki, M., Nakamura, F., & Sakai, K.	English-language debate as an (anti-)oppressive practice: Through the lens of Social Role Valorization Theory		
学会名	開催地	発表年月	
International Journal of Arts and Sciences, Malta Conference	Gozo, Malta	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Nakamura, F., Suzuki, M., Kohbara, A., & Sakai, K.	A Classification of Offensive Speeches: Data from International Debate Competition		
学会名	開催地	発表年月	
International Journal of Arts and Sciences, Malta Conference	Gozo, Malta	平成 23 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Nakamura, F., Suzuki, M., Hasumi, J., & Sakai, K.	What should be avoided in intercultural communication?: Collection and classification for new language education		
学会名	開催地	発表年月	
Rhizomes VI	Brisbane, Australia	平成 23 年 2 月	

発表者名	発表標題		
Nakamura, F., Suzuki, M., Kohbara, A., & Sakai, K.	Don't speak for others!: Offensive speeches in international debate competitions		
学会名	開催地	発表年月	
European Conference for Academic Disciplines	Gottenheim, Germany	平成 22 年 12 月	

● 蓮見 二郎

発表者名	発表標題		
Hasumi, J., Suzuki, M., Shibuya, K., & Atobe, S.	The learning of empathetic aspects of inter-cultural understanding through an international debating activity: A case of students in a Japanese upper-secondary school.		
学会名	開催地	発表年月	
London International Conference on Education	Heathrow, England	平成 22 年 9 月	

発表者名	発表標題		
山住勝広・島田(富澤)美千子・伊藤大輔・蓮見二郎	地域創造の担い手としての学校: 活動理論にもとづくハイブリッドな教育イノベーションに関する日本・シンガポール共同研究.		
学会名	開催地	発表年月	
日本教育学会第 69 回大会	広島県東広島市	平成 22 年 8 月	

発表者名	発表標題		
Hasumi, J., Suzuki, M., Shibuya, K., & Atobe, S.	Rational argument and cultural sensitivity: A case of Japanese students in international debating competitions.		
学会名	開催地	発表年月	
The 6 th International Citzed Conference	St. Andrews, Scotland	平成 22 年 7 月	

発表者名	発表標題		
蓮見二郎	「つくる公共性」のシティズンシップ教育: 京都府八幡市を例に		
学会名	開催地	発表年月	
第 21 回日本公民教育学会全国研究大会	京都府京都市	平成 22 年 6 月	

発表者名	発表標題		
Suzuki, M., <u>Hasumi J.</u> , Yano, Y., Atobe, S., & Sakai, K.	Adaptation to adjudication styles in debates and debate education		
学会名	開催地	発表年月	
The 7 th Conference on Argumentation of the International Society for the Study of Argumentation	Amsterdam, Nederlanden	平成 22 年 6 月	

発表者名	発表標題		
鈴木雅子・蓮見二郎・跡部智	Examining the relation between eye contact ratio and speaking assessment		
学会名	開催地	発表年月	
第 10 回日本第二言語習得学会	岐阜県岐阜市	平成 22 年 6 月	

発表者名	発表標題		
Suzuki, M., <u>Hasumi J.</u> , & Atobe, S.	Examining the relation between eye contact ratio and speaking assessment		
学会名	開催地	発表年月	
The 2 nd International Conference on Second Language Acquisition and Foreign Language Learning	Szczyrk, Poland	平成 22 年 5 月	

● 谷内 正裕

発表者名	発表標題		
濱野英巳・谷内正裕・倉館健一	外国語教育における教育・研究活動の有機的な関連付け		
学会名	開催地	発表年月	
日本教育工学会	新潟県新潟市	平成 20 年 10 月	

● 吉村 創

発表者名	発表標題		
吉村創・江面快晴・斎藤太郎	慶應義塾における「ドイツ語多読授業」試み		
学会名	開催地	発表年月	
日本独文学会関東支部ドイツ語教育研究会第 108 回例会	東京都港区	平成 20 年 1 月	

● ルイス クライド

発表者名	発表標題		
Yoshida, T., Kurokawa, I., <u>Lewis, C. H. Jr.</u> , Igarashi, R., & Kuradate, K.	Creating intercultural encounters on campus: A step toward establishing intercultural understanding and world peace		
学会名	開催地	発表年月	
International Academy of Intercultural Research (IAIR)	Honolulu, Hawaii, USA	平成 21 年 8 月	

発表者名	発表標題		
<u>Lewis, C. H. Jr.</u>	Spectrums of education: Modern uses of videoconferencing in cultural education		
学会名	開催地	発表年月	
異文化コミュニケーション学会 2007 年度年次大会	東京都大田区	平成 19 年 9 月	

発表者名	発表標題		
Lewis, C. H. Jr., Ainge, M., Augustine, M. E., Davis, M., Kuradate, K., Machi, E., Moretz, D., Yokokawa, M., & Yoshida, T.	Broadening perspectives: Understanding culture through photography		
学会名	開催地	発表年月	
Digital Stream Conference 2007	Monterey California, USA	平成 19 年 3 月	

資料 7 全体会議開催実績

● 第 1 回全体会議

開催日:2007年1月6日(土)・7日(日)

開催場所:セミナーハウス・クロスウェーブ東中野

<1日目(1月6日)>

外国語一貫教育に関する事例の検討

・講演:木村松雄(青山学院大学)

「青山学院が進める初等・中等教育の4-4-4制への移行の試みについて」

・講演:小田真幸(玉川大)

「玉川学園におけるK-12制について」

・討議:両校の抜本的なカリキュラム改革の取り組みはともに独自の学風を最大限活かした形で進められているが、では慶應義塾の特性とは何であり、どのような手順でどこに向かって進むことができるのか?

<2日目(1月7日)>

・討議:前日からの継続

150周年の機会に、またAOPプロジェクトの5年間に何を指すべきか、また、どのようなロードマップを敷くことが可能か?

● 第 2 回全体会議

開催日:2008年1月19日(土)・20日(日)

開催場所:オンワード総合研究所人材開発センター

<1日目(1月19日)>

ワークショップ「外国語教育研究センターとAOPプロジェクトはどこに向かっているのか」前半

(コーディネータ:倉館健一・境一三)

・AOPプロジェクトの推進と慶應義塾のメリット・デメリット

・2006-2007年度におけるAOPプロジェクトの研究活動を振り返って(成果・問題点)

・カギとなる概念について

ワークショップ「外国語教育研究センターとAOPプロジェクトはどこに向かっているのか」後半

(コーディネータ:重松淳・倉館健一)

・ヴァーチャル外国語教育研究科(仮称)のコンセプトデザインから教員養成を考える

・学習者中心の視点で考えるヴァーチャル外国語学部(仮称)の構築

・言語ポートフォリオの具体化に向けて

研究活動中間報告(報告者:志村明彦・三ツ石祐子・藤田真理子・ルロワ パトリス)

全体討議「2008年度センターとAOPプロジェクトの活動計画について」

(司会:境一三・金田一真澄)

<2日目(1月20日)>

全体討議「慶應義塾言語教育グランドデザインについて」(司会:志村明彦・境一三)

全体討議「総括」(司会:志村明彦・倉館健一)

● 第 3 回全体会議

開催日時:2009年1月24日(土)・25日(日)

開催場所:神奈川サイエンスパーク内ホテル KSP

<1日目(1月24日)>

今回の趣旨と概要について

・2008年11月15日開催シンポジウム報告

・フレームワークづくりのための論点の整理

グループ別討論

・各段階での外国語能力達成目標

・専門教育を行うための外国語能力達成目標作りについて

全体討論

AOPプロジェクト研究企画中間報告と現状説明、質疑応答

<2日目(1月25日)>長沼君主(東京外国語大)講演
「can-do statementが日本の外国語教育に対して持ちうる可能性について」
CEFR、ポートフォリオの議論
質疑応答、フロアとの討論
グループ別討論とその発表、質疑応答
・一貫教育校でポートフォリオをどのように活かすか
・多言語でのポートフォリオの可能性
総括、今後の活動方針のまとめ

● 第4回全体会議

開催日:2010年1月24日(日)
開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3

挨拶

研究活動の収斂について

- ・素案説明
- ・討議
- ・修正案確認

来年度の研究企画について

- ・素案説明
- ・討議
- ・修正案確認

来年度のスケジュールについて

- ・素案説明
- ・討議
- ・修正案確認

閉会

● 第5回全体会議

開催日時:2010年11月20日(土)・21日(日)・22日(月)
開催場所:リッチモンドホテルプレミア武蔵小杉

<1日目(1月20日)>

プロジェクト5年間の各研究企画のまとめ
(参加ユニット:ユニット1・ユニット2・ユニット3)
・素案説明
・討議
・報告書作成

<2日目(1月21日)>

プロジェクト5年間の各研究企画のまとめ
(参加ユニット:ユニット2・ユニット3)
・討議
・報告書作成

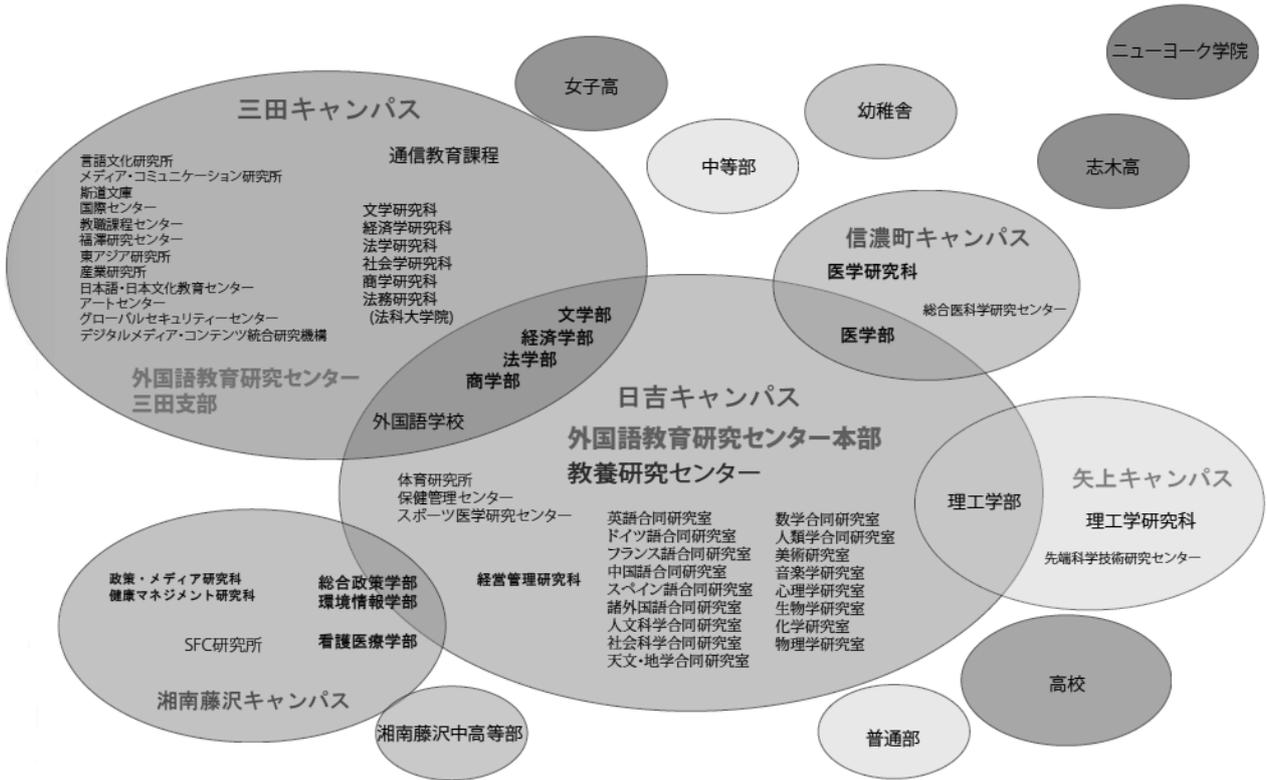
<2日目(1月22日)>

プロジェクト5年間の各研究企画のまとめ
(参加ユニット1・ユニット2・ユニット3)
・討議
・報告書作成
・まとめ

資料 8 慶應義塾における外国語教育(組織図)

資料

慶應義塾における外国語教育の総合研究拠点



資料 9 コミュニティ整備状況

<オンラインコミュニティ>

9-1) テレビ会議システム

期間:2006年～現在

9-2) Moodle

期間:2008年～現在

場所:オンライン

主催者:外国語教育研究センター

研究メンバー:境一三・太田達也・跡部智 ほか

研究協力者:三ツ石祐子 ほか

活動公開:<http://cms.flang.keio.ac.jp/>

成果公開:『2006年度研究活動報告書』98-9頁、118頁

9-3) Understanding Culture through Photography (UCTP)

研究メンバー:吉田友子

研究協力者:エインジ マイケル・横川(室)真理子

活動公開:<http://flang.keio.ac.jp/uctp/index.html>

成果公開:『2006年度研究活動報告書』61頁

9-4) IRC (Interactive Reading Community)

研究メンバー:水野邦太郎

使用システム(例):<http://chutobu-system.study.jp/irc2/>

活動公開:<http://www.sfc.keio.ac.jp/iwc/index.html>

成果公開:『2006年度研究活動報告書』103-104頁

<対面でのコミュニティ形成>

9-5) 外国語ラウンジ

期間:2007～2008年

場所:日吉キャンパス・第三校舎2階

主催者:外国語教育研究センター

URL:<http://www.flang.keio.ac.jp/modules/tinyd0/index.php?id=160>

開室時間

* 授業期間

月火水金曜日 9:00～18:45

木曜日 9:00～16:45

土曜日 9:00～14:45

*授業期間外

平日(月～金) 9:00～16:45

土曜日 閉室

設置機器

- * Windows PC 3 台
- * Mac PC 2 台
- * 大型液晶ディスプレイ 2 台
- * DVD/VHS ビデオプレイヤー 2 台
- * カセットデッキ 3 台



写真 外国語ラウンジ

9-6) 日吉コミュニケーション・ラウンジ

期間: 2009 年～現在

場所: 日吉キャンパス・独立館地下 1 階

活動公開: <http://www.hc.keio.ac.jp/ja/facilities/campuslife/hcl.html>



写真 日吉コミュニケーションラウンジ

9-7) 「三田の家」

期間:2006年～現在

場所:東京都港区三田

主催者:教養教育センター

研究メンバー:手塚千鶴子・日向清人

AOP 研究協力者:井本由紀・堀口佐知子

活動公開:<http://mita.inter-c.org/>



写真 三田の家 (1)



写真 三田の家 (2)

資料 10 主な研究装置

10-1) 講義自動収録システム

メーカー: Photron

品目: Power Rec RM



写真 講義自動収録システム

10-2) テレビ会議システム

メーカー: POLYCOM, SONY

品目: VSX-7000E (POLYCOM), HDX 9002 XL (POLYCOM), PCS-G70S (SONY)



写真 テレビ会議システム

10-3) 画面共有型遠隔協調会議システム「Neue Luft」

メーカー: アイエスエム社製

OS: ① Windows XP Professional SP2

② Fedora Core 6



写真 Neue Luft

10-4) AOP ポータルサーバー(AOP プロジェクト HP 用)

メーカー: IBM

機種名: System x3460

OS: Fedora Core 6

ドメイン: www.st.flang.keio.ac.jp

10-5) File Maker サーバー(文献データ管理用)

メーカー: IBM

機種名: System x3460

OS: Windows2003 Server

ドメイン: www.fm.flang.keio.ac.jp

10-6) ArcWizShare サーバー(Moodle 用)

メーカー: IBM

機種名: System x3650

OS: Fedora 8

ドメイン: www.as.flang.keio.ac.jp

10-7) Helix サーバー(ストリーミングサーバー)

メーカー: IBM

機種名: System x3460

OS: Windows2003 Server

ドメイン: www.st.flang.keio.ac.jp

10-8) Podcast サーバー

メーカー: apple

機種名: X serve

OS: Mac OS server 10.5

ドメイン: www.pod.flang.keio.ac.jp

10-9) Flash Media サーバー

メーカー: IBM

機種名: System x3460

OS: Windows2003 Server

ドメイン: www.fms.flang.keio.ac.jp

10-10) Portfolio プロジェクト用サーバー

メーカー: apple

機種名: X serve

OS: Mac OS server 10.5

ドメイン: www.pf.flang.keio.ac.jp

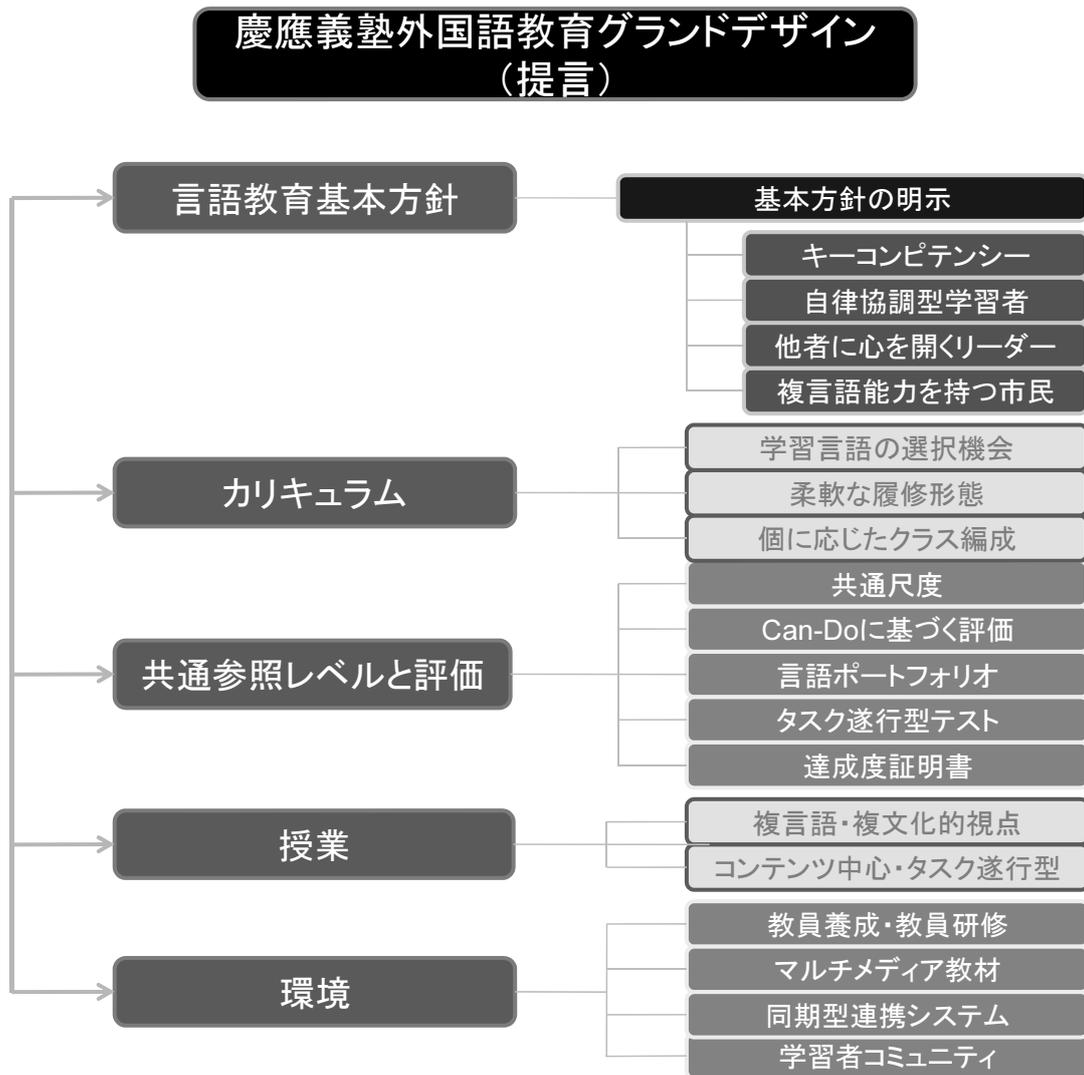
10-11) ファイルサーバー

メーカー: apple

機種名: X serve

OS: Mac OS server 10.4

ドメイン: www.kr.flang.keio.ac.jp



A) 言語教育基本方針

言語教育基本方針を明示すること

- A-1) 外国語学習・教育の目的にキーコンピテンシー(4つの savoir)の獲得を含めること
- A-2) 自律協調型学習者(Autonomous Collaborator)に育つための学習環境を整えること
- A-3) 異言語・異文化に心を開いた社会的リーダーに育つための機会を提供すること
- A-4) 見識ある市民(Plurilingual Citizenship)に必要な複言語能力への気づきを促すこと

B) カリキュラム

- B-1) 多言語ガイダンスを受けた後に言語選択する機会を提供すること
- B-2) 個人の専門性と必要・目標を重視した柔軟な履修制度へ転換すること
- B-3) 到達度を考慮した個に応じた(熟達度別／熟達度混合)クラス編成を拡充すること

C) 共通参照レベルと評価

- C-1) 共通スケール(共通参照レベル)の参照を広めること
- C-2) Can-do ステイトメントによる遂行可能タスクに基づく評価を取り入れること
- C-3) 言語ポートフォリオの利用を推進すること
- C-4) 発信型スキルを重視したタスク遂行型のテストの導入すること
- C-5) 達成度証明書を教育機関自身が発行すること

D) 授業

- D-1) 言語・文化の豊かな多様性に対する気づきを促す授業を設置すること
- D-2) コンテンツ中心・タスク遂行型学習の機会となる授業を増設すること

E) 学習・教育環境

- E-1) 教員養成・教員研修・FD 機会を刷新すること
- E-2) 自律的学習を助けるオンデマンド・マルチメディア教材の提供を拡充すること
- E-3) 同期型連携システムの充実によって遠方の学習者の連携を促すこと
- E-4) 学習者・教員・留学生・卒業生・地域社会の言語学習コミュニティの構築を助けること

資料 12 実験授業

12-1) ドイツ語多読「ドイツ語で読書を楽しもう！」

開催日: 2010年5月25日～6月29日

開催場所: 日吉キャンパス・第三校舎2階外国語ラウンジ

講師: 吉村創

開催形態: 90分授業×週1回(全6回)

12-2) ドイツ語のリズムにのろう！

開催日: 2009年12月5日、12日、19日

開催場所: 日吉キャンパス・独立館地下1階コミュニケーションラウンジ

講師: 三ツ石祐子

開催形態: 160分授業×全3回

成果公開: 日本独文学会関東支部主催ドイツ語教育研究会第113回例会(2009年1月23日、東京ゲーテ・インスティテュート)、日本独文学会関東支部主催ドイツ語教育研究会第118回例会(2010年3月19日、東京ゲーテ・インスティテュート)

12-3) Express Yourself! The Music of English

開催日: 2008年10月29日～2008年11月26日

開催場所: 日吉キャンパス・第三校舎外国語ラウンジ

講師: Jerome Young

開催形態: 全4回

成果公開: <http://flang.keio.ac.jp/modules/news/article.php?storyid=179>

12-4) 一ヶ月集中！オンライン学習法で英語を鍛えよう！

開催日: 2008年2月25日～2008年4月1日

開催場所: 日吉キャンパス・第三校舎外国語ラウンジ

講師: 岡野恵・井上京子

開催形態: 全6回

成果公開: <http://flang.keio.ac.jp/modules/news/article.php?storyid=201>

12-5) Corporate Social Responsibility (CSR) Course

開催日時: 2007年12月1日

開催場所: 日吉キャンパス・第三校舎329教室

講師: ボンジー アラナ・藤井敏彦

成果公開: http://www.flang.keio.ac.jp/modules/content_research/index.php?id=44

12-6) 「複言語で学ぼうスポーツ文化ー言語学習の“うまい手”」

開催日時: 2007年10月15日

開催場所: 日吉キャンパス

講師: 岩波敦子・桑川麻里生・須田二三明

12-7) ドイツ語のリズムにのろう！

開催日: 2007年8月6～10日

開催場所: 日吉キャンパス・来往舎イベントテラス

講師: 三ツ石祐子

開催形態: 90分授業×毎週1回(全5回)

成果公開: <http://flang.keio.ac.jp/mitsuishi/>

12-8) 「複言語で学ぼうスポーツ文化ーサッカー」

開催日時: 2007年7月9日16:30～

開催場所: 日吉キャンパス・第三校舎外国語ラウンジ

講師: 岩波敦子

成果公開: <http://www.flang.keio.ac.jp/modules/news/article.php?storyid=98>

12-9) ドイツ語による多読の実験授業

開催日:2007年5月8日~2007年7月10日

開催場所:日吉キャンパス

講師:吉村創

開催形態:90分授業×毎週1回(全10回)

成果公開:『2007年度研究活動報告書』37-41頁

http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_7.html

12-10) Eyes on the Future: Expanding the Means of Language and Cultural Understanding

開催日:2007年度

開催場所:日吉キャンパス

講師:Clyde Henry Lewis, Jr.

開催形態:90分授業×毎週1回

成果公開:『2007年度研究活動報告書』64-69頁

http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_6.html

12-11) 複言語コミュニケーションクラス

開催日時:2006年11月6日~2006年12月18日

開催場所:日吉キャンパス

講師:境一三・奥山美穂・志村佳菜子・白崎容子・金田一真澄・森泉・石井康史・大久保教宏

開催形態:90分授業×毎週1回(全6回)

成果公開:『2006年度研究活動報告書』47-55頁

12-12) Understanding Culture through Photography

開催日:2006年10月14日~2006年12月16日

開催場所:日吉キャンパス・第三校舎アトリエ3

講師:吉田友子・ルイス クライド・町恵理子・横川真理子・エインジ マイケル

開催形態:90分授業×毎週1回(全8回)

成果公開:『2006年度研究活動報告書』61・62・81・89・91頁

http://aop.flang.keio.ac.jp/section_7/page_5.html<http://flang.keio.ac.jp/uftp/index.html>

12-13) Reading for Pleasure

開催日:2006年10月3日~2007年1月9日

開催場所:日吉キャンパス

講師:水野邦太郎

授業形態:90分授業×毎週1回(全12回)

成果報告:『2006年度県活動報告書』103-104頁

12-14) メディアとドイツ語

開催日:2006年4月~7月

開催場所:日吉キャンパス

講師:太田達也

授業形態:90分授業×毎週1回(全14回)

成果公開:『2006年度研究活動報告書』98-99頁

資料 13 主な教材の作成・公開状況

《教材等》

13-1) 複言語のすすめ

研究代表者: 金田一真澄

成果公開: 「2007 年度研究活動報告書」61-65 頁

「2007 年度研究活動報告書」33-41 頁

http://aop.flang.keio.ac.jp/section_10/page_1.html



画像 《複言語のすすめ》

伝えたい、ぼくの心をきみの言葉で

複言語のすすめ

2010. 4. 1.

《複言語のすすめ》ガイドブック

(2010 年度・裏面解説版)

君が学んでいる言葉は世界のどこで通じるのだろう？

パンフレット裏面「代表言語 13 の世界通用地図」解説—

*おもて面解説は、2009 年度版参照のこと

目次

1. 「代表言語 13」の世界通用地図 (1 頁)
2. 世界の国の言語多様性 (3 頁)
3. たくさんの言葉を詰めて旅に出よう! (7 頁)
4. 外枠の文字列 (7 頁)
5. 補遺 (10 頁)
6. 資料 (20 頁)



慶応義塾大学外国語教育研究センター
 Faculty of Foreign Languages, Keio University
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

画像 《複言語のすすめ》教師用ガイドブック

13-2) 慶應義塾言語プロフィール調査

研究代表者: 跡部智

成果公開: 「2007 年度研究活動報告書」29-30 頁

「2008 年度研究活動報告書」24-26 頁

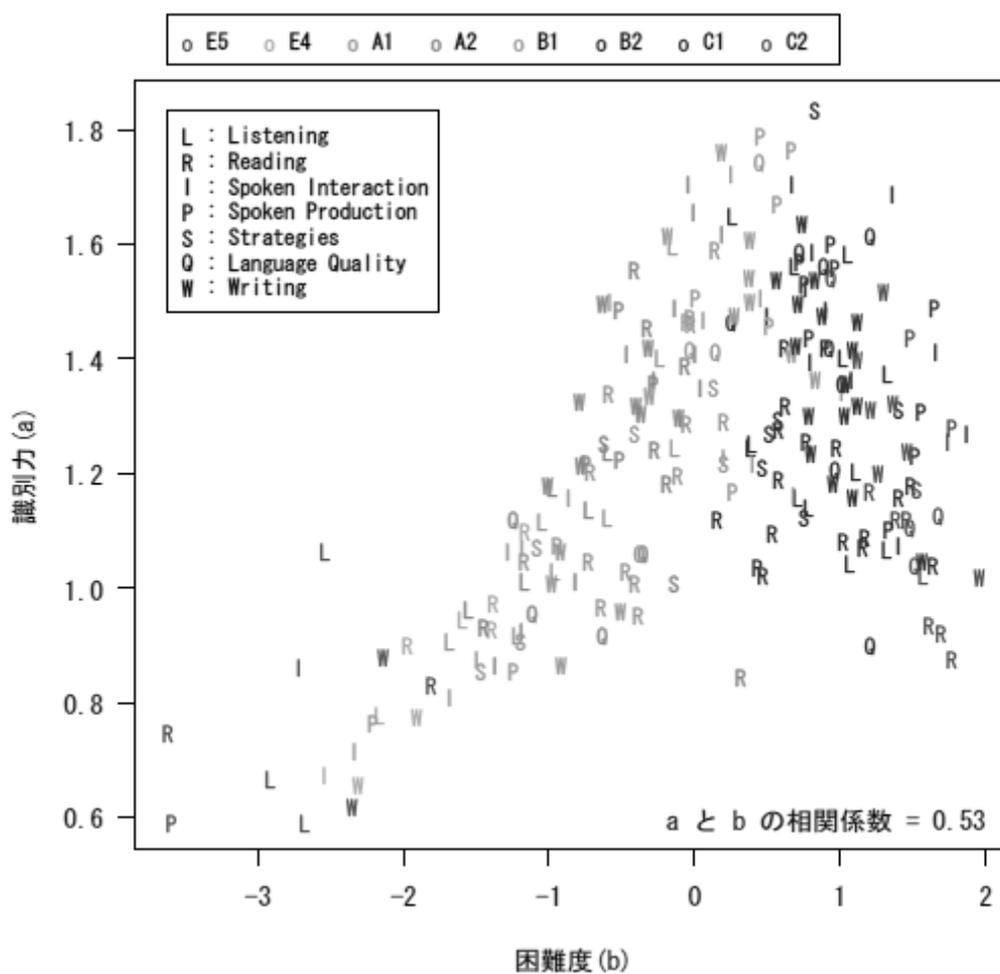


図 プロフィール調査結果(1)

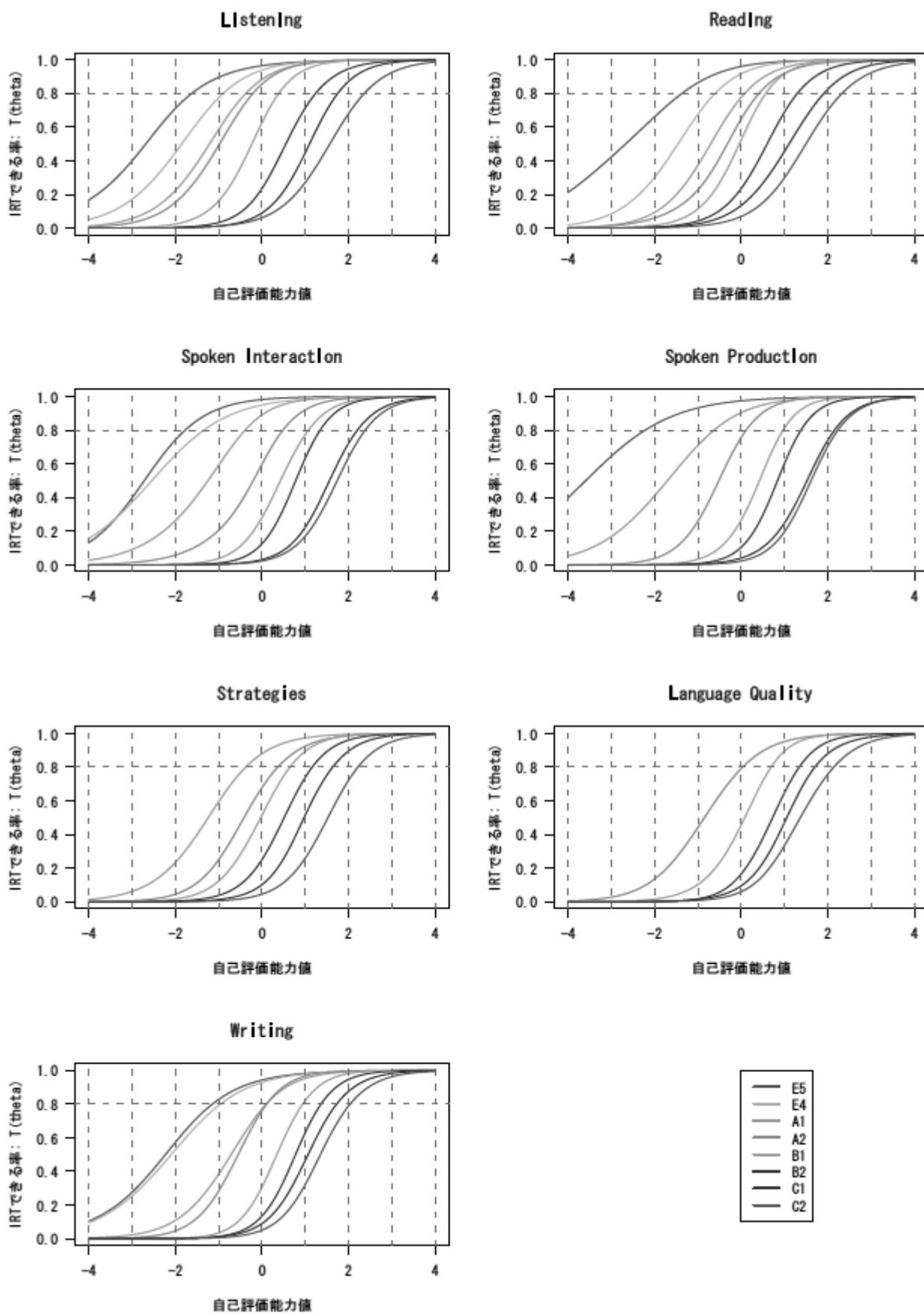


図 プロフィール調査結果(2)

13-3) 言語ポートフォリオ

欧州評議会



本日は欧州評議会の加盟国であり、アイスランドからアゼルバイジャンに至るまで14国が参加している共同プロジェクトです。この版の中には多国籍な人々の言語とその経験や関心において共通するものがある一方で異なる言語、文化、歴史を持っています。

欧州評議会の目的は、みなさんが自分たちと異なる人々や、そうした違いをもたらすものが何かを理解し、尊重できるよう手助けすることにあります。この**ヨーロッパ言語ポートフォリオ**は、あなたが新しい言語を学び、他の文化を理解することを手助けするために考え出されたものです。

連絡先：
Language Policy Division
Directorate General IV
Council of Europe
Strasbourg
France

www.coe.int/portfolio

欧州評議会による以下の付随情報ポートフォリオのサイトにあります。

- *European Language Portfolio: The international component and learning how to learn* (David Little and Barbara Stegova)
www.coe.int/T/DG4/Portfolio/documents/Templates.pdf
- *Common European Framework of Reference for Languages*
www.coe.int/T/DG4/Portfolio/documents/framework_EN.pdf

ヨーロッパ言語ポートフォリオとヨーロッパ言語検定は欧州評議会の承認教育機関を保持するための標準の一つです。欧州評議会がヨーロッパ言語ポートフォリオの承認ならぬに言語認定機関に認められることを行っている国については、以下のサイトでご覧ください。
www.coe.int/T/DG4/Portfolio/TL-EGM/documents_lists/common_framework.html

氏名 _____

学校名 _____



わたしの言語
ポートフォリオ

European Language Portfolio – Junior version: Revised edition



Portals Européens des Langues, créée par le CEPE
European Language Portfolio, créée par le CEPE
Portali Europei de Limbaj, creată de Consiliul European pentru Limbaj



The National
Centre for
Languages

De învățare conform Actului privind
Procedura
COMITÉ ALTERNATIF DE ASIGURAREA
CALITĂȚII EUROPEE DE VALOAREA
The Undergraduate Council of Languages and
Linguistics
STUDENT COMMITTEE FOR QUALITY IN
EUROPEAN LANGUAGE PORTFOLIO
JLP

この冊子版に關するお問い合わせ、ご意見・ご報告は sep-portfolio@coe.int までお願いいたします。

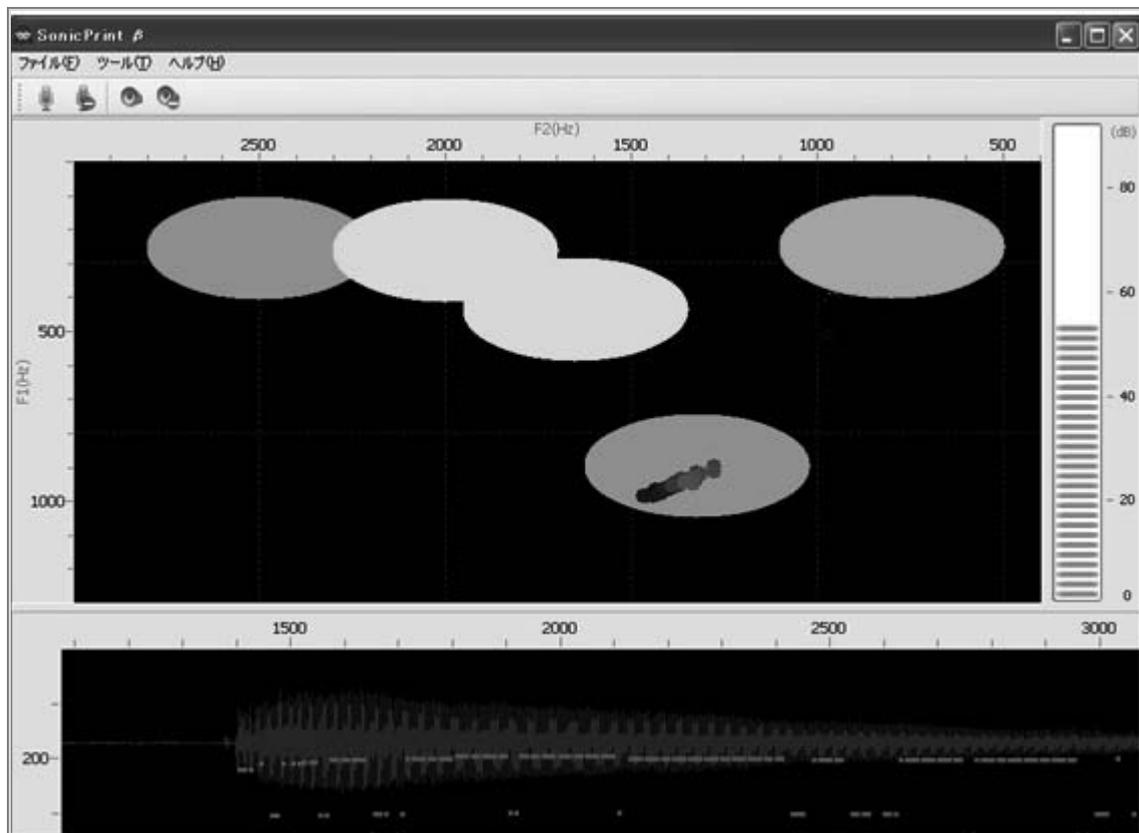
© Council of Europe

13-5) Sonic Print ver. 1.2.0

研究メンバー: 倉館健一・内山清子・菊地歌子・日向清人・谷内正裕・中村智栄・五十嵐玲美

公開開始: 2010年4月22日

成果公開: 『2008年度研究活動報告書』37-39頁



画像 発音矯正教材 Sonic Print

13-6) Moteur

研究メンバー: 倉館健一・國枝孝弘・ルロワ パトリス

URL: <http://aop.flang.keio.ac.jp/moteur/>



画像 moteur (1)

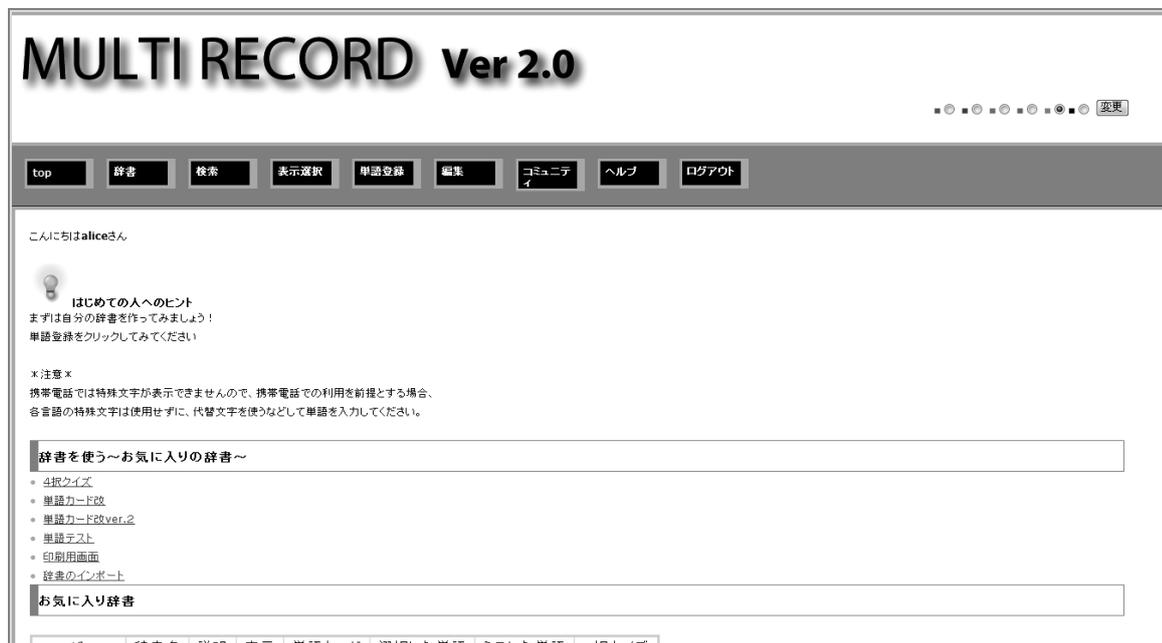


画像 moteur (2)

13-7) Multi Record Ver. 2.0

研究メンバー: 藁谷郁美・太田達也・ラインデル マルコ

URL: <http://dmode.sfc.keio.ac.jp/3fisch/jisho.php>



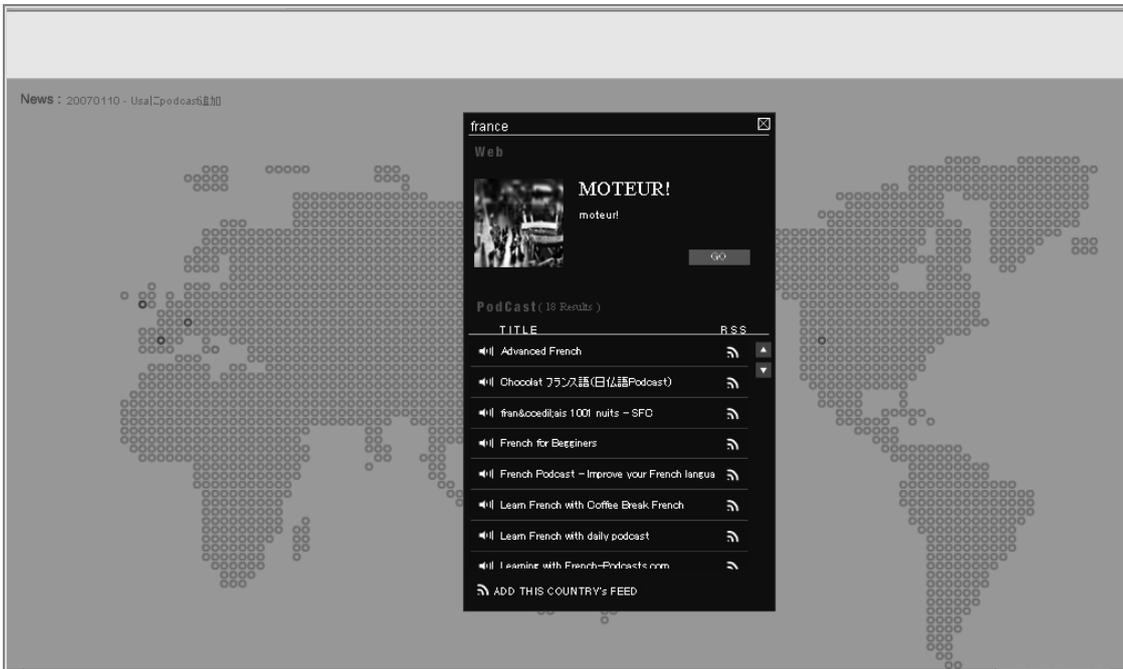
画像 Multi Record Ver. 2.0 (1)



画像 Multi Recort Ver. 2.0 (2)

13-8) 全世界対応 Podcast ポータルサイト

研究メンバー: 倉館健一・國枝孝弘・ルロワ パトリス

URL: <http://pod.flang.keio.ac.jp/>

画像 全世界対応 Podcast ポータルサイト (HP)

13-9) Resource Sharing Project (リソースシェアリングプロジェクト)

研究代表: 倉館健一

URL: <http://fle.flang.keio.ac.jp>

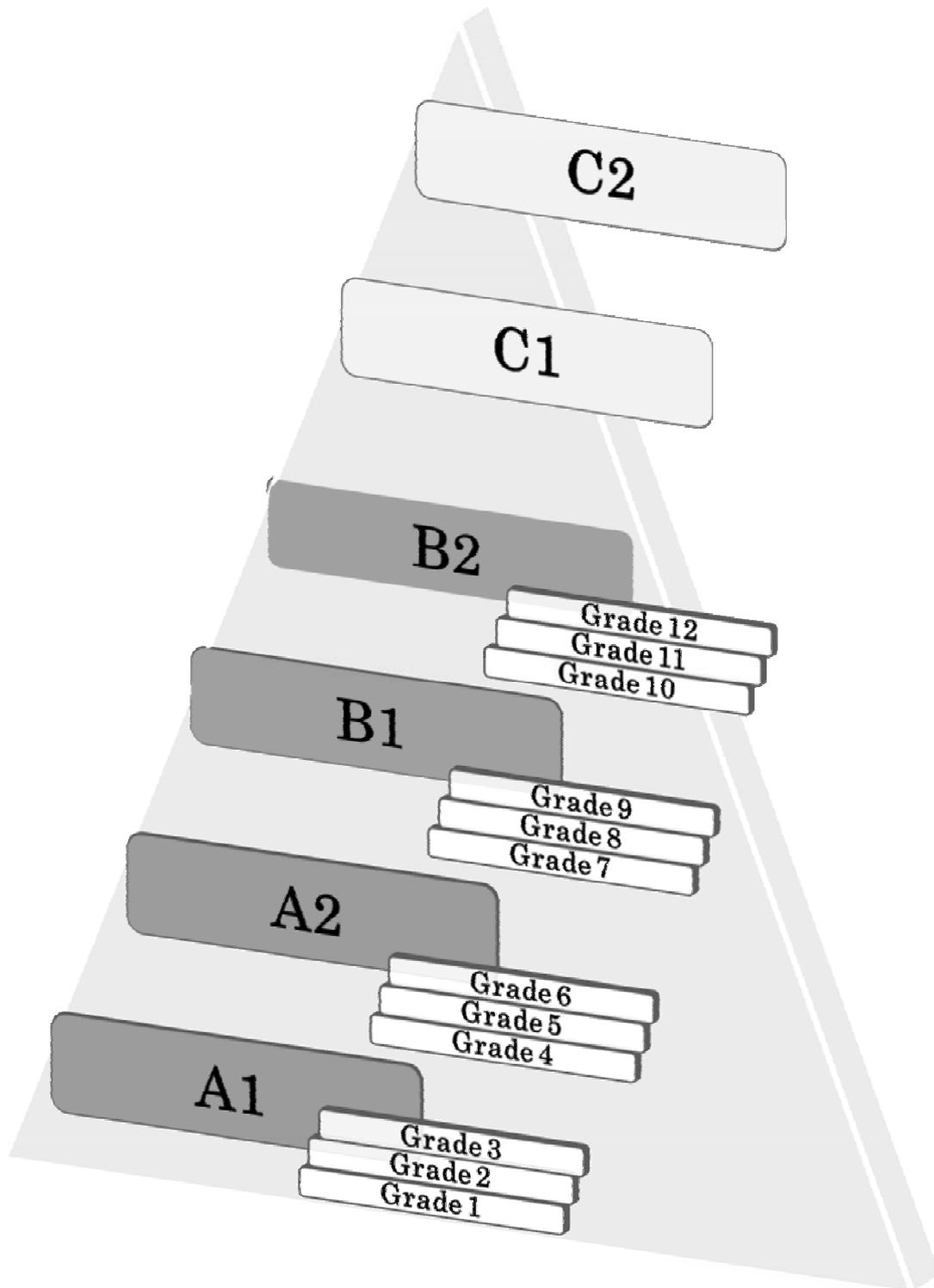


画像 リソース・シェアリング・プロジェクト(1) メインページ



画像 リソース・シェアリング・プロジェクト(2) コンテンツ例

資料 14 CEFR 基準レベルの細分化



資料 15 慶應義塾評価・点検関連規程

慶應義塾点検・評価規程

平成15年5月6日制定
平成15年10月31日一部改正

(目的)

第1条 この規程は、慶應義塾(以下「義塾」という。)の教育研究水準の向上を図り、かつ教育研究機関としての社会的使命を達成するために、教育研究活動およびその基礎となる諸条件の点検・評価に関し、必要な事項を定めるものとする。

(対象)

第2条 点検・評価の対象は、義塾の教育・研究・医療・管理運営等に係るすべてとする。

(点検・評価委員会)

第3条 ① 第1条の目的を達成するため、義塾に慶應義塾点検・評価委員会(以下「点検・評価委員会」という。)を置く。

② 点検・評価委員会は、次に掲げる事項を行う。

- 1 点検・評価の基本方針および実施項目の策定に関する事項
- 2 点検・評価(外部評価を含む。)の実施に関する事項
- 3 点検・評価に関する報告書の作成
- 4 評価結果に基づく改善状況の検証
- 5 点検・評価結果の公表に関する事項
- 6 学校教育法(昭和22年法律第26号)に定める認証評価に関する事項
- 7 点検・評価の目的達成のために必要なその他の事項

(組織)

第4条 ① 点検・評価委員会は、次の者で構成する。

- 1 常任理事 若干名
- 2 各学部長
- 3 各研究科委員長
- 4 大学附属研究所(室)、大学図書館および大学附属施設の長 若干名
- 5 学生総合センター長
- 6 一貫教育校の長 若干名
- 7 塾監局長
- 8 信濃町キャンパス事務長
- 9 総務部長
- 10 学事センター部長
- 11 業務監査室長
- 12 その他塾長が必要と認めた者 若干名

② 前項第4号、第6号および第12号による委員の任期は4年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 ① 点検・評価委員会に委員長を置く。委員長は委員の中から塾長が指名する。

② 委員長は、点検・評価委員会を招集し、その議長となる。

(副委員長)

第6条 ① 点検・評価委員会に副委員長を1名置くことができる。

② 副委員長は、委員の中から委員長が指名する。

③ 副委員長は、委員長を補佐し、委員長が委員長職務を遂行できないときは、その職務を代行する。

(議事)

第7条 ① 点検・評価委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立する。

② 議決を必要とする場合は、出席者の過半数をもって議決するものとする。

(実施)

第8条 点検・評価は、4年に1回行うものとする。

(改善への対応)

第9条 ① 点検・評価委員会は、塾長に対して、点検・評価の結果を報告する。

② 塾長は、点検・評価委員会からの報告に基づき、改善が必要な事項について当該機関の長にその改善の実施を求め、実現を図らなければならない。

(専門委員会)

第10条 ① 点検・評価委員会に、第3条に掲げる事項に関し、専門的作業を行うため、点検・評価専門委員会(以下「専門委員会」という。)を置くことができる。

② 専門委員会は、委員長が指名した者をもって構成する。

③ 専門委員会委員長は、点検・評価委員会委員の中から委員長の推薦に基づき、塾長が委嘱する。

(外部評価委員会)

第11条 ① 点検・評価委員会に、外部評価委員会を置く。

② 外部評価委員会は、点検・評価委員会が委嘱する学外の有識者若干名をもって構成する。

③ 点検・評価委員会は点検・評価の結果を付して、外部評価委員会に評価作業を付託する。

(事務組織)

第12条 点検・評価委員会、専門委員会および外部評価委員会の事務は、慶應義塾塾監局において行う。この組織については別に定める。

(その他)

第13条 この規程に定めるもののほか、点検・評価に関し必要な事項ある場合、点検・評価委員会が定めるものとする。

(規程の改廃)

第14条 この規程の改廃は、点検・評価委員会の議を経て塾長が行う。

附 則

この規程は、平成15年5月6日から施行し、平成15年5月1日から適用する。

附 則(平成15年10月31日)

この規程は、平成15年10月31日から施行する。ただし、平成15年10月1日から適用する。

慶應義塾研究倫理要綱 Keio Code of Research Ethics

近年、研究者の研究領域はますます学際性や国際性を増し、また大学や研究機関では国内外を問わない研究連携が活発化しつつある。周囲との関わり方がこれまでにない複雑さを伴って拡大する中、研究に従事する者は、従前にも増して、自らの研究活動がその諸過程において、社会・生命・環境に対し直接間接に及ぼす影響の大きさを改めて認識する必要がある。このような認識のもと、学塾である慶應義塾は、研究者の独立と真理を探求する姿勢を尊重しつつ、社会における協生を重視し、ここに研究者の倫理要綱を定める。

1. 研究の意義

義塾において研究に従事する者は、真理を追求する実学の伝統を重んじ、先進的な研究に挑戦して新たな知識と価値を創造し、研究成果が人類や社会の発展に寄与するように努めなければならない。

2. 研究対象への配慮

義塾において研究に従事する者は、研究が人間や生物・自然を傷つける場合があることを念頭に置き、すべての研究参加者の人権と実験動物の福祉に対して十分に配慮し、人類や社会の安全と自然環境の保全に努めなければならない。

3. 研究活動の公正性・透明性の確保

義塾において研究に従事する者は、研究活動の科学的・倫理的妥当性をつねに吟味し、その諸過程において公正性・透明性を重視するとともに、規範に則った管財をなし、説明責任を果たさなければならない。

4. 研究に関わる者の尊重

義塾において研究に従事する者は、ともに研究に関わるすべての者の権利を尊重し、公平で差別や搾取のない研究を遂行しなければならない。

5. 研究交流の促進

義塾において研究に従事する者は、研究活動の諸過程において、独立して孤立せず、世界の研究者や学生との自由で開かれた交流や協力を努めなければならない。

慶應義塾
2009年3月制定

慶應義塾における知的財産の取扱いに関する指針

慶應義塾は、慶應義塾産官学連携ポリシーに基づき、慶應義塾で創出された知的財産の取扱いに関して、以下の指針を定める。

A. 慶應義塾で創出された産業財産権の取扱い

1. 教職員が創出した発明(考案、創作を含む。以下、本指針において同じ。)

のうち、以下に該当する発明であって、教職員が産業財産権として保護の対象となると考える発明は、慶應義塾に届け出るものとする。

- 1) 国の研究資金を得て行った研究に基づく発明
- 2) 慶應義塾から特定の研究費を得て行った研究に基づく発明
- 3) 企業等との研究契約に基づく発明のうち、その帰属を義塾と定めた発明

2. 前項に該当しない発明であっても、教職員がその権利を慶應義塾に譲渡することを希望する場合は、慶應義塾に届け出ることができる。

3. 慶應義塾は、届出された発明について、特許性、事業性等を総合的に勘案して、慶應義塾に帰属させるものを特定する。慶應義塾に帰属することになった発明については、その産業財産権としての保護や技術移転を、慶應義塾の責任で行うものとする。慶應義塾に帰属しないこととなった発明については、発明者に返還され、発明者の責任で保護および技術移転できる。

4. 慶應義塾に帰属した発明を技術移転することにより収入を得た場合は、発明者、学部等、慶應義塾で配分する。なお、慶應義塾・学部等に配分された資金は、研究等に使用するものとする。

5. 学生・研究員・外部研究者に対しても、あらかじめ個別の契約により同意を得たうえで、上記1ないしは4の取扱いを適用する。

B. 慶應義塾で創出された研究試料の取扱い

1. 教職員が創出した研究試料のうち、国の研究資金もしくは慶應義塾から特定の研究費を得て行った研究に基づき創出した研究試料については、慶應義塾と創作者である教職員が共有する。また、企業等との研究契約に基づき創出した研究試料の帰属については、その契約の取り決めに従うものとする。

2. 前項に該当しない研究試料であっても、創作者である教職員がその権利を慶應義塾に帰属させることを希望する場合は、当該研究試料を慶應義塾と当該教職員の共有とすることができる。

3. 教職員は、慶應義塾と教職員が共有する研究試料を、法令等に反することなく、慶應義塾の同意を要さず自由に改変および利用することができる。

4. 教職員は、慶應義塾と教職員が共有する研究試料を営利目的で第三者に提供する場合には、慶應義塾に届け出るものとする。慶應義塾は、届け出された研究試料について、第三者への移転業務を行う。

5. 研究試料を慶應義塾と共有する教職員が慶應義塾を退職する場合、慶應義塾は当該研究試料の管理を行うことができる。

6. 慶應義塾からの移転によって生じた収入の配分については、産業財産権の取扱いに準ずるものとする。

7. 学生・研究員・外部研究者に対しても、あらかじめ個別の契約により同意を得たうえで、上記1ないしは6の取扱いを適用する。

C. 慶應義塾が行う企業との研究の取扱い

1. 企業との研究契約は、原則として慶應義塾(慶應義塾の組織名で締結するものを含む。)と企業との間で締結する。

2. 企業との研究の成果として生じた産業財産権、著作権、ノウハウおよび研究試料の帰属は、企業と慶應義塾の共有とすることを含め、双方の貢献度等を加味し、柔軟に取り扱う。

3. 企業との研究の成果である知的財産権の実施に関しては、企業の実施に伴う対価の支払および企業への優先的な実施権の付与を含め、柔軟に取り扱う。

4. 研究成果の公表については、研究契約において定める秘密保持条項を尊重しつつ、慶應義塾の研究者が公表できることおよび公表時期の明確化を図る。

D. 対価収入の配分について

別に定める細則により、発明者、学部等、慶應義塾に配分する。

平成17年4月1日
担当常任理事

慶應義塾著作権取扱規則

(制定 平成12年1月14日)

(施行 平成12年1月14日)

第1条(目的)

この規則は、論文や著書の著作権等、伝統的に教員・研究者に所属するとされてきた権利は維持することを前提とした上で、慶應義塾(以下「義塾」という。)の業務の一環として作成されたコンピュータプログラム(以下「プログラム」という。)、データベース、映像等の著作物および著作者から著作権を義塾に譲渡する申し出のあったもので、義塾の知的資産として蓄積して活用するのに適した著作物の著作権を知的資産センター(以下「IPC」という。)において管理するために、義塾で創作された著作物に関する権利の取扱いについて規定し、もって義塾における研究・教育活動を促進し、これを社会へ還元することを目的とする。

第2条(義塾が著作者となる著作物)

① 義塾の教職員又は学生が義塾の業務の一環として作成した著作物(プログラムの著作物を除く。)で、義塾又は義塾内の組織名義の下に公表するものの著作者は、その作成時に特約のない限り義塾とする。

② 義塾の教職員又は学生が義塾の業務の一環として作成したプログラムの著作物の著作者は、その作成時に特約のない限り、義塾とする。

第3条(義塾に著作権が帰属する著作物)

① 次の著作物に関する財産的権利である著作権は、義塾に帰属する。

1 前条各項の著作物

2 著作者が著作権を義塾に譲渡することを申し出た著作物

3 義塾が契約当事者である共同研究、受託研究の契約に基づき、著作権が義塾に帰属するものとされた著作物

4 研究テーマを指定し、その成果の著作権が義塾に帰属することを条件として義塾から受けた研究助成の成果である著作物

② 前項2号から4号の場合には、著作者人格権は著作者に帰属する。

第4条(義塾が許諾契約等を行う著作物)

前条の外、授業の映像等を記録した著作物の義塾外への利用許諾又は譲渡については、義塾と著作者との間で特段の定めのない限り、義塾がその契約を行う。

第5条(著作権の届出)

著作者は、前2条に該当する著作物が生じた場合、所定の書式によって速やかにIPCに届け出なければならない。

第6条(著作権の管理)

IPCは、前条に基づき届出のあった著作権について、責任を持って管理を行い、その管理情報をインターネット上で公開するものとする。著作権の対象となる著作物については、原則としてその電子的複製物を保存管理するものとする。

第7条(運営委員会への報告)

IPC所長は、著作権の取得・管理・許諾等の状況について、定期的にIPC運営委員会に報告するものとする。

第8条(著作者の協力)

著作者は、IPCの要請に応じ著作権の管理・許諾・譲渡等に関して必要な情報を提供し、協力するものとする。

第9条(費用の負担)

著作権の管理・許諾・譲渡等に伴う諸費用は、義塾の負担とする。

第10条(対価の配分)

① 著作権の許諾・譲渡等により収入を得た場合には、その管理・許諾・譲渡等に要した諸費用を除き配分する。

② 配分は、著作者、その著作者が所属する学部等及び義塾に対して別に定める基準に基づき配分するものとする。ただし、著作者への配分は、著作者の意思により学部等への配分を可能とする。

③ 対価を受ける権利は、著作者が義塾を退職した後も存続する。ただし、著作者又はその承継人が、義塾に対して、対価の支払先を特定するために必要な所定の事項を届け出なかった場合はこの限りでない。

第11条(規則の改廃)この規則の改廃は、IPC所長の発議に基づき、IPC運営委員会の議を経て担当常任理事が決定する。

附則(平成12年1月14日)

この規則は、平成12年1月14日から施行する。

資料 16 AOP プロジェクト出張に関する申し合わせ

(2010年5月13日更新)

1. 出張旅費を支払える職位区分

- A) 慶應義塾常勤研究者 専任教員
- B) 慶應義塾大学関係者 上席研究員、研究員、PD、RA
 - 補足1: 慶應勤務の非常勤講師が出張する場合は、本務・非本務に関わらず研究員登録が必要。
 - 補足2: 研究協力者は出張旅費の対象としない。
 - 補足3: A以外は「出張依頼書(様式33)」の提出が必要。上記以外の出張については、研究代表者の判断により認めることがある。

2. 出張旅費支出対象人数

- 出張旅費は、研究企画が年度初めに申請し執行可能になった予算額内で運用する。
 - 原則として、一つの研究発表については筆頭発表者以外の者に対して出張旅費を支払わない。
 - 補足1: 筆頭者が文科省登録メンバー以外で、なおかつ1のA)もしくはB)に該当する場合には、文科省登録メンバーが研究発表者に含まれている場合に限り、筆頭者と文科省登録メンバー両者に対し出張旅費の支払いを可能とする。文科省登録メンバーが研究発表者には含まれているが現地に同行しない場合、単独発表も可能。
 - 補足2: 筆頭者が文科省登録メンバーの場合、共同発表者は原則として出張旅費の支払い対象とならないが、発表の分担および発表論文執筆分担を明確に文書化し、幹事会が妥当性を認めた場合にかぎり支払い可能とする。
 - 補足3: 補足2に加え、規模が大きな学会で、同一研究企画による研究発表が複数予定される場合には例外措置を認めることもある。
- いずれの場合も、申請書・報告書は個人ごとに記入し、必要書類を添付しなければならない。

3. 出張目的

原則として学会発表、調査、打ち合わせを目的とした出張のみ申請可能とする。

4. 出張旅費支出期間

出張費(宿泊費、日当)の支払いは、学会開催期間およびその前後の旅程上必要最小限の日数に 限定する。出発便と帰着便は原則としてこの日程を逸脱してはならない。

(私的理由で滞在を延長する場合は航空運賃の実費の半額のみを支払う)。

- 補足1: 学会期間の前後にAOPの研究に関する打ち合わせを入れる場合は出張日程に加えることができる(ただし、相手側との日程調整や内容を証する文書・メールを事前に提出すること必要)。
- 補足2: 続けて当該学会とは別の学会等に参加する場合は、別立てで出張申請をすること(例)海外の学会の場合、例えば学会開催期間が4月1日から3日までの場合、宿泊・日当は以下のスケジュールで支出可能
 - 3月30日 日本出発機内泊(宿泊費・日当なし)
 - 3月31日 現地着: 宿泊費・日当あり
 - 4月 1日 宿泊費・日当あり
 - 4月 2日 宿泊費・日当あり
 - 4月 3日 最終日は学会が午前中に終了する場合は、宿泊費つかず、日当は半分。
午後5時に終了する場合は宿泊費・日当(全日分)が付く。
帰りの移動のみの日は日当を支払わない。
飛行機の時間が合わない、移動時間などで宿泊が必要な場合は、その理由を示す書類を添付の上申請すること。
国内学会の場合は、開始日の開始時間が午後、最終日の終了時間が午前であれば、日当は半分となる。

5. 出張申請の手続き

【重要】国内・国外を問わず全ての出張(学会発表、調査、打ち合わせ)について幹事会の承認が必要。

幹事会一週間前までに事務宛てに、出張申請書類を提出する。

詳細なプログラムが決定していない場合は、宿泊費・日当の計算ができないので、必ず発表日時が記載されたプログラムを提出すること。詳細なプログラムがない場合は、暫定版プログラムを添付の出張申請を行う。

海外出張の宿泊費に関しては、現地のホテル相場に合わせた金額を申請すること。

打ち合わせや調査による出張の場合は、スケジュール等詳細に記入すること。

アルコール代、テレビ代、クリーニング代など個人使用とみなされるものは申請不可(もし領収書に含まれている場合は、上記を除いた額を領収書に明記すること)。

6. 出張報告に添付する資料

- 学会発表の場合は、発表資料(プレゼンテーション資料、論文など)のコピーを添付、また最終版のプログラムを未提出の場合は、プログラムを添付すること。
 - 打ち合わせの場合は、訪問先に行ったことを示す資料(名刺(コピーも可)や写真)を添付すること。
- 出張旅費に関する規定は「特定研究資金マニュアル2010年度版」のp12国内出張旅費p14国外出張旅費を参照のこと。

特定研究資金マニュアルおよび提出書類のダウンロードURL

<http://www.ora.keio.ac.jp/tokutei/rules/index.html>

*要旨の提出・申込を5月15日より以前に行った学会に関しては、この申し合わせの改訂を適用しない。

大学英語教育の革新

慶應義塾大学 外国語教育研究センター

慶應義塾大学

■学部/文学部、経済学部、法学部、商学部、医学部、理工学部、総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部、薬学部

■大学院/文学研究科、経済学研究科、法学研究科、社会学研究科、商学研究科、医学研究科、理工学研究科、政策・メディア研究科、健康マネジメント研究科、薬学研究科、経営管理研究科、システムデザイン・マネジメント研究科、メディアデザイン研究科、法務研究科(法科大学院)

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1 TEL 045-566-1031 (外国語教育研究センター)

CEFRを参考 plurilingual能力

昨秋、創立150年を迎えた慶應義塾大学は、創立者・福澤諭吉のスピリットを継承しつつ、幼稚園から大学院までの一貫教育により、これまでグローバルに活躍する塾生を輩出してきた。2003年10月に改組された「外国語教育研究センター」では、新たな時代のニーズに対応しようと、様々なメディアの多言語情報を捉え、再配信する能力の開発を目的に研究が進められている。そんな取り組みの一つが「AOP(Action-Oriented Plurilingual Language Learning=行動中心複言語学習)プロジェクト」である。2006年度に文部科学省の学術フロンティア推進事業に採択された5年に渡るプロジェクトでは、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages=欧州言語共通参照枠)を中心とする言語教育の理論や具体的成果を参考に、日本における言語教育環境の改善を目指し、実践・研究を重ねている。境一三センター所長と、跡部智副所長にこれまでの変遷とCEFRの活用、日本における言語教育の未来を聞いた。

本来の研究機関の姿を取り戻すため より実践的な研究所にリニューアル

同センターは、1960年代に設立された語学視聴覚教育研究室が前身。境所長によれば、当時はLL機器の利用やネイティブ教員による、新しい外国語教授法の研究を進めていた。しかし、次第に形骸化が目立ち始めたという。「当初に導入したオーディオリングメソッドがほかのものに取って代われ、研究室と銘うっていたはずが、単なる講座の設置母体と化していました」と振り返る。

その反省から、現在のセンターへと衣替えたのが2003年10月。研究・教育の成果を各学部の外国語教育に還元するために改組した。

改組にあたり、掲げられた目的は大きく二つ。一つは本来の研究活動を取り戻す

こと。もう一つは軸となる外国語教育の研究の精度を上げるため、個別に研究していた教員たちの連携を密にすることであった。

現在、日吉キャンパスにおける外国語専任教員の数は170数名にのぼる。ただし、これだけの教員がいれば、連携も難しくなる。境所長は「だからこそ、そこをウイークポイントとしてしっかり認識し、お互いを尊重しながら克服していくことが重要なです」と語る。

各学部間の“横の連携”と 一貫校ならではの“縦の連携”を重視

AOPプロジェクトの一環として、各学部で独立性の高いカリキュラムや学生の学習実態を把握するため、講師たちの“横の連携”が始まった。また、幼稚園(小学

校)からの一貫教育による課題として、学年を追った“縦の連携”の必要性も浮かび上がった。「連携が不十分な場合、高校で学習済みの内容を大学で別の教員が繰り返すことになりかねません。学生たちに負担をかけるはいけませんよね」と、境所長は一貫教育ならではの責任の重みを再認識しているという。

縦・横の連携を強める意味でキーとなったのがCEFRだった。CEFRとは、ヨーロッパのどの国で外国語を学習しようと、共通の尺度によって能力の測定が可能のように、約30年の月日をかけて開発された外国語学習と教育のガイドラインと呼べるもの。学習者が学んでいる言語で意思疎通を行うために、どんな知識と運用能力を備えている必要があるかが「~できる」という能力記述文で書き表されている(レベルと能力記述文は、P.6 P.7 What is STEP BULATSを参照)。境所長は「CEFRはヨーロッパ各国のアイデンティティを大切にしながら、同時に“ヨーロッパ全体”という緩やかな統一感を産み出しています。私は同じように、各学部・学校の独自性を大切にしながら、同時に“慶應義塾の外国語教育”という緩やかな全体感を創り出せないかと、共通の尺度でカリキュラムの設計、能力の評価ができるCEFRを活用しようと考えました」

AOPプロジェクトのもう一つの重要な



実践と研究を集約した
『慶應義塾版共通参照枠』の
策定が、最終的な目標
—— 境所長

にした5カ年計画の「AOPプロジェクト」での養成と同塾版共通参照枠策定を目指す

側面が複言語複文化能力育成だ。企業のグローバル化や情報のボーダーレス化など、日本はすでに多言語・多文化社会となりつつある。さらに広がりみせるこの流れに対応する外国語教育こそ、慶應義塾が新たに目指すものだ。

CEFRの長所を取り入れ 自己評価やレベル維持に応用

総合すれば「文法を覚えるために教える」ことに重点を置いた教育から、多言語多文化が存在する社会状況に対応した複言語・複文化能力を育む新たなパラダイムへの転換だった。08年からは自分自身の言語学習を記録していく「言語ポートフォリオ」の活用を試み、幼稚園から大学までの塾生の自己評価を集めた。境所長は「生徒・学生の実態に合ったレベル記述を考えることが今後の課題」と語る。

各学部・学校の学習者の能力をCEFRによって評価する試みも始まったばかり。現場で実際に教鞭をとる教員達との連携は決して楽な仕事ではないが、跡部副所長は「実践していくにはまだまだ課題が残ります。しかし、いつまでも単語量や文法・構文の理解度を重視する受容型の評価システムでは、グローバル社会を生き抜く外国語能力を育成していくことはできません」と危機感を募らせる。

目標は「慶應義塾版共通参照枠」の策定 Plurilingual養成の環境づくりを

最終的には実践と研究を集約した「慶應義塾版共通参照枠」の策定を目標と考える境所長。「CEFRの評価法を踏まえ、個人の得意分野から伸ばしていくことを

100年先も希望をもてる
教育を創り出すことが
我々の使命

— 跡部副所長



考えたいですね。いいところを伸ばすことで、ほかの要素もついてくれば理想的だと考えている。

境所長は自身の経験からもエールを送る。「ヨーロッパでは、重要な試験ほど口頭試問を行っています。これは彼らの外国語能力を支える重要な文化的側面だと私は考えています。みなさんもインプット&アウトプットを繰り返すことで、文章を頭の中でまとめられるようになりますよ」

また、跡部副所長は、「CEFRはヨーロッパで約30年かけてできあがったもの。その中で、どんな部分なら日本に根付くのかを考えていく必要もあります。少なくとも慶應義塾の場合、ビジネスパーソンとしてやっていくならどの程度の外国語能力や異文化対応能力が必要なのか、しっかり把握する必要があります。その能力を高めるため、人前でのレポートやアサインメントなど“やらざるを得ない状況”

に追い込むのは、我々教員の役目だとも思っています」

さらに、自分の適性に気づくことも大切だ。「外国の友人ができ、その国の文化に興味を持つ。その内的モチベーションを高め、実践的な複言語能力を身につける“開いた目と心”を養いたい」と跡部副所長は話し、こう付け加える。「しかし、英語文化バンザイ!というわけではありません。そこは冷静に距離を保てるような教育が必要なのです。そのためにも、教員は自分が完成したつもりになってはいけません。昔、福澤諭吉がやっていたことを今日もできなければいけないし、100年先も希望をもてる教育を創り出すことが我々の使命だと考えています」

100年先の未来を見据える外国語教育のスタイルは、5カ年計画でのプロジェクトの結果を受け、2年後にさらなる一歩を踏み出すことになる。



境 一三外国語教育研究センター所長 (右)

1997年に慶應義塾大学経済学部助教授、2000年に同教授に就任。07年に同センター所長に就任。ドイツを中心に、世界の文化と社会のあり方を踏まえ、学生たちがよりグローバルなコミュニケーション能力を開発する土台と環境づくりに取り組む。

跡部 智外国語教育研究センター副所長 (左)

慶應義塾普通部教諭。07年に外国語教育センター副所長に就任。英語一貫教育をテーマに、小中高大の連携性向上のための基盤整備に関する研究を行っている。

正解：① You said it.を直訳すると、「あなたはそれ(私が言いたいこと)を言った」となりますが、会話では「本当にそうだ」「まったくその通り」など、同感を示すときによく使われます。

外国語教育センター

必修とは一味違った講座

慶大生なら誰もが学ぶ語学科目。その教育に力を入れているのが慶大外国語教育研究センター(以下センター)である。

センターは、研究・教育・支援を柱とした義塾全体の外国語教育の充実を目的としている。その取り組みについてセンター所長である境一三教授にお話を伺った。

「研究をもとに教育を実践し、そこで得られた知見が研究にフィードバックされる、教育と研究が一体となって回るサイクルを作り上げたい」と境教授は話す。センターには英語を含めたり言語の科目が設置されている。今回本紙記者は、境教授担当の、初級発音と聴解練習を中心に学ぶドイツ語表現技法の授業にお邪魔した。



音ごとの違いを体感する学生たち

のかなか、発音の仕組みを知ることが大切だと説明した。授業を受けている塾生たちは、境教授がアルファベットを発音するのを見て特徴を観察したり、実際に自分で声を出して音ごとの違いを体感したりした。

塾生たちにこの授業を受けることになったきっかけは、聞くと「せっかく学習を始めたドイツ語にもっと触れたい」、「使えるドイツ語を身に付けたい」、「すでに学んだことのある言語と違うタイプの言語を学んでみた

いと思った」との回答があった。

また授業の感想について「今まで気付いていなかった声の出し方や発声方法の違いなど、目から鱗が落ちるような経験ができた」、「言語学的な観点から発音を学べるのは有意義だと思った」、「発音について一から丁寧に教えてくれるのが良い」と話した。

センターの授業では、学部の授業で網羅できない部分を補完するような内容を扱っている。リスニングや発音などのスキルに特化した授業や、英語基礎復習、英語・中国語超上級者を対象とした授業など、その内容やレベルは多岐にわたる。

境教授は「これらの授業は学部の授業のサブリメンツのようなもの。専攻や自分の実力を問わず多くの塾生に授業に参加してほしい」

その上で境教授は「外国への憧れなども大切にしつつ、楽しんで語学を学んでもらえればと思う」と話した。

境教授がこのように語るのには理由がある。「実感がわかない人も多いかもしれないが、日本社会の多言語化が進んでいる今日、将来どのような形で外国語を使うことになるかわからない」と境教授は話す。

「たとえ学んだ言語を忘れてしまったとしても、言語学習を通して身につけた異文化を見る目や異文化に接する態度は、相手のことを尊重し理解しながら他者に関わっていくために重要。慶大生は卒業後、社会のリーダーとして活躍することになる人も多いのだから、ぜひ積極的に学習に取り組んでほしい」

その上で境教授は「外国への憧れなども大切にしつつ、楽しんで語学を学んでもらえればと思う」と話した。

その上で境教授は「外国への憧れなども大切にしつつ、楽しんで語学を学んでもらえればと思う」と話した。

(陶川紗貴子)

言語学習を通して

異文化を知る

外国語を身につける 真の意義とは――

外国語教育研究センター所長／
経済学部教授
境 一三



東京外国語大学、東京大学で独
語、独文学、美学芸術学を学ぶ。
現在の専門は外国語教育。20
07年10月、外国語教育研究セ
ンター所長に就任。

外国語教育研究センターではいま、 「行動中心複言語学習プロジェクト」

という事業に取り組んでいます。その目的をひとことで言うならば、慶應義塾全体における一貫した外国語教育プログラムのための、共通参照フレームワークの構築です。

現在、高校までの英語教育と大学におけるそれとの間に大きな断層があることは、教育現場の共通認識です。その原因の一つとして日本には、一貫した言語教育プログラム、あるいは言語教育への確固たる理念がないという問題が挙げられます。そこで慶應義塾では、一貫教育校から積み上げる外国語教育の枠組みを築こうとしているのです。



ヨーロッパの語学教育で使われている「My Languages Portfolio」は一生涯使える言語学習記録帳。現在、この「慶應義塾版」を制作中

言語教育における一貫性の欠如という問題は、かつてヨーロッパにもありました。しかし、2001年に欧州評議会が「外国語学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（CEFR）」を提唱し、学校種にかかわらずすべての生徒が母語12言語を習得することを目標にした、言語教育の基本的な枠組みを構築しました。その結果、年齢や在籍学校という枠を超えた基準に基づき、個人の習熟度を明らかにできるようにになりました。外国語教育研究センターが推進するプロジェクトも、そうした外国語教育の統一尺度を設定することから着手しています。

複言語化の社会に向けて

外国語を学ぶ目的は、人それぞれです。ビジネスのため、という人がいるでしょう。ただ、相手国の言葉が話せても、その国の商習慣を知らなければ、商談の成立は望みません。それ以前に、自身が魅力的な人間であることが伝わらなければ、アポイントメントさえ取れないでしょう。また、国際化への対応と答える人もいるでしょう。では、その人にと

つての「国際化」とは何でしょう。もし同じ職場にいる外国人から「毎日3回、仕事中心にお祈りをしたい」と言われたとき、イスラム教の知識や信仰に対する理解度で、対応はがらりと変わるはずで

みなさんは「複言語」という言葉をご存じですか。「複言語」とは、一つの社会の中で一人ひとりが程度の差こそあれ複数の言語を身につけ、かつ言語の背景にある文化を相互に理解したうえで交流し共存している状態のこと。その一方で、たとえば同じ街の中に日本語を話す人、中国語を話す人、韓国語を話す人が生活しているが、互いに交流を持たない「多言語」とは区別して用いられます。「複言語」は共生と平和の礎になります。また、「多言語」はときに対立のきっかけともなります。外国語を学ぶ目的とは、まさに一人の人間として「複言語」の能力を身につけることにあります。つまり、複数の言語を習得するとともに複数の文化を理解し、それらを適宜使い分けながら、言語も文化も異なる他者を尊重でき

るようになるということです。
外国語を学ぶ「入り口」
外国語を身につけるうえでいちばん大切なのは、自分の思いを伝えたいという気持ち、相手のことを知りたいという気持ちを強く持つことです。本心から伝えたい、知りたいと思えば、単語を並べるだけでも通じ合えるはず。まずはそのような場面に身を置くことです。ある程度のコミュニケーションができてくると、「もっと複雑な内容を伝えたい」「もっと正確に知りたい」という欲求が自然に生じ、そのための文法を学び、単語を覚え、自ずと使える文章も複雑になっていきます。

なお、複数の言語において「読み、書き・聞く・話す」のすべてができるようになる必要はありません。文法が好きなら読む力を、海外旅行が趣味なら会話の技術を身につけることに力を注ぎましょう。まずは、自分にとって最も身近なものを、外国語と外国文化の入り口にしてみてはいかがでしょうか。



境教授がよく使用するのは、動画学習ツールの「ムービーレコ」だ。「Web上の映像や音声を使用するときや、CDの音源を聴き、各自で口頭練習するときも重宝しています。「録音回収」機能を使えば、学生が録音した音声を一斉に回収することもできるので、テストにも活用しています」と使用感を話す。

言語活動には「音」が中核となり、「人と接することが不可欠である。教科書にあるような「お膳立て」されたような会話練習を繰り返しても、ロールプレイングにしかならず、それは現実の会話にはほど遠い。かに初級段階から、その言語の本物の音に慣れ、学習者自身にとつて意味のあることばをかわすのが大切だと境教授は言う。そ

れゆえに、現在、Web上で得られる音声や映像などの素材は、言語学習には効果的だ。

4 技能をフルに活用して 使えるドイツ語を学ぶ

境教授がパートナーの教員とともに受け持つ経済学部1年生の「ドイツ語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」は、ドイツで発行されている外国人ドイツ語学習用テキストを使用して授業を進める。文法、読解、リスニングなどに分けて学ぶのではなく、「読む、書く、聴く、話す」の4技能を総合的に使いながらスキルを伸ばす。1年間でCEFR(ヨーロッパ共通参照枠)のA1レベル(Basic User)まで到達できることを目標としたカリキュラムを組んでいる。

ヴィヴァルディ作曲の「四季」がBGMで流れ、ヨーロッパを想起させるような空気が作られた教室。1人1台のパソコンを用い、学生たちはLMSを立ち上げて、心静かに授業を待つ。授業冒頭、境教授はドイツ語で学生たちに挨拶し、学生たちも挨拶を返す。大学に入学してからドイツ語を学び始めた学生たちばかりだが、境教授の話すドイツ語に対して、聞き返すような学生もおらず、スムーズに会話が流れていく。

授業はLMS上にアップロードされている小テストから始まった。学生たちは制限時間内に、次々と答えを入力していく。解答を終えた学生から正解、不正解をオンラインで確認し、間違えた箇所をその場で見直すことができるようになっていく。教室前方の境教授のデスクでは、「Calando」も起動している。座席アイコンから学生たちの学習状況が見取れる。17名の学生全員がテストを修了すると、アル

ファベットの発音練習が始まる。そうしてドイツ語の音に口と耳が慣れたところで、テキストの内容に沿った質疑応答へ。

この日のテーマは「時間表現」だった。挿し絵を見ながら、アップロードされている音声を聴き、どんな場面なのかを類推しては、境教授の質問に答えたり、学生同士ドイツ語で質問しあうという流れだ。単にテキストに示された表現だけを教え、覚えるのではなく、実際の生活の場面でよく使われる表現も同時に伝えられる。テキスト本文の表現中に現れた分離動詞「aufstehen(起きる)」を説明する際には、

パソコンが調べ学習の道具に早変わり。学生各自にオンライン辞書をその場で引かせて、類語なども派生的に学んでいた。

このように、4技能をフルに活用しながらテンポよく進んだ授業は、最後に各自がフォーラムにその日の授業で学んだことや何ができたようになったのかといったことを書き込んで終了となった。

学習素材となる音源を共有し
より手本に近づける練習を

外国語教育研究センターの「特設科目」で開設されている「ドイツ語表現技法1a」も、境教授が担当している。学部不問の特設科目は、学部には設置されていないような科目や、特定のスキルや課題に重点を置いた科目などだ。「ドイツ語表現技法1a」は「発音・聴き取りレッスン」と称し、毎回テーマを設けて実践的なレッスンを行う。7回目の授業となったこの日は「発音は「かたまり」こと」がテーマだった。

授業冒頭はアルファベットの発音に始まり、曜日や月名などもリズム感よく発音

しながら、ドイツ語の音に慣れていく。その後はヘッドセットを装着して、音源を聴きながらの発音練習。「r」や「ch」のいろいろな発音を練習した。

「手本の音を正確にまねしようとすることを意識してください。そして、自分の発音がどれだけ手本と違うかにも意識するようにしましょう」と、境教授は学生たち呼びかける。発音と聴き取りに重点を置いた授業だけに、受講している学生たちも、自身の発音を手本に近づけようと熱心に声を出して練習していた。

この日の学習のメインは、ドイツ語の歌を題材に、意味の「かたまり」を意識しながら発音すること。YouTubeにアップロードされた「Hänschen Klein」の歌の音源を聴いて前回学んだ1番を歌ったのちに、今回初めて聴く2番の書き取りに移る。境教授が発音し各自がとらえた音を文字で表し、グループごとに内容を確認し合い、正しい歌詞を探る。しばらくすると、境教授のモニタと学生各自のモニタを共有して歌詞が表示され、最終的には、意味のかた



CHleru Case

チエル システムの活用事例

“CHleru Case”では、授業の目的に合わせて、チエルのシステムや教材を利活用いただいている先生方と、その授業の様子を紹介。
今回は、「慶應義塾大学(日吉キャンパス)」「富山高等専門学校」の「CaLabo EX」事例、「神奈川県立白山高等学校」で行われたCALLワークショップの様子を紹介します。
これからの授業を、より発展的なものにするためのアイデアやヒントが詰まっています。



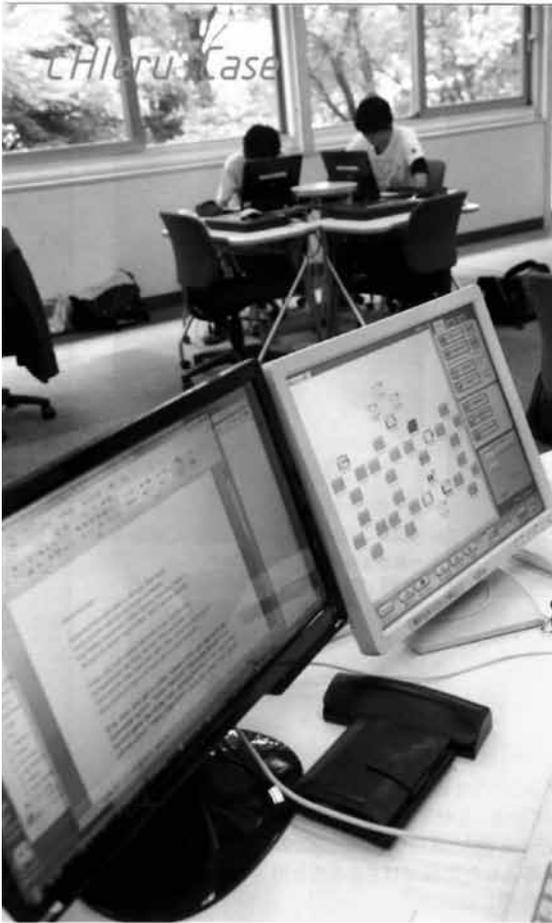
『CaLabo EX』やLMSは 学習を支援する道具として大いに活用できる

言語学習の場は、言語使用の場
生きた音に触れる環境作りが大切
取材で訪れた日吉キャンパスの第3校舎
の教室は、CALLシステムを備え、いわゆるス
クール型の机配置ではなく、ゆったりとした
空間の中で、4人組で向き合いながらグルー
プワークを進めやすい机配置になっていた。
「パソコンやCALLシステムは、学習の主
役ではなく、あくまでも、道具」です。外
国語の授業において、道具がコミュニケーション
を阻害するようない道具がなくてはなら
ないのです」と、境教授は述べる。言語学
習の場は、言語使用の場であるとの考えに
基づき、CALL教室を使うことも、大切に
しているのは「人と人との触れ合い」だ。そ
のため、導入している「CaLabo EX」も、す
べての機能を使って授業を組み立てるので
はなく、必要な機能を選んで使っている。

慶應義塾大学 日吉キャンパス(神奈川県)

CALLシステム **CaLabo EX**

慶應義塾大学では、幼稚園(小学校)から大学院にいたる義塾全体の外国語教育を支援し、充実させるため「外国語教育研究センター」を設置している。ここでは、英語に限らずドイツ語、フランス語など9言語の特設科目を展開するほか、外国語ラウンジやオンライン学習による学習支援などが行われる。学習マネジメントシステム(Learning Management System=LMS)とCALLシステムを活用して授業を展開する、同センター所長の境一三教授を訪ねた。



まりを意識しながら何度か音読を繰り返したところで、音源に合わせて全員で声を合わせて歌い、授業は終了した。

常にパソコンがそこであれば、教室は世界に開かれた空間に

いずれの授業においても、境教授は学生に向けてドイツ語で指示を出し、解説をする。学生たちも、質問があればドイツ語で発言し、教室内はドイツ語によるコミュニケーションが成立していた。

「4月当初は英語や日本語も交えてコミュニケーションを取りますが、徐々にドイツ語の比重を増していきます。ドイツ語を学ぶに当たり、学生たちがドイツ語話者のコミュニティに入っていくときに、少しでも音を聞き取り、相手の表情を見て、話している内容を感じ取る力を身につけてほしいと考えているからです。最初はインプットを多く、次第にアウトプットもできるようにしていきます」

アウトプットできる力をつけるためには、表現できる内容を持たねばならない。それには、テキストにある「作られた」場面の会話表現だけではなく、実際にそれらの表現がどのように「使われる」かを知り、会話が必要となる数値などのデータも準備しておくことも必要となる。テキストで学んだ表現は、実際に学習者同士で使うことによる応用が可能となる。

「たとえば、数について学んだら、人口の聞き方の表現も同時に覚えれば、『ドイツの人口はどのくらいですか?』と尋ねることが出来ます。それをドイツの都市に置き換えて表現することもできます。このような学習の際には、学生自身に調べさせ、ペアを組んで聞き合うことをします」

そうした調べ学習のためにも、教室はネットワーク化されたパソコンが常にある環境でなければならぬ、と境教授は強調する。WikipediaやGoogleなどを使って、まずは日本語や英語で調べ、検索結果が表示

されたら、言語メニューからドイツ語を選択して、ドイツ語での表現を知る。こうして生きた情報に触れることで、学びは生きたものになる。

「ドイツ語で書かれた文章をすべて理解はできなくても、文中から数字や分かる単語などを拾い読みして類推し、読む力もつけていきます。1年の後半にもなれば、たまただしくも調べ学習の成果をドイツ語で発表することができるようになっていくものです」

境教授の授業では、音声も聴く、画像を見る、小テストに解答する、調べる、フォーラムに書き込む……といったさまざまな活動がパソコンを通じて行われる。だがパソコンはあくまでも学習をスムーズに行うための道具にすぎなかった。授業には活気があり、そこには境教授と心を通わせ、自らのスキルを伸ばそうと意欲的に取り組む学生たちの姿があった。

「今後にも必要に応じて、SkypeやTwitterなどを活用してドイツ語による「1対1」の場を開いていきたい」と話す境教授。学生たちが学んでいる教室は、閉ざされた空間ではない。常に世界とコミュニケーションすることのできる開かれた空間なのである。



外国語教育研究センター所長 経済学部・ドイツ語環境 一三 教授

外国語学習を通じて、オープンマインドな学生を育てたい

外国語教育研究センターの所長としての立場から、境教授に慶應義塾大学の外国語教育のあり方について、お話を伺った。

「外国語とは、自分を世界に開くために学ぶものです。まずは、ことばそのものに興味を持ってもらいたいですね。そして、そのことばを話す人々の文化や社会を理解し、受け入れる姿勢が必要です。日本では、外国語としてまず英語を学びますが、英語以外の言語によるコンタクトもあることを若いうちから気づかせたいと思っています」

ます。ドイツ語は一つの例にすぎず、本学では数多くの言語を学べる環境が整っており、学生たちには英語だけでなく複数の文化や言語にオープンになれるようになってほしいと願います。今、日本社会は多言語化が進んでいます。そうした変化に対応できる能力を学生のうちに身につけてほしいものです。いずれは社会のリーダーとなっていく学生たちですから、外国語教育を通じて、さまざまな文化や言語的背景を持つ人々とオープンに交流できる人材を育てていきたいと考えています」

ORF2010 Open Session

Learning Design Project <http://ldp.sfc.keio.ac.jp/>



「毎日を教科書にしたい！」
—学習者がデザインする学習環境—

外国語学習につまずいた経験を共有し、新しいIT教材を考えるワークショップ

発表者紹介

- 石井 誠 慶應義塾大学 SFC 研究所 研究員
- 中山 みなみ 慶應義塾大学 環境情報学部 4年
- 米持 愛未 慶應義塾大学 環境情報学部 4年
- 遠藤 忍 (司会) 慶應義塾大学 総合政策学部 4年

登壇者紹介



太田 達也

南山大学外国語学部ドイツ学科 准教授

ドイツ語教育、外国語教育学、応用言語学、近代ドイツ文学



リースラント, アンドレアス

南山大学外国語学部ドイツ学科 准教授

ドイツ語教育



倉林 修一

慶應義塾大学環境情報学部 専任講師

動画像・音楽データベース、アクティブ・マルチデータベース



藁谷 郁美

慶應義塾大学総合政策学部 准教授

ドイツ語、ドイツ文学、ドイツ語教授法

Multirecord2.0

インターネット上に自分で作成していくオリジナル辞書。単語の意味や品詞、用例を登録するだけでなく、他人の辞書の閲覧やコミュニケーションによる共有が可能。

d=map

Wiki を利用し、ドイツ語海外研修に参加した学生の留学情報、体験談やフィードバックの資料を集録したデータベース。

名詞データベース & 名詞性当てクイズ

870 のドイツ語教科書「Modelle」が扱う名詞を、画像データとして収録し、データベースを構築。名詞性クイズを使うことで、単語ではなく、イメージで見える事ができる。

XV-Zimmer

写真をコラージュして作られた仮想空間でドイツ語を学ぶweb教材。キャラクターが投げかける質問や質問の答えによって、ストーリーの展開が変化する。

Mobililin

携帯電話向けの、ドイツ語学習サイト。「発音導入コース」「キーセンテンス」「スケッチ」「待ち受けドイツ語数字」の、4つのコンテンツがあらゆる携帯でも利用可能。

Platzwit

既存のコミュニケーションツールである、「twitter」を利用した新しいドイツ語学習環境。このシステムを利用する事で、ドイツ語のつぶやきを発する事ができる。また、GPSを利用して位置情報と結びつけることもできる。



慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス
Keio-Universität (Shonan Fujisawa-Campus)

ラーニング・デザイン・プロジェクト

Learning Design Project

Mail: <dmode-rg@sfc.keio.ac.jp>
http://dmode.sfc.keio.ac.jp

NEU

D=check

各課ごとの文法事項を復習するための、独作文教材。間違えやすいミスが登録されているので、学習者の様々な回答に対応することができる。毎週授業内で行われる10分間テストの対策にも最適。

iPhone、iPod touchに対応したd-mode Web ページもあります。各教材の紹介を見る事ができ、且つそのページのアクセスができるようになっています。

d=pod

授業で扱った「キーセンテンス」と「スケッチ(ビデオ)」の音声・動画をポッドキャストで定期配信するシステム。

d=rama

学習者が授業中で作成した4コママンガを定期配信する。相互性を重視したコンテンツ。学習した文法や表現を使って作成してもらい、特によかった作品を動画化して配信。

d=Scope

GPSを利用することで利用者の位置情報を特定し、その場所や状況にあった学習コンテンツを自動配信するシステム。他の研究室と合同で研究が進められた。

d=Theater

Modelleの動画に字幕を付けたり、リスニング教材。穴埋め問題や選択問題など様々な形式の問題に挑戦できる。

発音導入コース

PCやiPhoneの画面を見ながら映像に合わせて発音練習ができるコンテンツ。簡単な繰り返し操作で反復練習ができ、音声・映像をまねることにより自然な発音を身に付けることができる。

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

**Project Title: A Basic Research on Discourse about
Minorities in the Context of Cultivating
Plurilingual/Pluricultural Skills**

Presenters: Akira Kohbara, Fuminori Nakamura
Masako Suzuki, Kazumi Sakai

1. Background/Goal

This research sought to identify key features of minority representation in the context of international English language debate competition. Debate has been widely utilized in many regions of the world as a pedagogical tool. We hoped that the research would inform educators of areas that they need to tackle when they conduct anti-oppressive work in language classrooms.

2. Method

The data, speeches on minority groups (e.g. Romas, PWDs), were collected in major international debate competitions during the 2000's. Three researchers, each with an experience of debate as an English as a Foreign Language (EFL) speaker, picked remarks that they found intuitively offensive. The selected remarks were then analyzed by using various frameworks of Critical Discourse Analysis.

3. Result

The below listed statements were sampled as typical offensive remarks.

Sample #1

"(Roma people) do not exercise the right to get education in their language, not because this right is violated, not because they are prevented to do so, but simply because they do not want to."

"They [Roma people] are reluctant to get education because this is their point of view, in part, and education."

Sample #2

"It's not - a woman doesn't decide where she wants to work based on whether she can go into this nice fluffy womanly environment that we have told about."

"This means that actually these women tend to be elite women who don't necessarily always sympathize with the common women that we have been told about by the proposition. These women look at themselves and they think, look I managed to get to this stage in the company without the help of anyone else. Why should I be helping another woman work her way up the company just because she is incapable."

Sample #3

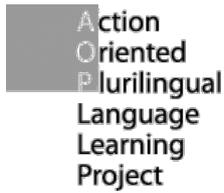
"Under the status quo, you need parent's approval to marry until 20 and boys don't have to marry in case of unexpected pregnancy of their partners. But after the plan is adopted, the girls will be able to pressure them to marry and life of boys with bright future will be ruined"

4. Discussion and Conclusion

The research pointed to four key overlapping features of offensive remarks.

1. The Use of Pejorative Words
2. Factual Errors that Reinforce Negative Stereotypes
3. Devaluing Portrayals (Sick, Useless, Social Menace, Lazy, etc.)
4. Misrepresenting the Group's Interest (Unwilling to Receive Education etc.)

Very few of the current foreign language courses focus on aforementioned issues and further curriculum development is needed.



コミュニケーション・アプローチによる複言語教材開発に備えた 言語機能別の表現類型リストの研究

発表者：中津川みゆき

1. 背景・目的

本AOPの先行モデルであるヨーロッパ共通参照枠 (CEFR=Common European Framework of Reference for Languages) が示す理念と基準にかなった方法で外国語の学習を進めることのできる教材開発を念頭の置きつつ、そのよりどころとなるべき枠組みを追究した。

2. 研究手法

まずCEFRの中核部分を担うB1レベル(Threshold Level) が示す能力記述文(Can Do statements)に対応する表現類型リストの試案を作成した。これは、B1レベルの前身に当たる *Threshold Level 1990* (van Ek & Trim, 1991)の言語機能別の表現類型を、*Function in English* (Blundell et al., 1982), *Expression and meaning: Studies in the theory of speech acts* (Searle, 1985) を参考にしながら、整理したものである。次いでこの試案(英文、約150例)を基に、個々の表現類型に対応する語種別の典型表現例を、アラビア語、中国語、ロシア語、ドイツ語、スペイン語、そして英語の専門家が検討、確定した。さらに、必要に応じて学習者向けの文法事項として何を補足すべきかをも考究し、付記した。

3. 結果

CEFRのB1レベルに対応する言語機能別表現類型リストを各言語種ごとに作成することで、言語機能とそれを表現する文法パターンとの密接な関係が浮き彫りとなった。CEFRが文法を前面に出すことを敢えて避けている背景には、ヨーロッパ諸言語による運用能力を共通の指標で比較するという目的と共に、初期のコミュニケーション・アプローチの根底にあった文法シラバス否定の理念が存在する(Richards & Rogers, 1986)。しかし90年代以降、認知言語学(Evans & Green, 2006)の発展に伴いTESOLでは*focus on form* (Long & Crookes, 1992)を始めとする文法指導の重要性が見直され、言語機能と文法を一体化させた指導法が求められている(Ellis, 2009) このような流れの中で、言語機能別の表現類型リストと文法事項を併記するという本研究の試みは、大変意義の深いものであると考えられる。

4. 考察

本研究により言語機能と文法パターンがリンクされたことで可能となるのは、文法を文法として学習するのではなく、言語機能を果たす言語ツールとして学習することで、真に運用可能な言語能力の習得につながるということである。さらに、複言語習得という観点からは、本研究の表現類型リストがB1レベルという同一平面での諸言語の比較を可能とすることから、複言語、複文化的視点での「気づき」につながることを期待される。

今後の課題として上げられるのは、CEFRが示す理念と基準にかなった外国語の教授法の開発と本研究による教材の活用である。EFL環境における英語指導の一例として、英語学習期間を以下のとおり基礎期、応用期に分けることを提案したい：

基礎期

基本語彙、基本文法の学習に主眼を置く初等、中等教育では従来の文法シラバスを基軸としながらも、言語機能別の表現類型リストの導入により言語機能と文法のリンク付けを行う。

応用期

基本語彙、基礎文法の学習が終了した高等教育、大学教育においては、コミュニケーション・アプローチによる真の言語運用能力の育成のためコミュニケーション・タスクと言語機能を一体化させた*task-based syllabus* (Robinson, 2009; Nakatsugawa, 2010)を作成、導入する。

なお、今回の表現類型集は飽くまで研究上の足がかりを確保する為のプロトタイプであり、今後の研究を通じて教育現場と連携しての完成度を高めることが期待される。

Action
Oriented
Plurilingua
Language
Learning
Project

初年次外国語教育における大学間CSCL研究 (OKプロジェクト)

発表者: 境 一三・森 朋子

1. 背景・目的

本プロジェクトは、ZPDが働かない**初心者同士の協調学習**において非同期型の非対面他者からの影響について考察し、その結果から初年次の外国語教育のあり方を考えることを目的とする。協調学習はコンピューター支援によるCSCLとし、moodleを用いる。

研究手法

対象: 慶應義塾大学経済学部学生1年生25名 大阪大学工学部1年生50名

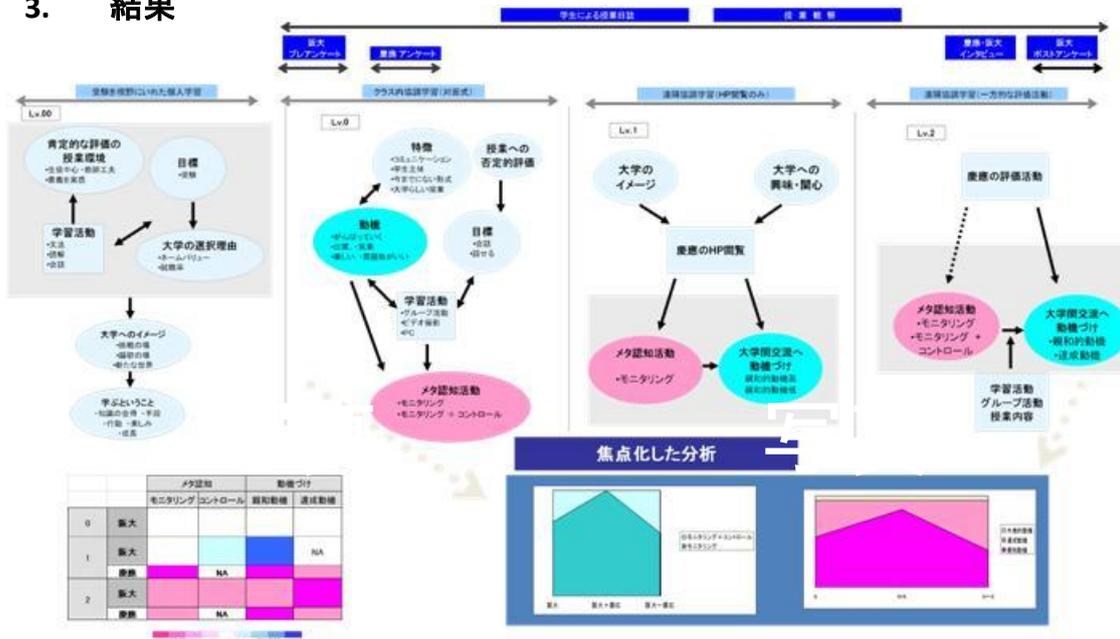
調査期間 : 2007年4月~2008年3月

HP上の仕掛け : 1)慶應 文法説明、小テストなど学習内容が充実。学生個人に関する仕掛けはなし(心的距離遠い)

2)阪大 学生の顔写真、プロフィール、パフォーマンス動画(心的距離近い)

手法 : 1)グラウンデッド・セオリー・アプローチ 3)エスノグラフィ

3. 結果

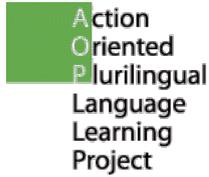


4. 考察

- Lv.1においては阪大学生のメタ認知活動に関して対面他者と非同期・非対面他者との影響の相違は見られない。
- Lv.1において慶應の学生が阪大の学生に親和性を感じたのに対して、阪大の学生は慶應の学生個人に関して親近感を感じなかった。
- Lv.2において大学間交流の中に必然的な学習活動を盛り込んだ場合、阪大側にも達成動機が得られた。

- 動機づけがなされていない他者からの影響は少ない
- 心的距離が遠い他者には親和的動機が起きにくく、達成動機が促進される。
- 心的距離が近い他者には達成動機が起きにくく、親和動機が促進される。(対面、非対面を問わず)

初年次、非同期型他者特有の動機づけを活用することにより、学びが拡大



日本語版言語ポートフォリオの実践と解釈に関する 質的研究

跡部智・井本由紀・堀口佐知子

1. 背景

AOPプロジェクト第1ユニットの言語ポートフォリオ研究企画では、ヨーロッパ言語ポートフォリオ(ELP)を日本での外国語学習の実際に即して修正を加え、日本語で書かれた慶應義塾版の言語ポートフォリオを開発し実践することを目的としている。

ポートフォリオの検証については、慶應義塾の各一貫教育校および大学の各学部の一部の教員に言語ポートフォリオを配布、授業時に学習者に記入を依頼し、学習者から感想・意見を収集後、教員から質問紙での調査によりフィードバックを収集・分析することによって行った。

2007年に英語版の英国CiLT (National Centre for Languages)が発行しているヨーロッパ言語ポートフォリオ(ELP)―ジュニア版(このポートフォリオが選ばれた背景、CiLTとの契約内容についてはHoriguchi et al. 2010参照)を配布し(計644部)、その後、フィードバックを参考にしつつ日本語に訳した言語ポートフォリオを作成した。2008年にはこの日本語版ポートフォリオを配布し、更なる検証と改良を試みた。

所属	2007年度 配布部数 (計:644)	所属	2008年度 配布部数 (計:1898)
湘南藤沢中等部	23	幼稚舎	610
中等部	24	中等部	16
普通部	22	湘南藤沢中等部	125
未来先導(中学)	40	志木高	450
志木高	10	塾高	310
塾高	220	女子高	25
女子高	45	経済学部	140
理工学部	260	理工学部	110
		文学部	70
		法学部	42

2. 研究手法・目的

2009年度に行われた本企画は、2006年度から行われてきた言語ポートフォリオ開発の実践的研究を補完する形で、CEFRおよびELPの受容に関する質的調査を実施し、人類学の視点を援用した考察を試みることを主眼に置いている。

その目的は、慶應義塾の教員及び生徒による日本版ELPの受容や多様な解釈について組織人類学および教育人類学の視点から多角的に考察することによって、CEFRおよびELPを外国語教育の場において用いる際に生じる概念上および実践上の問題を指摘することにある。

日本語版言語ポートフォリオの実践と解釈に関する 質的研究

跡部智・井本由紀・堀口佐知子

3. 結果

アンケートおよびインタビュー調査から得た主な意見は以下の3点にまとめられる。

(1)自己評価の意義・曖昧性

- ・日本人はテスト好み？
- ・can-doの記述子が曖昧
- ・小学生レベルでは過大評価する生徒が多い

(2)日本の言語環境の特性

- ・ヨーロッパの複言語・複文化の状況と、日本の言語使用状況は異なる
- ・日本人の外国語との接触は教室に限られている。

(3)慶應の制度的構造の特性

- ・「スタンダード」づくりは学部・学校・教員の「独立自尊」の精神を脅かしかねない？
- ・各教員は組織において複数の役割を担っており多忙であり、義塾全体の外国語教育改革実践に時間を割き、コミットすることは難しい立場にある。

4. 考察

本調査では、ELPの導入に対する否定的な意見が目立ったが、それはELPに対する本質的な反発というよりむしろ、調査実施過程での方法論的な問題に関する指摘であったとも解釈できる。

新たなツールの導入の際には、まずは明確なモデルあるいは実践例を蓄積することが重要であり、さらに、教員の立場や制度的状況を理解した上で、ワークショップを実施し、ボトムアップな教育ツールとカリキュラムの開発を教員と共に行うべきであろう。

その際に今回のような質的研究を並行して実施し、受容のプロセスに伴う諸問題を個人のレベルで把握し、各教員の立場・経験を十分に理解した上で彼らの声を反映させることが、文脈を理解し、文脈に根ざした教育法やカリキュラムを提案する上で重要であろう。



参考文献: Horiguchi, S., Harada, Y., Imoto, Y. and Atobe, S. (2010). 'The implementation of a Japanese version of the "European Language Portfolio-Junior version-" in Keio: Implications from the perspective of organizational and educational anthropology.' In Schmidt, M., Naganuma, N., O'Dwyer, F., Imig A. and Sakai, K.(eds.) *Can do statements in language education in Japan and beyond—Applications of the CEFR—『日本と諸外国の言語教育におけるCan-Do評価—ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)の適用—』* 朝日出版社.

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

英語教育実習生の自律的成長を促す要因

発表者：藤田真理子

1. 背景・目的

生徒・学生を自律的学習者にならしめるためには、まず教師が自律的学習者でなければならないという指摘がある。(Little,1995) 教職を目指す学生はどのようにしたら『自律的教師』になれるのか。どのような教職のための訓練が望ましいか。今だ明確な結論はでていない。本研究ではリフレクションに基づいた教員養成の実践方法を試してみた。まずフレクションとは何か。Schönは以下のように指摘している。In many real world situations the theories we have learned may not be sufficient to solve the problem at hand. It becomes up to the practitioner to be able to reflect-in-action on a situation, to be able to come up with a set of alternative actions.

(Schön, 1987)

Practitioners do frequently think about what they are doing while doing it. (Schön, 1983)

Schönの興味深いところは教師は授業が終わってからだけでなく、授業をしながら絶えずリフレクションを行っているという点である。

2. 研究方法

a 研究の参加者

三田キャンパスにおける春学期英語科教育特IIを受講した学生7名が本研究の参加者である。7名のうち2名が大学3年生、4名が大学4年生、1名が教職特別課の学生で、7名中4名が春学期中に教育実習を経験し、残りの3名は来年2011年に教育実習を予定していた。

b シラバスの工夫

学生の教育に対する各自のビリーフを自己認識させるチェックリスト・ジャーナルライティング・ビデオ分析・レポート・ディスカッション



3. 結果と考察

- a リフレクティブ・アプローチは教育実習生の自律的成長を促すことができるか
教育実習前はある程度の気づきを観察することができたが、学生にとっては大学での「練習」であり、現場での「実践」ではないため、自己の教育観を変え、自己の行動までを変えるリフレクションは難しいようだ。
- b 教育実習生の自律的成長を促すために大学での訓練はどうあるべきか
学生は数週間の実習では現場を知ることによって精一杯であり、自己を教師として成長させるにはもっと長い実習期間が必要と思われる。現在の大学での教育実習生の訓練はまるで水のないプールで泳ぎ方を教えているようなものである。せめて1年間ほどの実習期間をもてるようなシステムの確立が急務である。学生にリフレクション・アプローチを通して、各自がもつ教育観を認識させ、なぜ自分はそのような教え方をするのか、どのようなことが自分の教え方に影響をもたらしているかを認識させることは学生の自律性を促すために有意義である。



Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

"MOTEUR !"

PATRICE LEROY

avec

KURADATE KEN et KUNIEDA TAKAHIRO

① Objectif initial

Pour nous, "Moteur !", c'était avant tout au départ une tentative cinématographique de produire quelque chose qui ne devait pas se contenter d'être une énième reproduction ou projection des manuels de FLE, toujours plus nombreux certes mais aussi toujours très politiquement **corrects**. Provocation, clin d'œil, pied de nez, ou peut-être même n'importe quoi, voire douteux ! C'est vous qui jugez, on ne vous en voudra pas car vous avez le droit d'être différents de nous, tout comme nous de vous, tout comme un étudiant d'un autre étudiant.

② Méthode

"Moteur !" présente

1. des sketches
2. de la grammaire filmée
3. des documentaires provocateurs de débats
4. des quiz
5. des interviews, non préparées à l'avance, de personnes de milieux différents
6. des images prises sur le vif
7. des niveaux de langues différents
8. des reportages sans complaisance sur la francophonie au Maroc, au Viêt Nam, au Canada, au Sénégal, en Nouvelle Calédonie qui viennent infirmer ce qui est parfois imprimé dans certains manuels
9. des commentaires portant sur les Japonais (les images-miroir) qui devraient faire réagir l'apprenant.



④ Message

L'apprentissage d'une langue étrangère devrait servir, entre autres choses, de cadre de réflexion pour l'apprenant sur le fonctionnement de sa propre culture, le mettant ainsi dans de bonnes dispositions pour découvrir progressivement son "altérité". En devenant ainsi sociologue de son propre comportement dans une société donnée, il sera plus à même de remettre en cause les éventuelles représentations stéréotypées qu'il se faisait du pays dont il désire étudier la langue découvrant fortuitement au passage que cette langue cible est loin de définir ce-dit pays et inversement.

③ Résultat

"Moteur !", n'est pas une méthode, c'est davantage un ensemble de données dont le contenu évoluera au cours des années grâce à l'apport de chaque utilisateur, ce dernier pouvant appartenir indifféremment à la catégorie des enseignants ou des des enseignés. Ce n'est pas non plus un objet fini qui serait par conséquent figé dans le temps. Ça n'est définitivement pas une nouvelle recette pédagogique miracle !



Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

企画タイトル: コンテンツとタスク中心の教授法におけるドイツ語学習過程の調査研究

発表者: Michael SCHATZ・濱野英巳

1. 背景・目的

外国語教育の現場において、コンテンツ中心、タスク中心の教授法が登場して久しいが、授業での実践については明らかになっていない点が多く、特に当該言語能力の習得との関連については未だ議論の余地があり、縦断的な研究プロジェクトで明らかにされたものは多くない。本研究はこうした研究上の穴を埋めるため、三年間にわたりドイツ語学習者を調査し、コンテンツ・タスク中心の教授法の影響を中心に、学習過程と学習行動を多角的に考察することを目的とする。

なお、本研究で用いるコンテンツ・タスク中心の教授法とは以下のようなものである。

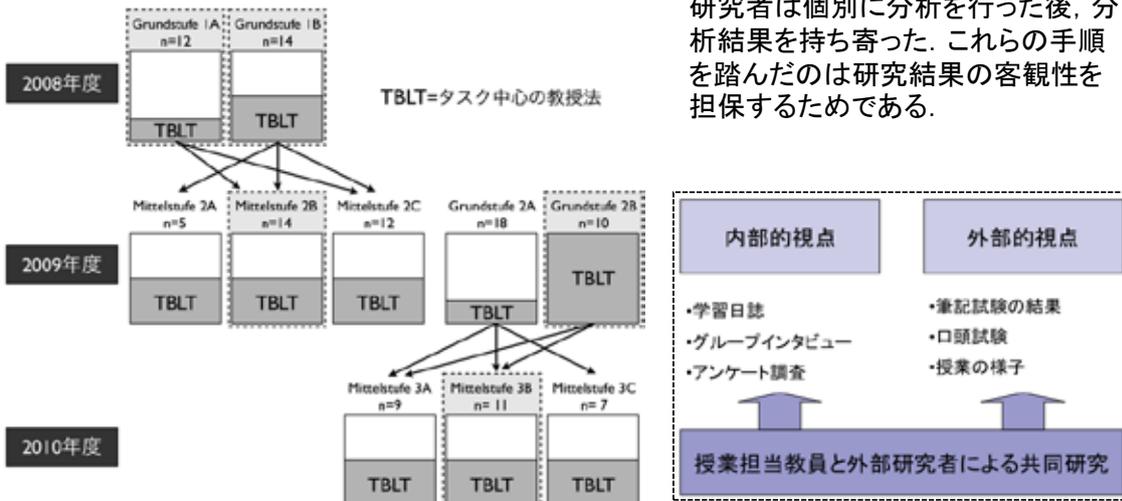
- ❖ 文法シラバスや言語学的クライテリアに準ずるのではなく、コンテンツ/テーマを中心に構成される。
- ❖ 教材はauthenticなテキストを基に作成したオリジナルのテキストを使用。
- ❖ コンテンツ/テーマに焦点を当てながら言語の形式的側面について気づきを促す。
- ❖ 言語能力や言語知識を個別に学ぶのではなく、情報交換、意見の交換、問題解決、意思決定といった創造的言語活動を包括的に学ぶことが目的である。

2. 研究手法

本研究の調査対象は慶應義塾大学法学部において1993年のカリキュラム改革で設置されたドイツ語インテンシブコースである。2008年4月よりドイツ語インテンシブコース初級を2つのクラスに分け、異なる教授法コンセプトを用いて指導し、学習状況、及び言語能力習得に着目してデータ収集を行った。

全てのデータは「ビデオ撮影→文字おこし→質的分析ソフト(MaxQDA)での分析」という行程で分析を行う。研究者は内部的視点、外部的視点に分かれ、授業担当教員、外部

研究者は個別に分析を行った後、分析結果を持ち寄った。これらの手順を踏んだのは研究結果の客観性を担保するためである。



企画タイトル: コンテンツとタスク中心の教授法における ドイツ語学習過程の調査研究

発表者: Michael SCHAT・濱野英巳

3. 結果

本発表においては主にG2Bに関する調査結果のみを掲載する。

内部的視点

授業評価アンケートでは、従来は初級において3コマを担当する日本人教員に比べ、1コマしか担当をしないドイツ人教員の評価が「**授業時間の効果的な利用**」「**目的の明確さ**」「**教師の教授能力**」「**教材の興味深さと効果**」の四点において比較的低かったが、G2Bでは共に解消されており、総じて満足度の高いものとなった。

グループインタビューにおいては次のような点が明らかになった。G2Bで学んだ学生は、自身の学習プロセスにおいて様々な「**学習のあり方を統合**」しており、いわば学習における「**壁**」を感じていない。また、G2Bの学生はクラスメイトや教員を自律的な学習のための「**不可欠の存在**」として認めており、「**協調的な学習態度**」がより多く見られた。

また、コンテンツ・タスク中心の教授法は「**日本の学習文化**」にはそぐわないという声も多く聞かれるが、本研究の調査結果からは固有の学習文化といったものは全く観察されなかった。

外部的視点

習得されたドイツ語能力についても一定の傾向を観察することができた。筆記試験においてG2Bの学生の成績が従来のクラスよりも全く劣ってはいなかったという事実は、従来の授業プランの中でもコンテンツ・タスク中心の授業の導入と継続が十分に達成し得るということを示すものである。またG2Bでは学生の点数が比較的均質でまとまっているという印象を与えるのも特徴的である。

口頭試験については「**流暢さ**」「**正確さ**」「**複雑さ**」の観点から分析がなされた。本発表では特に顕著な差が現れた「**複雑さ**」について報告する。概してG2Bの学生は一年目、二年目の双方において、より良い結果を示すこととなった。この結果はG2Bの学生が意味や文法を一つのまとまり、いわゆるチャンクと捉え、統合的に学んでいるということの現れと考えられる。

以上の結果から、G2Bの学生は文法能力において劣っていないことは明らかである。その一方で「**メタ文法能力**」の不足を指摘する声もあるが、G2Bの学生には十分な「**メタコミュニケーション能力**」を観察することができた。

4. 考察

本研究で明らかになった点として、学生に観察される認知モデルの多様性がある。学生たちは新たなカリキュラムを単に受け入れているばかりではなく、さらにポジティブな結果をも導き出している。授業のコンセプトの違いが学生の言語能力の発達のみならず、学習プロセスにおける認知のあり方にも大きな影響を与えている、という点は、引き続き行われる研究活動において、さらに詳細な調査を行わねばならないだろう。

「スピーキングテストに呼応した教材開発の研究」企画ポスター

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

スピーキングテストに呼応した教材開発の研究

発表者：鈴木雅子、境一三（企画代表）

背景・目的

2009年度に行われたスピーキングテストの開発研究の中で、CEFRのレベル記載に忠実に沿った試験を行った場合学習者が次のレベルに到達するのが困難であるという問題が指摘された。そのため本企画は、スピーキングの特に Argumentative な活動に焦点を当てた教材を新規開発し、学習者の支援を試みた。

新規教材の流れ

- A2: 意見を言おう
- B1: 意見に根拠を添えよう
- B2: 議論の種類に合った論点をおさえよう
- C1: 反論と比較をしよう
- C2: 時間配分・弱者/少数者への配慮に気を配ろう



実験授業

全国高校生英語ディベート大会の優勝チームに世界大会の準備として新規教材を使った講習を1ヶ月半にわたり行った。講習の前後に開発中のスピーキングテスト試用版を受験してもらった。

採点者（3名）： 中学校教員1名、大学教員1名、テスト開発業者1名

被験者（8名）： 中学生3名、高校生4名 (Team Japan)

テスト適用レベル： 中学生 A1-B2、高校生（授業前 A2-B2、授業後 B1-B2）



結果

- ・テキストは概ね被験者に好評であった。特に「議論の種類にあった論点をおさえる」ことを課題とした B2 の章が有益であったとのフィードバックを得た。
- ・これまで日本チームの世界大会での予選8試合の戦績は、0勝8敗が2回、1勝7敗が1回であったが、この講習を実施した年は2勝6敗と記録を更新した。
- ・世界大会でのスピーチ点は後半になるほど高くなり、学習者の練習による成長が確認された。
- ・世界大会でのスピーチ点が高い被験者ほど開発中のテストで合格するレベルも高かった。
- ・しかしながら開発中のスピーキングテストの結果には講習前後で特に違いは見られなかった。

Subject	Level	Marker 1	Marker 2	Marker 3	KET Grammar
A	A1	Pass	Fail	Fail	Pass
B	A2	Fail	Fail	Fail	Pass
C	B1	Fail	Fail	Fail	Pass

Figure 1: 中学生の模擬試験結果

Subject	Level	Marker 1	Marker 2	Marker 3	Speaker Score
A	B1	Pass	Pass	Pass	68.875
	B2	Pass	Pass	Pass	
B	B1	Pass	Pass	Pass	67.937
	B2	Pass	Pass	Pass	
C	B1	Fail	Fail	Fail	66.791
	B2	Fail	Fail	Pass	
D	B1	Pass	Pass	Fail	64.917
	B2	Fail	Fail	Fail	

Figure 2: 高校生の模擬試験結果

考察

今回新規開発した教材は、概ね学習者の評価が高くタスク遂行能力の向上もあったものと思われるが、スピーキングテストによって検知されるほどではなかった。

今後、より長期の学習成果の測定やより細やかなレベル設定の可能性を探りたい。



複言語・複文化的「居場所」における自律的「学び」創出の研究：「三田の家」のエスノグラフィー

手塚千鶴子・堀口佐知子・井本由紀・内山清子・日向清人

1. 背景・目的

本研究は、三田キャンパスのそばにあり、地域に開かれた「三田の家」において行われている日本人学生・留学生・卒業生・日本人/外国人教員を中心とした「小さな国際交流」の場をフィールドとし、CEFRの中心的理念である「複言語・複文化」「自律・協働学習」の場を提供し、その場においてこうした理念がいかにも実践されるのか、主に人類学的観点から考察することを目的としている。特に参加者(日本人学生・留学生・卒業生・日本人教員・外国人教育・地域の人々等)にとり、居場所及びその活動がいかなる自律的な学びや気づきをもたらし、またそれが参加者のacteur/ agent (社会的行為者)としての生き方にどのように影響しているのかに焦点をあてる。

2. 研究手法

2010年4月より手塚のほか、日向、井本、及び堀口が「月曜・三田の家スタッフ」として加わり、参加者の自律的学び・異文化接触を促す場の創出と実践に携わりつつ、協同的フィールドワークを行ってきた。更に内山を交えての定期的なプロジェクト・ミーティング行うことで、研究の進捗状況と問題点を随時確認してきた。このように参与観察を主な手法としつつ、中核的な参加者に対するインタビューも行い、三田の家の様々な「意味」を解釈していくというエスノグラフィー研究を行ってきた。

3. 結果

2010年度、毎週月曜日に以下のイベントを行った。テーマは多種多様であるが、なるべく学生からの主体的な声や提案を優先させつつ、大学内の留学生および学外もふくめ様々な地域・学生団体との交流、さらにオルターナティブな「学び」について考える機会などを促進することもテーマ選定の際に考慮してきた。イベント中心ではあるが、三田の家の「不定形」の何も起こりえないゆるやかな過ごし方も時に大事にしてきている。特別の企画がなく、なんとなくあつまりお茶や食事をともにしながらよもやま話や、意外なホンネのとびだすゆったりした時もまた貴重であった。以下に内容をその特徴により分類してみる。

【伝統文化に触れる】

生け花のデモンストレーション
邦楽演奏
慶應バロックアンサンブルの演奏

【現代日本社会を考える】

ホストクラブ
ひきこもり
在日フィリピン人労働者の課題

【OBOGの話をきく】

グリコで働くサラリーマン
ロンドンで働くデザイナー

【学生の体験、ストーリーをきく】

TCK (Third Culture Kids) (カナダからの留学生)
インド旅行記(日本人学生)
PLURIO主催プレゼン大会(日本人学生及び留学生)
ムスリムとして日本で生活すること(トルコからの元留学生)

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

複言語・複文化的「居場所」における自律的「学び」創出の研究:「三田の家」のエスノグラフィー

手塚千鶴子・堀口佐知子・井本由紀・内山清子・日向清人

【地域活動、交流活動】

三田商店街の夏まつりとのコラボ
シェアハウス: 芝地区へのまちづくり提言
PLURIO主催留学生ウェルカムパーティ

【学びについて考える】

Learning Styles
Right Brain workshop



クリスティン・ニュートン氏を迎えて
右脳のトレーニング



キッチンで食事の準備

4. 考察

I 自律学習・行動中心の実践の場としての三田の家

三田の家ではキッチンでの準備からはじまりさまざまな形の協働学習が自然に展開している。そこでの学びの特徴は「多様な人との協働的な出会い、多様な視点がいきかう刺激的な対話」をとおして、教えずとも、参加者どうしの自然発生的な学びあいが生じていることである。こうした協働学習的対話とはまさに行動中心的で、参加者が主体的にとりくみ行動する一歩を育くみ、自律学習をへて、ひとりひとりの個性の発揮と豊かな育成にもつながっている。

II 複言語・複文化の実践の場としての三田の家

三田の家では、自己紹介だけでなく、頻繁に日本語と英語が併用され、参加者の背景いかんで、その他の言語もとびかうまさに生きた複言語の実践が行われている。さらに、「文化」の多様性、流動性、融合性を体現した参加者やトピックを通し、複眼的な見方や、気づきが培われてきている。そうした複言語・複文化的な存在や体験が比較的少なく、モノカルチュラルな日本ですと暮らしてきた日本人学生たちには、特に、これは大きな刺激となり、長年学校で知識として学んできた英語を実践の場で使うことにめざめ世界を積極的に広げるきっかけとなり、さらに世界の多文化状況への気づきを生んでいる。

Project Title: The Plurilingual Lounge

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

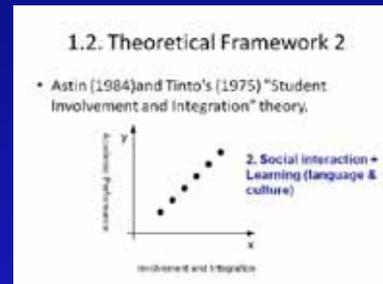
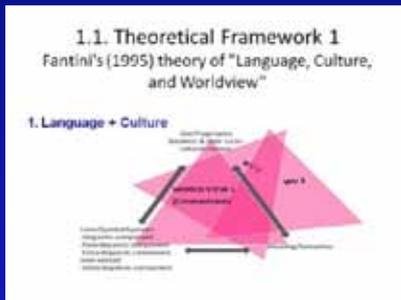
Presenters: Tomoko Yoshida, Clyde Lewis,
Remi Igarashi, Kenichi Kuradate,
Izumi Kurokawa

1. Background/Goal

The purpose of this study was to examine the effect of creating a lounge on campus where students could learn language and culture through natural social interaction.

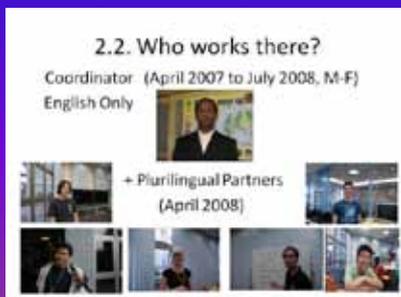
2. Theoretical Framework

- Fantini's theory of language, culture, and worldview.
- Astin (1984) and Tinto's (1975) "student involvement and integration" theory.



3. The Plurilingual Lounge: A Description

- A place where students can stop by at any time and interact with each other in a foreign language.
- A place where students can learn different languages and cultures through social interaction.
- English Lounge → Plurilingual Lounge



Project Title: The Plurilingual Lounge

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

Presenters: Tomoko Yoshida, Clyde Lewis,
Remi Igarashi, Kenichi Kuradate, Izumi
Kurokawa

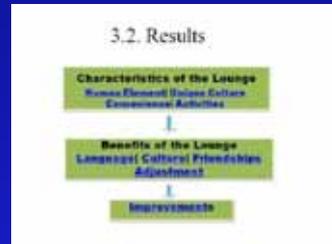
4. Method

- Focus Groups (Summer, 2008)
 - 3 groups of students (n=17; 11 males & 6 females) aged 19 to 34 (mean = 21)
 - 2 groups of plurilingual partners (n=7; 5 males & 2 females) aged 19 to 24 (mean = 23)

3. Analyses

- Video-taped /Full transcripts were made/ Atlas ti was used
- Grounded theory (Strauss, 1987) which allows codes to emerge from the data
- Frequency, extensiveness, and intensity of each theme (Krueger, 1998)

4. Results



4. Summary

- **Relationships** (e.g., with the staff and each other) were key to motivating students to come to the Lounge.
- **Unique culture** of the Lounge -- free from "Japanese rules".
- A place to learn not just language but also **new cultures and worldviews**.
- Need for combining language and culture learning (Milhouse, 1996). The Plurilingual Lounge provides a potent answer by facilitating social interaction and genuine friendships where language and culture learning occurs naturally.

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

古石篤子

より豊かな言語教育を求めて ことばへの気づき・ろう児教育



1

背景・目的

モノリンガルの発想の強いわが国では、言語教育についての構想が極めて貧弱である。日本語（国語）教育においても、外国語教育においてもそうである。ましてや言語的少数者である、外国につながる子どもやろう児への言語教育は補償教育の枠を出ず、彼らの言語的豊かさを生かそうという姿勢は皆無である。本発表では、（1）言語的多数派に属する子どもたちに向けた、他者へ開かれた「ことばの教育」の意義と方法、（2）ろう児に対するバイリンガル・バイカルチュラル教育の方法論についての研究の成果を報告する。

（1）a. 藤沢市立小学校における「国際理解協力員」制度の調査（2008年度）
研究の3本柱（ア）授業参観、（イ）教員の意識調査A（教員の要望書分析）、（ウ）教員の意識調査B（教員98名対象のアンケート調査）。

（1）b. 横浜市立つつじヶ丘小学校「多言語活動」（2010年度）
（ア）事前・事後アンケート調査、（イ）4言語（フランス語、中国語、朝鮮語＝韓国語、日本手話）での多言語活動を合計9回実施。ビデオ撮影。児童の記録分析。担任教員インタビュー。

バイリンガル・バイカルチュラルろう児教育ビデオプロジェクト（2008～2010年度）
Ernest C. Drury校（カナダ・オンタリオ州）の主要な授業をビデオ撮影し、DVD制作。

2

研究手法



研究結果

3

（1）a. 教員の意識調査では、多様な文化や言語への興味が見て取れ、新学習指導要領の下でも本制度の存続を望む声が多かった。しかし、具体的な実施方法には不満な点が多いこともわかった。

（1）b. 事前アンケート調査では、子ども達の自文化に閉鎖的な傾向が観察されたが、実際の授業では大変生き生きとフランス語、中国語、朝鮮語、日本手話の学習に取り組み、学習の継続を希望した。

（2）撮影した全38本のビデオを5つのモジュールに分けて編集した。M1：学校案内（校長・生徒へのインタビュー）、M2：幼稚園、M3：第一言語教育（ASL）、M4：第二言語教育（英語）、M5：教科学習

4

考察

（1）a、bを通じて明らかになったことは、小学校教員は英語活動が必要だとは考えていても、異文化理解教育や多言語活動の重要性もよく理解しているということである。しかし、その方法論については今後の大きな課題である。教員・研究者・教育委員会等が一体となって模索する必要がある。

（2）ろう児には手話での教育が不可欠であるにもかかわらず、それが一般化されていない。手話と音声言語の書記体の2言語でのリテラシーを育成することは緊急の課題である。本研究を通じて、ろう児のバイリンガル・バイカルチュラル教育の方法論の一端を明らかにすることができた。

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

企画タイトル：ITを利用した外国語学習環境の構築

発表者：藁谷郁美・太田達也・Learning Design Project
d-mode@sfc.keio.ac.jp

1. 背景・目的

本プロジェクトの目的は、学習者の多様性と自律性を考慮しつつ、PC・スマートフォン・携帯電話などのさまざまな媒体によるデジタル言語学習教材および学習支援システムを開発し、それらを慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(以下、SFC)で運用し評価を得る活動を通じて、ITを利用した外国語学習環境の構築に寄与することにある。

加えて、言語学習者自身による外国語学習環境の構築が学習者の言語学習に対する意識にどのような影響をもたらすのかを検証することも視野に入れている。

2. 研究方法

本研究はSFC設置科目の藁谷郁美研究会(Learning Design Project/旧 藁谷・太田・ラインデル合同研究会「ドイツ語教材開発研究プロジェクト」)の活動を母体としている。本プロジェクトの活動には、学部生・大学院生・教員・外部研究者が共同で従事し、開発した教材は、実際にSFC内の言語学習者に公開・提供し、その使用者を対象にアンケート調査・インタビュー調査を行って評価を取ることで、さらなる改善につなげている。



また、プロジェクトに参加した学習者の言語学習に対する意識の変化についても、プロジェクトの参加前後にインタビュー調査を行うことで評価を試みた。

3. 結果

2007年以降に制作されたデジタル言語学習ツールとしては、双方向性を取り入れた podcastingシステム d-rama や、携帯電話対応Web単語帳Multi Record などがある。



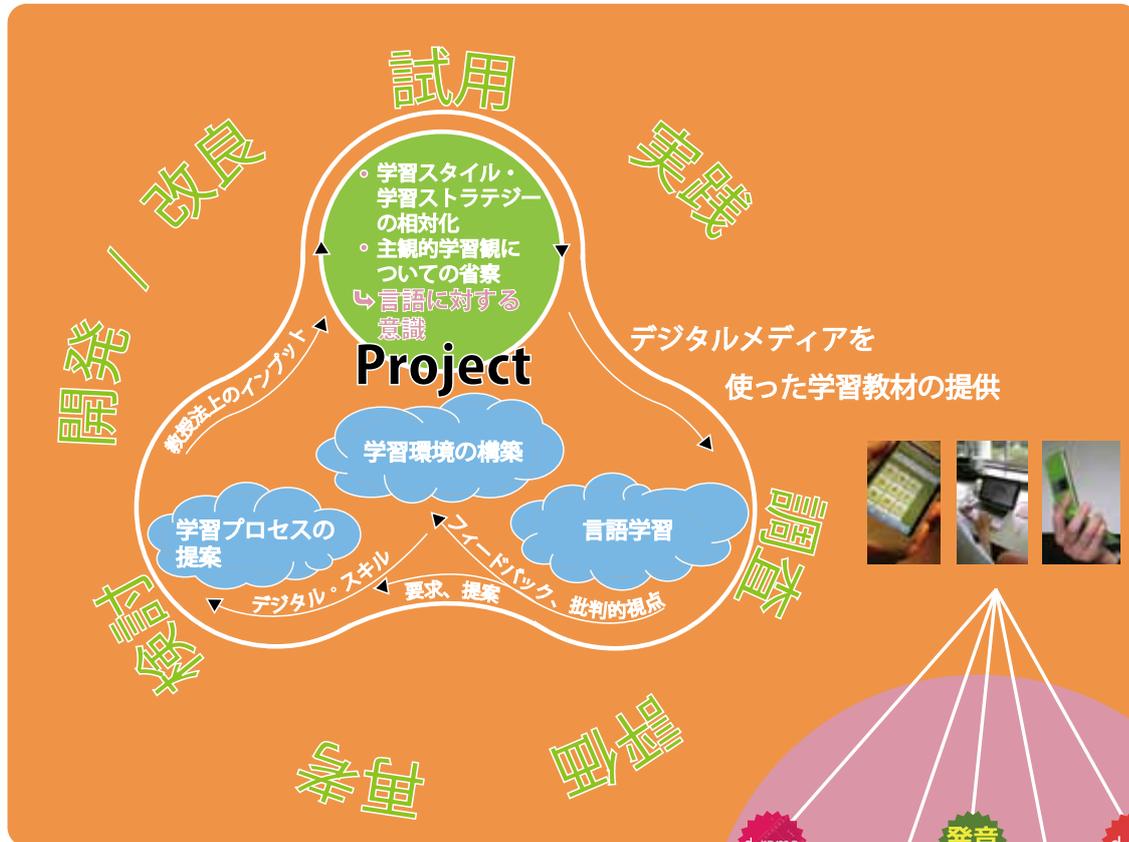
また、プロジェクト参加者の言語学習に対する意識の変化として、新たな学習方法に対するオープンな態度が形成されるとともに、新たな学習ツールに対する批判的な視点が獲得されることなどが確認された。

4. 考察

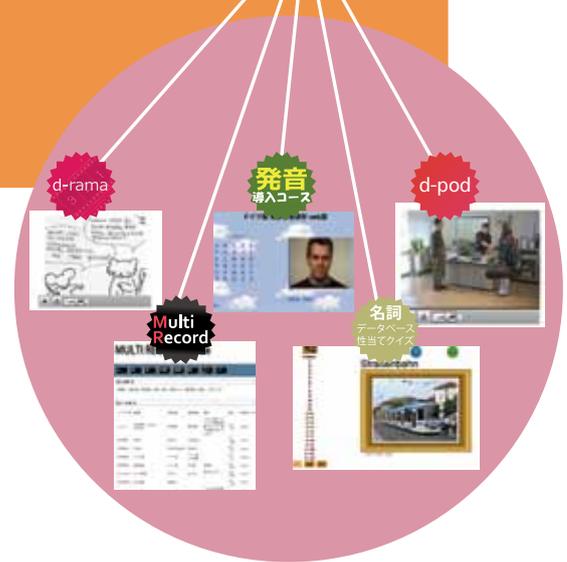
本研究を通じて、多様なデジタル言語学習ツールを提供し豊かな言語学習環境を構築することにより、教室外での自律的な言語学習を大いに促進するとともに、プロジェクト参加者の言語学習に対する意識にもポジティブな変化をもたらすことが明らかとなった。

ITを利用した外国語学習環境の構築

藁谷郁美 太田達也 マルコ・ラインデル
d-mode@sfc.keio.ac.jp



- ### 全体の評価
- プロジェクト能力の開発
 - 新たな学習方法に対する開かれた態度
 - 新しいデジタルメディアを使った学習への応用可能性の検証
 - 学習ツール及び学習法に対する批判的視点



言語学習に対する意識の変化

What do I have to learn?
↓
How can I learn?
↓
How can one learn?

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

ドイツ語リーディング学習における多読の環境整備およびその学習効果に関する研究

発表者：斎藤太郎 / 吉村創 / 江面快晴

背景・目的

外国語としてのドイツ語 (Deutsch als Fremdsprache) を研究対象とする諸研究分野のうちリーディング学習研究に焦点を当て、「多読」というリーディング学習方法をテーマとし、日本におけるドイツ語学習に特有の事情を踏まえて次の2点を中心に調査を行った。

- (1) ドイツ語多読学習の環境整備
- (2) ドイツ語多読学習がリーディング・ストラテジーに与える影響

多読とは

「学習者が容易に読めるレベルの、自分の読みたいと思う本を、言語ではなく内容に注目して、つまり辞書の使用は最小限にとどめ、次から次へと多く読み、読むことを楽しむ」

(デイ/バンフォード『多読で学ぶ英語』松柏社 2006年 より)

調査方法

以下の手順による実験授業を行い、学習者へのアンケートやインタビュー (集団/個人)、学習者からの提出物や Moodle への書き込み、授業中の発言などから得られたデータを分析した。

- (1) 読書は授業外で行うこととし、原則として1週間に1冊以上を読む。
- (2) 授業では本の紹介などをテーマとしたディスカッションを行う。
- (3) ディスカッションの終了後、次回授業までに読む本の貸し出しを行う。
- (4) 読んだ本ごとに「読書レポート」を提出する。
- (5) オンライン学習管理システムの一つである Moodle を利用したウェブサイトを開設し、授業外での交流の場を設ける。

授業の詳細

	第1回 2007年5月8日～7月10日	第2回 2007年10月30日～2008年1月8日	第3回 2010年5月25日～6月29日
開催日、回数	毎週火曜、計10回	毎週火曜、計9回	毎週火曜、計6回
参加者	7名	19名	5名
総読書量の平均	19,478語	25,598語	5,497語

多読の効果 (結論)

- ・ トップダウン式のリーディング・ストラテジーの習得。
- ・ ドイツ語を読むことに対する抵抗感の減少。
- ・ 読む技術の開発 (辞書の引き方など)、ならびにそれを学習者間で伝えあい交換できること。
- ・ ドイツ語を読むことが楽しくなること。

多読で用いた書籍 計273冊

- (1) 学習者向けリーダー 148冊
- (2) 絵本・児童文学 103冊
- (3) その他 22冊

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

多言語発音教材制作研究

発表者：島崎のぞみ・林良子・菊地歌子・境一三

1. 背景・目的



本研究では、自律的な学習を進める支援ソフトとして、フランス語とドイツ語の母音練習教材の開発・利用に関する調査を行った。

- A) フランス語：練習ソフトの作成と許容範囲の検証
- B) ドイツ語：4パターンの練習方法を調査・比較

学習支援のための最適な指導方法提案が必要
A) & B) 共に、前舌円唇母音の習得が困難！！

2. 手法

- A) ① ダウンロード版の制作(アルカディアHP:
<http://www.arcadia.co.jp/SP/index.html>より入手可能)
Delattreの定義から、一定の範囲を設定。(図1)
- ② フランス語母語話者7名(男性4名、女性3名)の母音の第1・第2フォルマント値分析。
- B) 4パターンの発音練習法の効果を調査
→日本人ドイツ語学習者6名(19~20歳、学習歴0.4~3.4年)の調音音声録音・録画
【調査内容】
 - >第1段階：学習者のももとの発音
 - >第2段階：IPAを参考にした発音
 - >第3段階：NSの音声を模倣した発音
 - >第4段階：ATR CALL Deutschを利用した発音

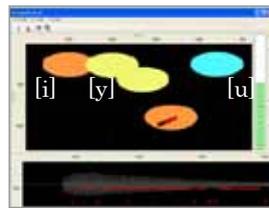


図1：ダウンロード版

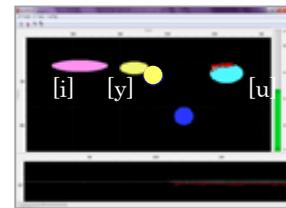


図2：範囲変更後

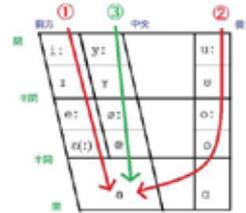


図3：母音台形図

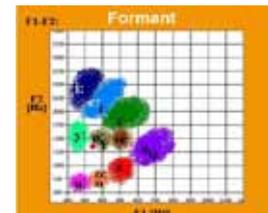
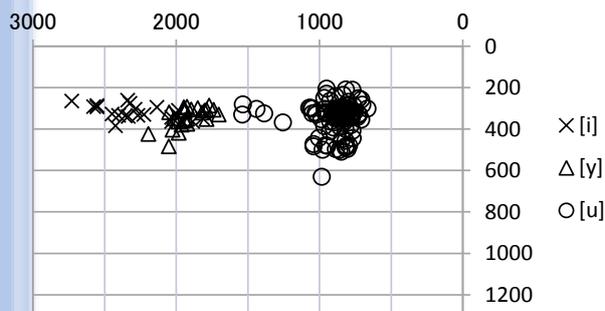


図4：ATR CALL Deutschの一画面

3. 結果



グラフ1：仏語NSの調音によるフォルマント値

	F1 (Hz)	F2 (Hz)
[i]	240	2500
[y]	240	1700
[u]	240	750

表1：Delattreの定義

	F1 (Hz)	F2 (Hz)
[i]	321	2267
[y]	344	1915
[u]	343	882

表2：調査結果

- A)
 - ◆ F2周波数帯域は広く分散しており、一点をとることはできないが、全体の平均値は、Delattreが定義した数値よりも高かった。
 - ◆ 1500Hz付近に出現した[u]は、同一話者の調音であることから、個人の特性として扱い、範囲設定には反映していない。
- B)
 - ◆ 聴覚優先タイプと視覚優先タイプの可能性が示唆された。

4. 残された課題

- A) 学習者の利用を通じた評価を行い、ソフトの改善が求められる。
- B) 詳細な検証を行い、効果的な練習方法についての調査を進める。

A)、B)いずれも、発音指導時の教示表現をまとめる必要がある。

【参考文献】

Delattre, P. « The physiological interpretation of sound spectrograms », Studies in French and Comparative Phonetics, 1966 (originally published in PMLA LXVI, 5 (september, 1951)
アルカディアHP: <http://www.arcadia.co.jp/SP/index.html>

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

外国語学習入門期における発音指導の研究 ② ドイツ語におけるスーブラセグメンタルな要素を中心に— に関する研究

三ツ石祐子(慶應義塾大学)・林良子(神戸大学)
境一三(慶應義塾大学・研究企画代表)

1. 背景・目的

リズムやイントネーションなどのスーブラセグメンタルな要素(超分節的要素、または韻律的要素)は、分節的要素(個々の母音や子音)と同様に重要であり、外国語としてのドイツ語の発音においては特に重要である(Fischer: 2007)。

本研究では、「詩文のリズムを、身体動作を通して教授する」ことに重点を置いた実験授業を通して、参加者のドイツ語の発音がどのように変化するかを実証的に検討した。

このことを通し、ネイティブのドイツ語を耳にする機会が少ない環境で、比較的短時間に、学習者が自然な、ドイツ語らしい発音を習得するための持続効果的な練習方法を模索した。

2. 研究方法

実験授業(「ドイツ語のリズムにのろう!」別紙参照)を行い、実験授業前後の映像音声記録・分析した。(比較のために、初見テキスト朗読も併せて収録)。

課題テキスト「魔王」(ゲーテ)

「Erk[n]ig], J.W. von Goethe

Wer reitet so spät durch Nacht und Wind?
Es ist der Vater mit seinem Kind;
er hat den Knaben wohl in dem Arm,
er faßt ihn sicher, er hält ihn warm.

Mein Sohn, was birgst du so bang dein Gesicht?
Siehst, Vater, du den Erlkönig nicht?
den Erlenkönig mit Kron und Schweif?
Mein Sohn, es ist ein Nebelstreif.
.....

- ・実験授業前後の発音変化: 課題文・初見テキスト(発話速度、アクセント位置、母語話者による評価)
- ・参加者に対するアンケート・自己評価

本研究においては、合計3タームの実験授業を行なった。

実験授業1 : 「予備の実験」

期間: 2007年8月6日~10日(毎日10:30~12:00)、全5回(計450分)
場所: 慶應義塾大学日吉キャンパス来客舎・イベントテラス
参加者: 8名(男性5名・女性3名)

実験授業2 : 「実験群・統制群を設けた実験」

実験群
期間: 2009年12月5日・12日・19日の全3回(14:00~16:30)内30分は収録時間 計360分
場所: 日吉キャンパス独立館・コミュニケーションラウンジ
参加者: 5名(男性4名・女性1名)

統制群

2009年度経済学部2年生の必修ドイツ語(週1回)の授業に出席していた男子学生6名。常に着席した状態で、1回につき約15分×10回の練習。

実験授業3 : 「年齢を統制した実験」

実験2の統制群の年齢が大幅に若かったため、年齢の影響を調べた。

3. 結果

実験授業1

- 実験授業により、
- 発話速度が上がり(0.68→0.95 syl./sec: ポーズ含む)
 - 不要なアクセントが消え(56→48個: 全アクセント数)
 - 母語話者による評価が上がった(4.6→5.4: 7段階評価)

実験授業2

実験群も統制群も発話速度が上がり、不要なアクセントが減った。しかし、自己評価の傾向が異なった。

実験群: リズム・イントネーションの上達を評価
統制群: 子音・音連続の上達を評価

実験授業3

現在集計・分析中

4. 結論

身体を用いた発音教授により:

- 話速が上がり、正しいアクセント位置の習得を促進。
- 身体を使わない場合と、学習者の発音に対する意識、自己評価が異なる。

→ 今後は年齢や他の要素について、さらに検討を進め、身体動作とリズムを重視したトップダウン型の指導の有効性を検証する。

5. 本研究に関連した業績

論文

- 三ツ石祐子・林良子(2010)「リズムと身体性を重視した発音練習の可能性—実験授業「ドイツ語のリズムにのろう!」を通して—」、『研究年報』, 第27号, 慶應義塾大学独文学研究室, 1-21(査読つき)
- 三ツ石祐子・林良子「リズムと身体性を重視したドイツ語発音練習の実践」(実践報告), 『ドイツ語教育』, 第15号, 42-47(査読つき)

学会発表

- 三ツ石祐子・林良子「リズムと身体性を重視した発音練習の可能性—実験授業「ドイツ語のリズムにのろう!」を通して—」, 日本独文学会春季研究大会, 2009年5月
- 三ツ石祐子「ドイツ語発音実験授業: ドイツ語のリズムにのろう!」, ドイツ語教育研究会, 2009年1月
- 三ツ石祐子・林良子「リズムと身体性を重視したドイツ語発音練習の実験授業: ドイツ語のリズムにのろう! (2)」, ドイツ語教育研究会, 2010年3月
- 三ツ石祐子・林良子「身体動きを用いた外国語リズムの習得—ドイツ語の詩朗読訓練を通して—」, JALT-Pan-SIC, 2010年5月

その他(著書)

- 林良子・三ツ石祐子(2011)「クリン・クラン—初級ドイツ語文法と発音」, 朝日出版

6. 引用文献

- Fischer, A. (2007) *Deutsch lernen mit Rhythmus. Der Sprechrhythmus als Basis einer integrierten Phonetik im Unterricht Deutsch als Fremdsprache*. Leipzig: SCHUBERT.
ロベルジュ・クロード監修(2000)『ヴェルボトナル法入門—ことばへのアプローチ—』ヴェルボトナル法実践シリーズ第1巻, 第2版, 第三書房

外国語学習入門期における発音指導の研究 ② ドイツ語におけるスープラセグメンタルな要素を中心に一 関する研究

実験授業1

「実験授業 ドイツ語のリズムにのろう！」

1) ウォーミングアップ(数え歌)
音声を真似て周りと合わせて発声する。一列に並び、数え歌(Kinderreigen)を歌いながら、リズムに合わせて歩く。



2) 「魔王」導入1
日本語訳を歩き回りながら声を出して読む。その後3人一組になり、父親・子ども・魔王を一人一役担当し、ドラマ風に朗読。



3) 「魔王」導入2
シューベルトの歌曲「魔王」に合わせてリズム打ち、リズムに合わせてステップを踏む。



4) 感情表現
・5人の母語話者が様々な感情表現で朗読している録画を見、声音、呼吸、速度などによって感情表現に違いが生じることを確認する。
・二人一組のペアになってそれに倣って感情表現の実践もする。

5) ドラマ化: 『魔王』を演じる
三人で具体的に役柄を考え、その感情に相応しい身振りも付け、空間も自由に使うように考慮させる。なるべく暗記で発表する。

実験授業2

実験授業3

1) ウォーミングアップ
・数え歌(↑1)
・母音とその長さ
腕と足を動かしながら、各母音の口の形と舌の位置の違いを確認していく。ヴェルボトナル法(ロベルジュ:2000)を参考に創作。
・母音の長さと音色
隣の人に母音を発しながらボールを投げる。



2) 「ナレーション」と「魔王」
・強勢のある音節でステップを踏む、またはバトンを放して掴む。
・ささやき声で発声。息の量をコントロールして、口・顎・喉を意識して動かす。



3) 感情表現(↑4)
4) ドラマ化(↑5)

受講者の声

- 声を出すことの大切さを思い出させてもらった。
- 今までいい加減に発音してきたが、ドイツ語の発音を正確に発音できるという自信が付いた。
- 全く初めてだったが楽しめたし、ゲーテの詩の深さを感じ取ることが出来た。

- 発音よりリズムに重点をおいたおかげで、かなり効率良く学習できたと思う。
- 今まで日本語の母音と同じように発音していたが、口の形や舌の位置を意識するようになった。
- 特定の単語に関して、実際にはどのように発音すれば良いのか、曖昧な部分が残った。
- 朗読の最中、意味の分からないことばがあるのが少し辛かった。意味が分からないと、音を発するのが虚しい。

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

企画タイトル：
教員養成・研修システム確立のための基礎研究

発表者：太田達也・境一三

1. 背景・目的

AOPプロジェクトは、21世紀の日本にふさわしい言語教育を政策、教授法・教材開発、環境整備といった観点から考究し、その成果を実際の教育現場に還元することを一つの目的とするが、そのためには優れた教員の養成および研修システムを確立することが不可欠である。本企画は、外国語教員養成・研修の運営に関するノウハウを蓄積し、遠隔教育を含めたインフラ面での言語教育に関わる教員養成・研修システムの構築を行うとともに、日本における外国語教育(特に英語以外の言語教育)のための教員養成・研修の現状を把握し、日本の現状に即した教員養成・研修のモデルを提示していくことにある。

2. 研究手法

本企画ではこれまで、日本独文学会主催の「ドイツ語教員養成・研修講座」の運営にあたり、慶應義塾大学日吉キャンパスを甲南大学岡本キャンパスと結んだ遠隔教育拠点として提供し、協調学習システムの構築と運用による最適化を行ってきた。

また、日本における英語以外の外国語(特にドイツ語)の教員養成・研修の実情と問題点を把握するため、2008年に2回にわたり以下の調査を実施した。

1) 全国の大学における「独語科教育法」のシラバス分析

日本の大学でドイツ語教職免許を取得する際に必修となっている「独語科教育法」のシラバスのうち、Webで公開されているものすべてを入手し、その傾向を分析

※ 2008年6月にWeb上で閲覧可能な全国24大学の52科目の「独語科教育法」(名称は大学により異なる)のシラバスを対象とした。

2) 同科目の担当者を対象としたアンケート調査

※ 2008年7月上旬に、全国の大学の「独語科教育法」の全担当者にアンケート調査紙を送付(郵送またはメール)し、2008年8月上旬までに回収、データを分析した。

3. 結果

シラバス分析の結果、「独語科教育法」では「文法説明能力」「教科書の分析・比較」「模擬授業」の3つが目立って多く取り上げられていることがわかった。またアンケート調査の結果からは、総じて講座担当者の「孤独な実態」が浮き彫りとなるとともに、当該の科目では文法・言語知識およびドイツ語力に重点が置かれている傾向が明らかとなった。

4. 考察

調査結果からは、省察能力に重点を置いた教員養成・研修モデルへの転換の必要性が示唆されるとともに、今後どのような形で教員に対する支援や連携が可能であるか、また、教員の養成者をいかに養成するか、といった問題がクローズアップされた。

教員養成・研修システム確立のための基礎研究

発表者： 太田達也・境一三

日本におけるドイツ語教員養成 — 現状と課題 —

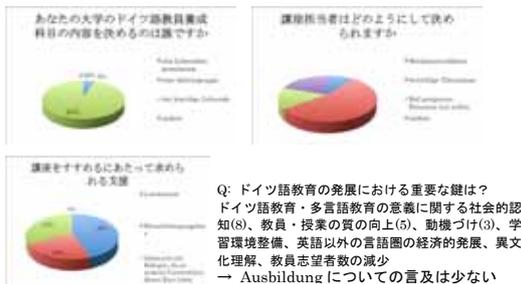
- 日本では現在、全国の45の大学において、中学校・高等学校のドイツ語教員一種免許または専修免許取得のための科目（「ドイツ語科教育法」「独語科教育法」など、名称は大学により異なる）を設置している。
- 発表者は、1）Web上で公開されている2008年度のシラバスの分析、および、2）同科目の担当者を対象としたアンケート調査を行った。

1) シラバス分析 2008年6月にWeb上で閲覧可能な全国24大学の52科目の「独語科教育法」等シラバス

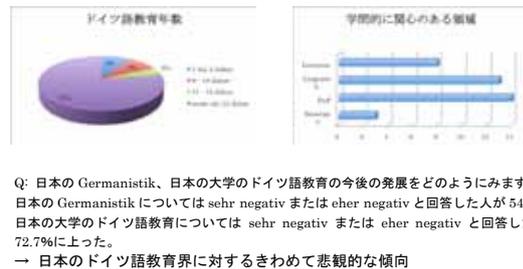
学部 等名	大学名	科目名	文法知識・文法説明能力	コミュニケーションカティブな授業	教材分析・教科書比較	教授法の理論・変遷	言語習得・学習理論	教案作成	模擬授業	地誌・文化	ドイツ語力	備考
文学部	北海道大学	教科教育法(ドイツ語I)	1		1						1	文法の基礎の習得;読解力を高める
		教科教育法(ドイツ語II)	1								1	目標:ドイツ語学の高度な専門的・応用的理解
文学部	熊本大学	独語科教育法I	20	7	24	16	8	14	20	10	4	ドイツの地理・文化・社会

2) アンケート調査 2008年7月に全国45大学の「独語科教育法」等担当者62人を対象にアンケートを実施。22人より回答を得た。(有効回答率:35.5%)

institutionelles Umfeld



Lehrperson



Kurs



Q: 講座の目標は?
ドイツ語力/ドイツ語に関する知識の習得 (8)
ドイツ語の知識を教える側の視点から捉え直し、他者に伝える能力を養成すること/ドイツ語初級文法の修得およびドイツ語文献が読めること/各文法項目の取り扱い方/実質的にはドイツ語学の授業。ドイツ語の仕組みの正確な理解
教授法の習得 (7)
教授法理論の基礎を習得/Förderung der fachlichen sowie lehrtechnischen Fähigkeiten, die teilweise sprachenebergreifend wirken sollte./外国語教授法の理論的基礎を学び、実習授業、模擬授業を通して理論を実践に移す方法を習得すること
ドイツ語の歴史に関する知識の習得 (2)
自律的学習者・自律的教育者の育成 (1)

文法・言語知識およびドイツ語力に重点が置かれている傾向が明らかに。

「ドイツ語教育法」= ドイツ語の授業?

Lehren als Profession

講座担当者に求められる能力・経験 (優先度の順位)

langjährige Unterrichtserfahrung	29	1.93
umfassende Grammatikkenntnisse	43	2.69
eigene Erfahrungen als Lehrwerkautor	64	4.00
Spezialisierung in Linguistik	67	4.19
längere Deutschlandaufenthalte	67	4.19
Medienkompetenz (Computer, Internet etc.)	71	4.18

その他の答え:

Landeskundliche Kenntnisse/学習者としての視点/基礎的な教授法理論/Lerntheorien/社会性/即興能力/ドイツ語教育に対する情熱/エンターティメント性/Unterrichtsmangement

- 担当者の「孤独」な実態
→ 支援・連携の可能性?
- 「プロ」としての教師に求められるものは?
- 「養成人」の養成の問題
- さらなる調査の必要性

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

Project Title: Intercultural Communication

Presenters: Tomoko Yoshida
Yuka Suzuki, Kyoko Yashiro

1. Background/Goal

The purpose of this study was to better understand the types of intercultural communication skills companies in Japan today required so that we could better prepare our students .

2. Method

- Focus Groups
 - 5 groups (3 = Japanese companies; 2 = multinational companies); 4-10 people per group
 - 90 -120 minutes per group from October to December, 2006
 - Flip Chart used to take notes (participants categorized their responses and voted)
- Participants
 - 27 business people from the Tokyo area (males=11; females=16) Age: 20s - 50s
- Questions
 - Q1: *What are some situations in which you experienced cultural differences?**
 - Q2: *What are skills helpful when communicating across cultures?**
 - Q3: *What kinds of people do you think need training in such skills?*
 - Q4: *What kind of education do you think universities should provide for their students?*
 - Q5: *What are methods through which we can teach the skills you mentioned to employees? **

**We followed up these questions by asking participants to categorize their answers and then vote.*

3. Analyses

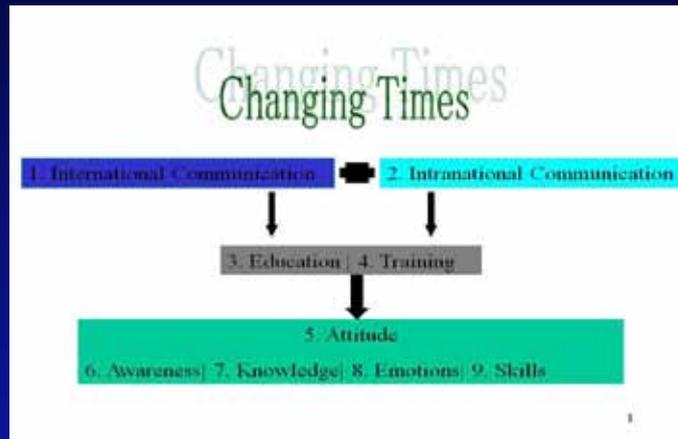
Video tapes & Full transcripts

- Stage 1 – Three researchers watched the video tapes.
- Stage 2 – Three researchers used Atlas ti to code the transcripts using Strauss's (1987) Grounded Theory. Three criteria were used to determine which themes stood out: **frequency, extensiveness and intensity** (Krueger, 1998, p. 35).

Project Title: Intercultural Communication

Presenters: Tomoko Yoshida,
Yuka Suzuki, Kyoko Yashiro

4. Results



5. Summary

- More emphasis on DOMESTIC differences
- Training necessary for: #1-everyone; #2-bosses; #3-people in the personnel dept; overseas dept.
- Results fit the model Brislin & Yoshida (1994) posited: Awareness, Knowledge, Emotions, Skills
- Skills required: combination of Japanese (e.g., *sasshi*, situation-specific adjustment) and Western (e.g., verbalizing thoughts, taking the initiative)

6. Ramifications for Practice

- Importance of incorporating domestic examples in intercultural communication case studies, theories, and skills
- Interactive approach to teaching
- Hybridization of skills and theories

Action Oriented Plurilingual Language Learning Project

ハノイ工科大学生の専門分野と日本語学習に関する調査 およびグループプロフィールの開発

発表者：石司えり・伴野崇生・島田徳子・平高史也
共同研究者：秋山敬子・萩野達也

I. 背景・目的

ベトナムIT人材育成プロジェクトの一環であるA: IT系ツィニング・プログラムにおいて、ハノイ工科大学(HUT)の学生に対する日本語コースにおいて、B: JF日本語教育スタンダードを活用し、C: グループプロフィールを開発し、より良いコースデザインを行うことを目的としている

HUT生の日本語コースデザインの課題

HUT生のニーズをどのようにコースに反映させるか

日本語教育と専門教育をどう融合させるか

JF日本語教育スタンダードの活用

HUT生の日本語レベルの現状を把握
ITという専門分野で目標となるレベルを確認

どのような場面でどのような課題を遂行するために日本語を使用しているのかを調査

グループプロフィールの作成
JF日本語教育スタンダードの汎用性の検証

用語説明

A: IT系ツィニング・プログラム [SFC]3年次～ブリッジSEの育成

【HUT】2年半
日本語(3年次に週2コマ)
専門の講義・ゼミなど

日本語(旧日本語能力試験2級程度)
専門(基礎段階終了)

B: JF日本語教育スタンダード

ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)を土台として国際交流基金が発表した、日本語教育の多様な現場のニーズや状況に合わせて学習環境をデザインするためのツール。言語の熟達度をCEFRに準じたA1-A2-B1-B2-C1-C2のレベル別に「〜ができる」という形式で記述したCan-doがサイトで公開されている。

C: グループプロフィール

特定の学習者集団の言語行動(Can-do)をシナリオと呼ばれる言語使用場面ごとにまとめたもの。『ドイツ語プロフィール(Profile deutsch)』で紹介された。

II. 研究手法

◆JFスタンダードで提示された、53の「コミュニケーション言語能力とコミュニケーション言語活動のカテゴリー」ごとにCan-doを使ってHUT生の現状レベルの確認を行った(日本語教員)。
◆SFCで専門分野で研究活動を行う際に求められる日本語熟達度を確認し(専門教員)、これを日本語コースの目標レベルと定めた。

「聞くこと」「読むこと」「ペアで話す」「ひとりで話す」「書くこと」の技能別に学生生活の具体的な場面を想定しながら自己評価チェックリストを作成し、コースのはじめと終わりに実施した。

HUT生のニーズにあった日本語コースデザインのために JF日本語教育スタンダードを活用

日本語熟達度の把握

1 Can-doを使って、
現状レベルチェック
と目標設定

2 自己評価
チェックリストの導入
(日本語ポートフォリオ)

日本語使用の調査

3 SFCでの日本語使用
状況を調査
(ワークショップ)

4 個別ニーズの把握と
形式的評価
(インタビュー)

IT系留学生的のためのグループプロフィール作成
(言語使用場面ごとに言語行動を提示)

2009年11月にワークショップを実施し(HUT生9名、日本人学生3名が参加)、どのような場面でどのような日本語の言語行動を行っているかを議論し、発表した。ワークショップの成果から、JFスタンダードのCan-doの考え方に倣って、レベル別記述を試みた。

学期に各々1回ずつ半構造化インタビュー(個別20分)を行った。インタビューは録音録画し、終了後学生と一緒にみてインタビュアーがコメントする形をとった。

III. 結果と考察

日本語熟達度の把握

1 HUT生の現状レベルは概ねA2~B1
・専門分野で研究活動を行うために必要な目標レベルはB2 特に、「講演やプレゼンテーションをする」「レポートや記事を書く」活動が重要

2 自己評価チェックリストについてはポジティブな反応が多くみられ、自身の日本語能力を意識化するツールとして役立つことがわかった。

日本語使用の調査

3 「グループワークをする」「輪読をする」など10の言語使用場面を抽出し、各場面で行われる言語行動を明らかにした。
・JFスタンダードのカテゴリーにあてはめながらCan-do案を作成した。今後、「遂行されるべき課題が網羅されているか」「レベル別記述が妥当か」という2つの観点から検証する予定。

4 「半年間で聴解力が伸びた」「研究会に入って勉強が難しくなった」「日本人との日常会話が難しい」という意見が多く聞かれた。
・キャンパス外の行動については学生によってかなり個人差があることがわかった。

JFスタンダードの汎用性

・JFスタンダードが提供するCan-doの全体像を把握するのが難しかった。 ・53のカテゴリーとCan-doで、日本語熟達度を詳細に捉えることができた。
・現状レベルチェックと目標設定に役立てることができた。
・異なるアクターが同じ指標で日本語熟達度について語る事ができ、JFスタンダードはHUT生のためのコースデザインのツールとして機能した。

IV. 今後の課題

・目標から評価につなげた一貫したコースデザイン
・複数の専門教員による目標設定
・ポートフォリオの充実と運用

・HUT生のためのグループプロフィール開発
・HUTとSFCのアーティキュレーション

【参考資料】

HUT-SFC生の日本語コースの概要

【コースの目標】

B2.1 感心ある分野の多様な話題について事前に準備されたプレゼンテーションを、賛成／反対、利点／不利点を挙げながら、はっきり行うことができる
 B2.1 根拠を示しながらレポートを書くことができる。いろいろなところから集めた情報や議論をまとめることができる

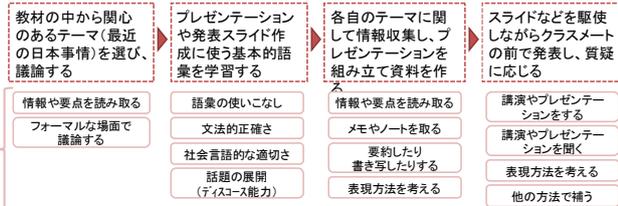
- 1. プレゼンテーションと質疑応答ができる
- 2. 自力でレポートが書ける
- 3. 文法力・語彙力などコミュニケーションの基盤となる能力をつける

B2 専門分野や大部分の一般的な話題に関して幅広い語彙を身につけ、知っている文法知識を駆使することができる

【使用教材】

- 『日本語中級 J501』
- 『アカデミックスキルを身につける聴解・発表ワークブック』
- 『大学・大学院留学生の日本語2/4 作文編/論文作成編』他

【実践例】(2010年度春学期)



目標ある学習(学習)

自己評価チェックリスト

聞くこと	読むこと	書くこと	視聴覚	話すこと	書くこと					
1 簡単なあいさつや質問を理解することができる。(お名前は何ですか? 名前)	2 簡単な文法を理解することができる。(ここに名前を書いてください。名前は最後に記入してください。など)	3 お店で買い物をするとき、値段を聞いて理解することができる。	4 試験の日程や、提出期いつ、それに沿うのか、発表の要領を聞いて、理解することができる。	5 短い簡単なメッセージやアナウンスを聞きとることができる。(駅のアナウンス、すまじや電車が来ます。など)	6 簡単な文法、ゆくりはしっかり書いてもらう。などの助けがあれば、議義の内容を聞いて、だいたい理解することができる。	7 身近な話題についての命題をだいたい理解することができる。(大学生活、趣味、遊びなど)	8 プレゼンテーションの要領の内容を十分に理解することができる。(最先端なこと、興味のある話題、専門的な話題など)	9 身近な話題の、長い会話や議論を理解することができる。(自分の専門の分野、研究テーマなど)	10 テレビのニュースや映画の内容をだいたい理解することができる。	11 日本人の友達や同士の会話をだいたい理解することができる。

Can-doレベルチェック・目標設定

活動Can-do(受容:理解する)		目標 (専門教員)	現状 (2名の日本語教員)	
聞くこと	1 聞くこと全般	B2.1	B1	B2.1
	2 母語話者同士の会話を聞く	B2.1	A2	B1
	3 講演やプレゼンテーションを聞く	B2	B1.1	B1.2
	4 指示やアナウンスを聞く	A2	A2-B1	B1
	5 音声メディアを聞く	B1.2	B1.1	B1.2
読むこと	6 読むこと全般	B2	A2-B1	B1
	7 手紙やメールを読む	B2	B1	B1
	8 必要な情報を探し出す	A2	B1	B1.2
	9 情報や要点を読み取る	B2.1	B1	B1.2
	10 説明を読む	B1	B1	B1
視聴覚	11 テレビや映画を見る	A2.2	A2-B1	B1.2

活動Can-do(産出:表現する)		目標 (専門教員)	現状 (2名の日本語教員)	
話すこと	12 話すこと全般	B2	B1	B1
	13 経験や物語を語る	B1	B1	B2
	14 論述する	B2	B1.1	B1.2
	15 公共アナウンスをする	A2	B1	B1
	16 講演やプレゼンテーションをする	B2	B1	B2.1
	書くこと	17 書くこと全般	B2	B1
18 作文を書く		A2.2	B1	B1
19 レポートや記事を書く		B2.1	B1	B1.2

10の言語使用場面

探索関係	1 講義を受ける
	(友人に挨拶する、講義を聞く、講義内容をメモする、スライドや配布資料を読む、指示を理解する、コメントシートに記入する、説明を求める、MLでの連絡を理解する、など)
	2 グループワークをする(チームで進めるプロジェクト活動)
	(メールでやりとりする、進捗を報告する、専門分野について議論する、内容をメモする、議事録を作成する、雑談をする、など)
	3 輪読をする
	(分担を決める、専門書を読む、内容を要約する、レジュメを作成する、担当章を発表する、内容について議論する、他メンバーの発表を聞く、など)
	4 ゼミで口頭の研究発表をする
	(専門書を読む、要点をまとめる、発表のストーリーを考える、スライド・配布資料を作成する、発表する、質問に答える、自分の意見を表明する、メモをとる、など)
	5 専門分野のレポートを書く
	(文献を読む、内容を簡潔にまとめる、先生に相談する、説明を求める、レポートを書く、など)
	6 ゼミに参加する
	(雑談をする、質問をする、分権を読む、研究テーマについて相談する、など)
探索以外	7 メディアセンター(図書館)に行く
	(挨拶をする、本の情報を尋ねる、館内放送を聞く、本や機材を借りる、など)
	8 事務室に行く
	(各種届出をする、掲示物を読む、スタッフに質問する、など)
	9 食堂に行く
	(友人と雑談する、メニューを読む、注文する、説明を求める、など)
	10 ウェルネスセンター(保健室)に行く
	(問診表に記入する、体調を伝える、薬の処方を読む、など)

グループワークメンバーとの議論に参加し、話の大きな流れを理解したうえで、自分の意見を述べる事ができる。

発言権を得るために適当な表現を使って、グループワーク中の議論に割って入ることができる。

主要参考文献

国際交流基金(2009)『JF日本語教育スタンダード 試行版』
 ---(2010a)『JF日本語教育スタンダード2010』
 ---(2010b)『JF日本語教育スタンダード2010 利用者ガイドブック』
 平波英子・松田真希子・矢編重夫(2007)『「HUT-NUTツィニング・プログラム」の実情 ― 新たな国際連携教育プログラムの問題点と今後の方向性―』留学生教育学会、『留学生教育』第12号、pp. 107-117
 Council of Europe(2004)『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』初版。吉島茂・大橋理枝訳/編。朝日出版社
 Glaboniat, Manuela and Martin Müller, Paul Rusch, Helen Schmitz, Lukas Wertenschlag (2005). *Profil deutsch. Niveau A1-A2·B1-B2·C1-C2*. Langenscheidt Verlag, Berlin.
 Schweizerische Bundesbahnen "Das talx-Sprachprofil für Verkaufs- und Zugpersonal" (スイス国鉄の言語教育プロジェクト"talx"のパンフレット)

JF日本語教育スタンダードホームページ <http://jfstandard.jp> (2010年12月3日参照)
 日本語能力試験ホームページ <http://www.jlpt.jp/> (2010年12月4日参照)

「＜複言語のすすめ＞プロジェクト」企画ポスター



＜複言語のすすめ＞プロジェクト

発表者 佐野彩、原田依子
金田一真澄、森泉

目的

- ・日本における言語教育に適った複言語主義応用の方法を探る
- ・全言語の教育に対応しうる複言語主義的導入教材を作成する

コンセプト

- ・学生のことばに対する関心を高める
- ・ことばの背後にある多様な文化的要因に目を向ける
- ・言語の使われ方・あり方を実際の文化・社会状況の中で示す

成果

1.パンフレット/ガイドブック

黒版（2008年度）

赤版（2009年度）

青版（2010年度）

緑版（2011年度）



2.代表言語13の世界通用地図（裏面）

地図に見る世界の言語の多様性と多層性

- 1) 均一塗りの国とドットの国
- 2) 世界の言語の多様性
- 3) 多様性の背後にある重層性
- 4) 歴史や社会という視点

3.アンケート調査

パンフレットを延べ100の教育機関に約8,000部配付。
教員・学生に対してアンケートを実施（以下抜粋）。

使用に当たって力点を置いた点（教員アンケート）

複数の外国語を学ぶ意義を伝える。	39%
ことばへの関心を高める。	27%
外国への関心を高める。	27%
相対的なものの見方を培う。	6%

授業で重点的に扱ったトピック：複数回答（教員アンケート）

「代表言語13の世界通用地図」	47%
「言葉の違いを比べてみよう！」	41%
「言語多様性1：各国の使用言語数」	41%

学生が興味を示したトピック：複数回答（教員アンケート）

「代表言語13の世界通用地図」	53%
「言語多様性1：各国の使用言語数」	29%
「外国語を学ぶときの4つのヒント」	29%

学生の反応（学生アンケート）

- ・複数の外国語を学ぶ重要性に対する認識の高まり
- ・外国語・外国への関心の高まり
- ・外国語学習への先入観の変化

Action Oriented Plurilingual Language Learning Project

企画タイトル: 言語プロフィール調査および共通参照レベル対応型テストの開発に関する研究

跡部智(代表)、中村優治、伊藤扇、江波戸慎、倉本和晃、宮崎啓、長野智佳、日向清人、蓮見二郎、島崎のぞみ

1. 背景

英語一貫教育における現状: 学習者の目標設定と評価について、客観テストのスコア以外に、指標となる共有可能な具体的尺度がない。

改善策: 目標設定と評価の枠組みを作り、学習者の動機づけを向上させる。

目標設定と評価:
CEFRのCan-doステイトメントを利用

客観評価

学習履歴

自己評価を導入

2. 調査・分析

目的: 小中高大の学習者を対象に、Can-doステイトメントを使い、学習者の英語レベルの実情を把握する。

方法: ① Can-doステイトメントの記述子の精査と日本語への翻訳

② A) 言語使用経験、学習経験、海外経験の調査 B) Can-do英語能力の自己評価アンケート。

③ CEFR及び英検4+5級のCan-doリストから231項目を利用、3段階A~Cの3シートに各項目を配置。

区分	人数	項目数	回答冊子
小学生	288	64問	1A, 1B, 1C
中学生	1488	80問	2A, 2B, 2C
高校生	1005	89問	3A, 3B, 3C
大学生	747	89問	3A, 3B, 3C
不明	94	-	-

表1: 区分ごとの被験者数および回答冊子

英語で「できる」or「できない」と思うことを、6つの視点で評価。

- a) 聴くこと
- b) 読むこと
- b) 話すこと
- c) 書くこと
- d) 言語使用のストラテジー
- e) 言語の質

4段階評価:

できない/あまりできない/
ある程度できる/できる

回答数総計3622件中、冊子番号不明94件を除き、有効数3528件を分析。

分析方法: 項目応答理論(IRT)を採用。

- 異なるテスト間の内容でも、共通の尺度で受験者の能力を測定することができる。
- 各項目の特性を、異なる受験者間でも共通の尺度で測定、数値化することができる。

3. 結果

調査結果:

- A-1) 家庭で主に使う言語: L1は日本語がほとんど
日本語 3452名(98%)
- A-2) 海外経験:
半年以上の生活経験720名(20%)
まったくなし2314名(66%)
- A-3) 大学生の学習開始時期: 早期化の傾向
小学入学以前646名(18%)
中学入学以前2207名(63%)
中学入学以降1259名(36%)
- B-1) CEFR共通参照レベルの設定:
レベルはほぼ順当に配列(図1の困難度より)
- B-2) Can-doステイトメントの識別力:
全体で見るとA2-B1が最大(このレベルが最多)

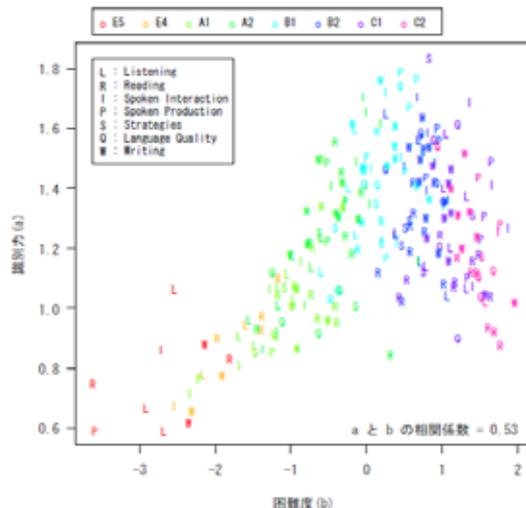


図1: Can-do自己評価による困難度と識別力

企画タイトル: 言語プロフィール調査および 共通参照レベル対応型テストの開発に関する研究

跡部智(代表)、中村優治、伊藤扇、江波戸慎、倉本和晃
宮崎啓、長野智佳、日向清人、蓮見二郎、島崎のぞみ

4. 考察

項目	Item ID	レベル	記述子	平均値				IRT項目パラメタ	
				小学	中学	高校	大学	識別力	困難度
86	SIA101	A1	人に出会ったとき、別れる時の基本的な挨拶ができる。	3.88	3.63	3.32	3.42	0.72	-2.34
125	SPA101	A1	簡単な自己紹介をすることができる。	3.71	3.51	3.43	3.47	0.77	-2.21
120	SIC102	C1	言語を流暢、性格、かつ効果的に使い、どんな分野でも一般的なレベルから専門性の高いレベルまでの会話ができる。	—	—	1.48	1.43	1.27	1.87

表 2: 各項目の識別力及び困難度(1)

→A1レベルは、とても易しいと感じる記述子からそうでないものまであり、記述子の幅が広い。

項目番号86 (SIA101)や125 (SPA101)では、困難度の数値が他に比して非常に低く、英検5級と同等の困難度。

→逆に、項目番号120 (SIC102)はC1レベルに設定されているが、C1レベルの回答者にとっては難しく感じられ「C2レベル」と同等の困難度になった。

★記述子の社会文化的側面や日本語に翻訳する時の訳語の妥当性についてさらなる検討が必要。

詳しくは「[慶應義塾言語プロフィール調査報告書](#)」を参照

CEFR対応型英語スピーキングテストの開発

学習者の評価を、言語ポートフォリオによる自己評価と、テストによる客観評価の2つによって技能ごとに行い、客観テストが彼らの自己評価を裏打ち(underpin)する関係となることを目指した。

CEFR対応型英語客観テストはケンブリッジ英検などがあるが、日本国内での普及はこれからである。リーディング、リスニング、ライティング、スピーキングの中では、スピーキングテストは普及が最も遅れていると考え、今回はスピーキングテストの開発に焦点をあてた。

テストは、イギリスOCR(Oxford Cambridge and RSA Examinations)のAsset Languagesや国際バカロレアInternational Baccalaureate (IB)後期中等教育課程/Diploma Programme (DP)を参考に、教員が学校内で実施するようなテストを念頭に置いた。

そのため、本ガイドに沿って、各教員が授業内容に合わせてテストタスクをアレンジできるように構成されている。また、CEFRの共通参照レベルごとの達成度を測る形式とし、タスクをCEFRの共通参照レベルと対応させることで、試験時間の短縮に配慮した。

詳しくは「[CEFR対応型英語スピーキングテスト教師用パッケージ](#)」を参照



学校図書館における外国語絵本の利活用 －外国語学習支援・学習環境整備の観点から－ 発表者：庭井史絵（普通部司書教諭）

1. 背景・目的

“学校図書館は、中学校における外国語学習を、どのように支援することができるか”というリサーチクエスチョンを設定し、図書館が外国語教師に提案し、協働で実行できるプログラムと資料リストを開発することを目的とする。

2. 研究手法

2008年から2010年の3年間、**読み聞かせとリードアラウド**という二つの手法を取り上げ、実験的な授業を行うことによって、外国語絵本の効果的な活用法と使いやすい絵本について検証した。

(1)英語絵本の読み聞かせ

アメリカの学校図書館員、リーパーすみ子氏を招いて、英語絵本の読み聞かせを実演してもらい、見学した英語教師と図書館員を対象にグループ・ディスカッションとアンケートを実施した。



(2)多言語絵本の読み聞かせ

－ネイティブ・スピーカーによる読み聞かせ

目黒区立図書館で、在日外国人による多言語絵本読み聞かせを行っているボランティア・グループRainbowのメンバーを招き、中学1年生を対象に、日本語とフランス語、中国語、タガログでの読み聞かせを実践してもらった。

－普通部教員による読み聞かせ

英語の教員をはじめ、フランス語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語を話せる教科教員の協力を得て、日本語＋英語＋その他の外国語による読み聞かせを行った。



(3)英語絵本のリードアラウド

生徒と一緒に感情をこめて英語絵本を音読するリードアラウド。提唱者である大島英美氏を招き、1年生10クラスにそれぞれ異なった絵本のリードアラウドを実演してもらい、授業後、生徒へのアンケート調査を行った。



3. 結果

三つの実験授業と、その後のアンケート、グループディスカッション、インタビューの結果、①外国語を学習し始めた中学生は、英語だけではなくさまざまな言語で書かれた資料に関心を持っていること、②中学生の外国語学習に対して、絵本の活用が有効であること、③選書や、絵本を活用したプログラムの提案と実践で、学校図書館は外国語教員と協力できること、が明らかになった。

4. 考察

学校図書館員は、日本語絵本の選書や提供、読書プログラムについての専門知識を有しているが、外国語絵本に対しては十分ではない。

本研究を通して、学習レベルと発達段階に応じた外国語絵本のリストとプログラムを検討してきたが、外国語教員や生徒のニーズに応え、協働するためには、さらなる検証が必要である。

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

初年次外国語教育における大学間CSCL研究 (OKプロジェクト)

発表者: 境 一三・森 朋子

1. 背景・目的

本プロジェクトは、ZPDが働かない**初心者同士の協調学習**において非同期型の非対面他者からの影響について考察し、その結果から初年次の外国語教育のあり方を考えることを目的とする。協調学習はコンピューター支援によるCSCLとし、moodleを用いる。

2. 研究手法

対象：慶應義塾大学経済学部学生1年生25名 大阪大学工学部 1年生50名

調査期間：2007年4月～2008年3月

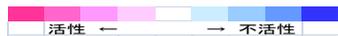
HPの仕掛け：1)慶應 文法説明，小テストなど学習内容が充実。学生個人に関する仕掛けはなし（心的距離遠い）

2)阪大 顔写真+プロフィール，パフォーマンス動画（心的距離近い）

手法：1) グラウンデッド・セオリー・アプローチ 3) エスノグラフィー

4. 結果

		メタ認知		動機付け	
		モニタリング	コントロール	親和動機	達成動機
0	阪大				
1	阪大				NA
	慶應		NA		
2	阪大				
	慶應		NA		



1. Lv.1においては阪大の学生のメタ認知活動に関して対面他者と非同期・非対面他者との影響の相違は見られない(社会的動機が起きていない他者からの影響はない)
2. Lv.1において慶應の学生が阪大の学生に親和性を感じたのに対して、阪大の学生は慶應の学生個人に関して親近感を感じなかった。
3. Lv.2において大学間交流の中に必然的な学習活動を盛り込んだ場合、阪大側にも達成動機が得られた。

4. 考察

1. 交流の環境を整えた場合でも、その交流を促進させる仕掛けがなければ自然発生的に大学間交流は行われない。
2. 動機付けがなされていない他者からの影響は少ない
3. 心的距離が遠い他者には親和的動機が起きにくく、達成動機が促進される。
4. 心的距離が近い他者には達成動機が起きにくく、親和動機が促進される。(対面、非対面を問わず)

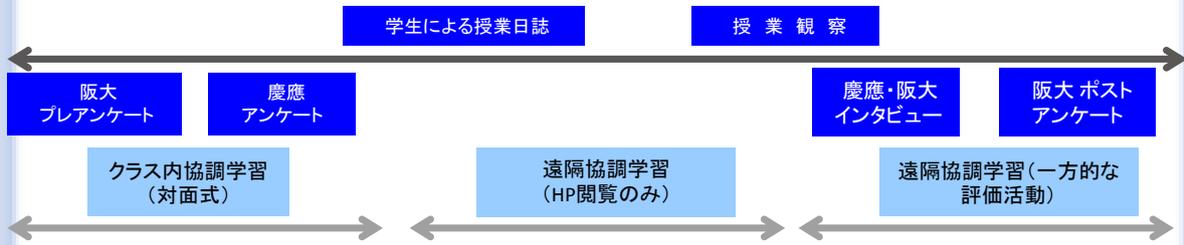
展望

授業デザインの重要性

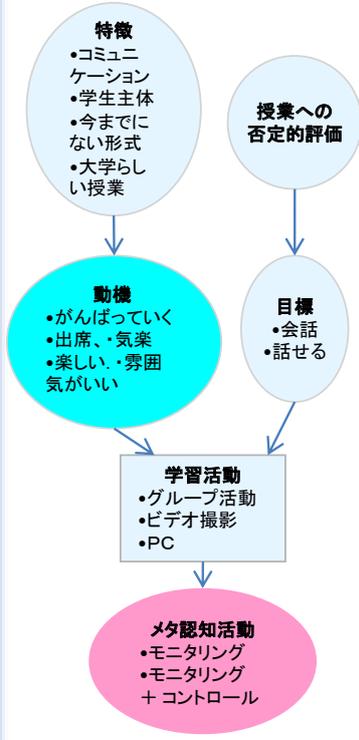
1. 環境を整えるのみならず、必然的な交流への仕掛けが必要 → 授業デザインの重要性
2. メタ認知活動の促進には、学習への動機付けが必須 → 社会的動機付けの達成動機、親和動機を状況に応じて促進させる必要性 → 授業デザインの重要性

1. 背景・目的

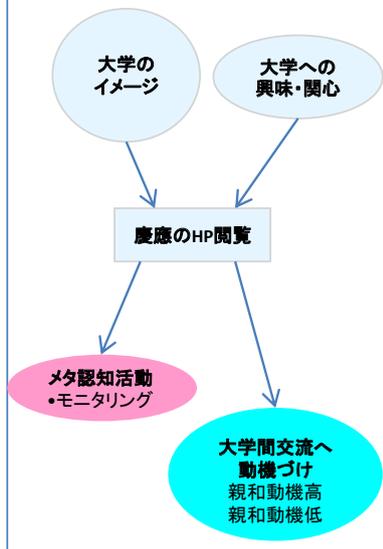
分析結果(GTA)



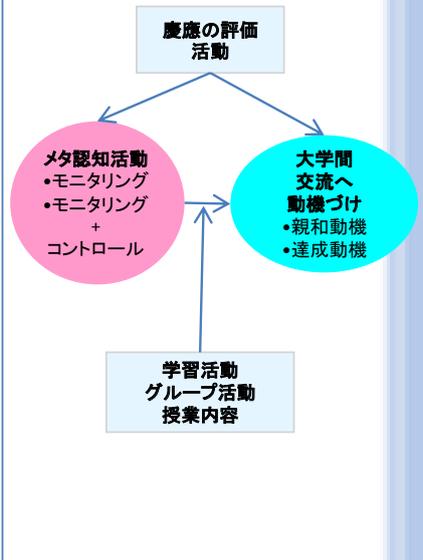
Lv.0



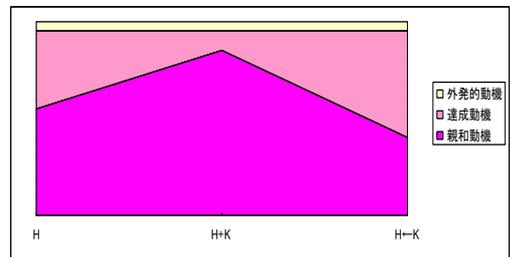
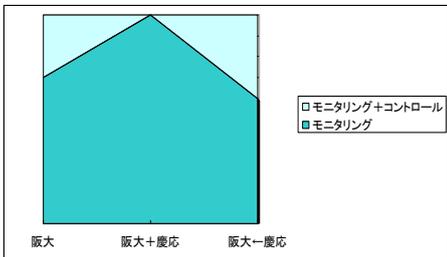
Lv.1



Lv.2



焦点化した分析



Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project



慶應義塾大学外国語教育研究センター
Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

慶應義塾大学外国語教育研究センター

行動中心複言語学習プロジェクト

Action Oriented Plurilingual Language Learning Project

<http://www.aop.flang.keio.ac.jp/>

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
学術フロンティア推進事業
2006 年度採択

複言語・複文化主義とは

CEFR では Pluriculturalism は Multiculturalism と、Plurilingualism は Multilingualism と対比させられて使用されています。CEFR の日本語版では pluri- の付く前者に「複文化主義」、「複言語主義」という訳語が与えられているのです。一般に multi- の付く後者は「多文化主義」、「多言語主義」と訳されています。

ここで考えられている multilingual とは、社会の中に複数の言語が併存し別々に使用されている状態を意味します。それに対して plurilingual とは一人の人間の中に複数の言語能力があり、現実の場において必要に応じて言語を切り替えながら社会的な課題を解決する状態をいいます。

例えば、ある町に日本語、中国語、朝鮮語、ポルトガル語の母語話者が生活していて、それらが互いに交わらない場合、その町は単に多言語状況の町ということができません。しかし、日本人 A が中国語を学習し、同じ町内の少々日本語ができる中国人 B と中古車の売買を行う場面を考えると、彼らが適宜コードスイッチングを行いながら交渉をし売買の目的を達するならば、二人とも複言語能力を身につけているということが出来るわけです。

また、両者はその場における商習慣などの文化的コードも身につけていると考えられ、その点では必要程度の複文化能力があると考えられるのです。

目次

I 言語教育政策提言ユニット	p. 3
II 行動中心複言語・複文化能力開発ユニット	
a) 英語一貫教育	p. 4
b) 複言語・複文化能力開発	p. 4
c) 異文化トレーニング	p. 5
III 自律学習環境整備ユニット	
a) 自律・協働学習	p. 7
b) 学習環境整備	p. 7

AOP とは

外国語教育研究センターは、その活動において小学校から大学院までの全学習ステージを包括的に捉え、英語教育を軸として外国語学習の一貫性を高め、英語を中心とした複言語環境でのコミュニケーション能力を向上させることを中心的課題に据えています。国際舞台において広く通用するコミュニケーション能力開発の要請に正面から応えるためには、従来の受容型の学習から行動中心・タスクベースの学習へと言語教育全体のあり方をシフトすることが必要であると考えられます。またユビキタス化した情報メディアに乗って配信される情報のなかから、ローカライズされた多言語情報を捉え、再発信していくに足る十分な言語運用能力を養成するためには、異文化交流の機会を大幅に取り入れた複言語・複文化能力を開発する教育環境整備が肝要でしょう。

以上の認識から一教育研究機関として取り組むのが「行動中心複言語学習（AOP）プロジェクト」です。AOP プロジェクトは、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業の助成により、慶應義塾大学外国語教育研究センターが学術フロンティア推進拠点として、2006 年度から 5 年間に渡って取り組む研究事業です。ヨーロッパで 30 年以上の歳月をかけて策定された『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment）』（以下、CEFR とする）を中心とする言語教育の具体的成果とその理論的基盤、実践的知見を参考に、我が国における言語教育環境の改善に資することを目指しています。

企業のグローバル化、外国人労働者の流入拡大、国際的情報流通のボーダーレス化など、21 世紀の日本はすでに複言語・複文化状況が現出した段階に入っているといえます。また、この流れが今後さらに拡大の一途を辿るであろうことは容易に想像されます。AOP プロジェクトは、このような状況に対応した外国語教育体制の再構築を行うため、これまで依拠してきた枠組みを超え、外国語教育を社会構成主義に基づく新たな教育的パラダイムのもと、緊密に再構成することをその究極目的として掲げています。より具体的には、このような意識に対応した学習環境整備、そして新たな教員養成体制の確立を目的としています。

I 言語教育政策提言ユニット

本研究ユニットでは、一つの社会で複数の言語によるコミュニケーションがなされる 21 世紀的状况に対応した、慶應義塾における言語教育のフレームワークを策定し、それに基づく具体的施策の実験的実施を目指します。

今日の東アジアの状況を見ると、第二次世界大戦後のヨーロッパが経験したような政治・経済・文化のボーダーレス化が、この地域においても進行することが十分予想されます。そのような状況の中で、外国語教育には 4 技能（読み、書き、聞き、話す）だけでなく、異文化対応能力を中心とする言語・文化能力の育成が求められています。そのために、小学校から大学院までの一貫した教育プランや統一的评价基準の作成、そしてそれを支える高度な教授能力を備えた外国語教員の養成が急務とされています。

そこで、欧州評議会が 2001 年に公表した CEFR を参照して、従来日本の学校で広く行われてきた言語知識の獲得に重点を置いた教育から、複数の言語と文化が共存する社会のあり方に対応した複言語運用能力の養成に重点を移した新たな言語教育プランの策定を目指し研究を進めます。また、そのプログラムの効果・成果を評価するために必要な諸事項も検討します。

最終的には、小学校から大学院までを備えた総合的な教育機関である慶應義塾の利点を生かし、慶應義塾版 CEFR の刊行を目指します。一貫性・透明性のある外国語教育プログラムの策定と 21 世紀の多言語・多文化状況に対応する言語教育の構築を目標に、幼稚園（小学校）から高等学校までの各一貫教育校と大学各学部からの代表者が定期的に集まり、情報の共有化を図っています。そして、その現状認識を議論の前提としつつ、外国語教育の新たなフレームワークを構築し、慶應義塾における実践的展開を通して、日本の外国語教育に寄与していきたいと考えています。

■ 「言語教育政策提言ユニット」の研究企画

・言語教育政策研究

CEFR の基礎的研究、ヨーロッパおよび東アジア諸国（韓国、台湾、中国）における外国語教育の実態調査、慶應義塾の生徒・学生の外国語能力の実態調査、生徒・学生、教員、保護者、卒業生などを対象とした外国語教育のニーズ調査を踏まえ、初等教育から高等教育に至る言語教育カリキュラムの研究を行い、『慶應義塾版外国語参照枠』の刊行を目指します。

・慶應義塾における一貫英語教育のためのグランドデザイン研究：ニーズ分析

慶應義塾における小中高大一貫英語教育のフレームワーク構築を、言語教育カリキュラム論の立場より検討します。そのための基礎データを提供するものとして、ニーズ分析を提案し、その方法論について研究を行います。

・教員養成・研修システム確立のための基礎研究

複言語・複文化能力を背景とし、新しい時代に対応した高度な指導力を持つ外国語教員養成プログラム開発のための基礎研究を行います。

■ 2006-2008 年度開催シンポジウム・講演

- ・「慶應義塾外国語教育への提言（第 1 回）— 私たちが目指す卒業生像」（2006 年 7 月 24 日）
- ・「学習者自身がデザインする外国語学習 — ヨーロッパ言語ポートフォリオはどのように役立ちうるか」（2007 年 4 月 2 日）
- ・「慶應義塾外国語教育への提言（第 2 回）— 小・中・高・大の連携を考える」（2007 年 7 月 23 日）
- ・「慶應義塾における言語教育のグランドデザイン — 共通基盤としての言語教育のフレームワーク構築に向けて」（2007 年 11 月 17 日）
- ・「大学の外国語能力開発構想と社会の要請」（2008 年 11 月 15 日）

II 行動中心複言語・複文化能力開発ユニット

本研究ユニットでは、国際舞台で広く通用するコミュニケーション能力開発の要請に応えるために、現行の言語教育を行動中心・タスクベースの学習へと転換し、そのためのカリキュラムデザインを設計することを目指して、以下の三つのテーマについて研究活動を行っています。

a) 英語一貫教育

小学校での早期英語教育から、中学、高校、大学へとそれぞれの発達段階に応じて、学習がどのように引き継がれていき、指導者側はどのような枠組みで相互に連携すべきかについての諸問題を研究しています。具体的には、児童・生徒・学生の英語力の測定・評価法の研究と実態調査を行い、その上で小中、中高、高大相互間の英語教育の接合の問題を検討し、より良い一貫教育のカリキュラムを作るための基礎研究を行っています。まずは日本における外国語教育史の中で中心的存在であった英語を対象としますが、その研究成果は他言語の教育体制の改善にも資するものとなります。

■ 「英語一貫教育」の研究企画

・言語プロフィール調査および共通参照レベル対応型テストの開発に関する研究

CEFRの基礎的研究を踏まえ、ヨーロッパにおける言語ポートフォリオを研究するとともに、その使用実態を調査し、日本語版言語ポートフォリオを作成します。共通参照レベルをもとに、慶應義塾の一貫教育体制の中で学ぶ小学校から大学までの学習者に対してアンケートを実施し、日本における小中高大の英語教育の連携性を向上させるために言語ポートフォリオが有効であるかを検証します。

・日本語版言語ポートフォリオ開発に関する研究

まず英語版の言語ポートフォリオ、次にそれを日本語訳した言語ポートフォリオを導入し、教員と学習者に対して実施するアンケート調査をもとに、日本での外国語学習の実態に即した慶應義塾版の言語ポートフォリオを開発することを目指します。

■ 2006-2008 年度開催シンポジウム

- ・「英語の実力・評価・教育」(2006年10月28日)
- ・「慶應義塾英語一貫教育フォーラム」(2007年1月13日)

b) 複言語・複文化能力開発

「複言語・複文化」という観点から、コミュニケーションを中心とする能力開発と、その前提となる現状把握のための調査・研究を行っています。欧州評議会がCEFRで提唱した「複言語・複文化」の包括的研究は、言語教育分野では日本で初めての試みと言えるでしょう。具体的には、複言語・複文化能力開発を目的とするカリキュラムデザインの研究、教授法研究、実験授業などを行う一方、日本での多言語・多文化の状況把握のための調査や、海外の多言語・多文化地域での言語教育調査を進め、複言語・複文化の視点からの言語教育が、グローバル化する日本にとってどのような教育効果を生み出すことができるかを検証します。

■「複言語・複文化能力開発」の研究企画

・「複言語のすすめ」プロジェクト

複言語習得の奨励推進を目的に、慶應義塾における第二外国語の授業をスタートさせるにあたって効果的なガイダンスパンフレットと教師用マニュアルを作成し、その効果をアンケートにより測定します。

・「コミュニケーション・アプローチによる複言語教材開発に備えた言語機能別の表現類型リストの研究」

CEFRの中核部分を担うB1レベルが指定するCan-Doをこなすに足る言語機能別の英語表現類型リストをまとめ、さらに多言語化します。

・「ドイツ語リーディング学習における多読の環境整備およびその学習効果に関する研究」

「多読」というリーディング学習方法をテーマに、読書を促進する授業デザインや学習環境整備、多読学習の効果とリーディングストラテジーに与える影響について研究を行います。

・「多言語発音教材制作研究」

多言語の体系的発音学習コースをWeb上に構築するとともに、学習者の音声を解析し、インタラクティブに自動矯正を行うシステムの開発を目指します。

・「配信型マルチメディア教材制作研究」

複言語複文化主義の理念に基づく「マルチリンガル」、「マルチプラットフォーム」に対応した、言語学習のための音声映像教材の制作と教材配信システムの構築を研究します。

・「より豊かな言語教育を求めて—ことばへの気づき・インテンシブ外国語・ろう児教育—」

感性のしなやかな子どもたちに、もっと豊かで「ことばの力」を伸ばす教育を提供することはできないかという問題意識を出発点に、初等中等教育における多様な言語への「目覚め」ないしは「気づき」を提供する実践に基づき、国語（日本語）教育、外国語（英語）教育の現状や課題についての研究を進めます。

・「多言語絵本を用いた言語意識教育に関する研究」

多言語絵本の読み聞かせを行い、それが学習者の読書（学習）意欲や言語意識（言語の多様性に対する気づき）にどのような影響を与えるのか検証します。

・「外国語学習入門期における発音指導の研究—ドイツ語におけるスーパーセグメンタルな要素を中心に—」

より効率よくリズムを体得し、かつその成果が持続するような新しい発音練習プログラムを考案し、実施します。

・「コンテンツとタスク中心の教授法におけるドイツ語学習過程」

コンテンツ中心の教授法が外国語（ドイツ語）学習過程と学習行動に与える影響について実証的に解明することを目的とします。

■ 2006-2008 年度開催シンポジウム

- ・「日本におけるバイリンガル教育と複言語主義」（2006年12月6日）
- ・「多言語・多文化の学校を考える—今私たちに何ができるか、何をすべきか」（2007年6月15日）

c) 異文化トレーニング

異文化交流の際のリスク回避が重要であるという観点から、異文化トレーニングの研究を進めています。学習者が体験する複雑かつ多面的・具体的な多文化接触の実態を探り、その中で彼らが何を学び、どのように成長するのかを質的データと量的データの双方を用いて明らかにしていきます。その上で、異文化トレーニングが与える効果とその役割を、総合的に分析・考察します。具体的には、文化摩擦を体験することによって、コミュニケー

ションにおける行動様式や、自文化・他文化に対する考え方や態度、自分自身や周囲の捉え方がどのように変化し、異なる文化に対処する能力の獲得において、どのような学びを体験するのかを明らかにしていきます。また、異文化トレーニングが人間関係や社会全体にどのような肯定的影響をもたらすのかを解明することも目的としています。さらに、異文化適応とそれに伴う外国語などの学習に、いかなる要因（パーソナリティ、受け入れ側の態度、文化的ファシリテータ〈案内役〉の存在など）が、どのような影響を与えるかについても研究を行います。

■「異文化トレーニング」の研究企画

・異文化間コミュニケーション研究プロジェクト

1) 異文化間コミュニケーション関係の授業の影響をみる研究

5つの実験授業とイベントを開催し、その授業の影響について研究します。また、企業が求めている異文化コミュニケーション能力とは何かを探るため、企業の方にインタビューをし、その結果を分析します。

2) 留学の影響をみる研究

毎年3月に実施される中等部主催の英国研修に参加する生徒を対象に、異文化適応能力テストを行い、中学生の異文化適応能力の変化を見ていきます。その際に異文化トレーニングも行うことで、異文化適応についていくつかの仮説を立てていきます。

3) プルリリンガルな学習環境の影響をみる研究

学内チューター制度を利用し、理工学研究科に在学している留学生のチューターに研究補助を依頼して、複言語・複文化環境が留学生に与える影響を学習面・生活面での変化から検証します。

4) 学生、スタッフ、教員における異文化間コミュニケーションの研究

学生が授業外で外国語や外国文化に接する場所として外国語ラウンジを設置し、ビデオ会議やイベントを開催しています。また、異文化トレーニングの効果を測定し、分析を行います。

CEFR 成立の背景と行動中心学習

ヨーロッパでは、二度の世界大戦を含む域内の悲惨な戦いの歴史を経て、さまざまな言語・文化的背景をもつ人びとや地域が平和的に共存できるよう、ヨーロッパ・レベルでの言語政策や言語教育政策の研究が継続的に進められて来ました。その中心となっているのが欧州評議会です。そこでの研究の中から、1975年には van Ek を中心とするグループが当時のコミュニカティヴ・アプローチの理論を背景に *Threshold Level English* を著しました。ここには初歩の学習者が身につけるべき言語要素が概念機能シラバスをもとに記述され、教材作りと授業の指針が示されました。さらにそれから25年の研究と議論を経た2001年に、ある意味では戦後のヨーロッパにおける言語教育政策研究の総決算として欧州評議会が公表したのが Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment (邦訳 吉島他、2004) です。

現在40数カ国に及ぶ欧州評議会加盟各国は、CEFRに準拠した外国語教育を行うことに合意し、そのために国や州のレベルでカリキュラムや試験制度の見直しを始めとする、さまざまな改革が行われています。

CEFRが提唱する新しい文化・教育的パラダイムでは、その基底にあるのは「行動中心主義」です。この考えによると、私たち人間はみな「社会的に行動するもの・社会的存在」として捉えられます。つまり、生活の中で主体的に何らかの「課題」を解決することを求められる社会の成員なのです。そしてそのような社会の成員としての個人は、具体的な行動を通して種々の課題と取り組みながら、言語能力を獲得していくのです。

従って、言語教育も行動中心主義に対応して、学習の中で具体的な課題が設定され、それを解決するプロセスの中で言語能力が獲得されるようにデザインされなければならないということになります。私たちはこれを「行動中心学習」と捉えています。

Ⅲ 自律学習環境整備ユニット

本研究ユニットでは、行動中心的な複言語・複文化教育環境の創出に向けて、以下の二つの観点からアプローチしています。

a) 自律・協働学習

初等・中等教育、高等教育、そして生涯学習をも含む「学び」という広い領域を対象とし、主体的姿勢を持った学習者を育てる「自律学習」と、他者と交流しながら学ぶ「協働学習」を二つの概念軸に据えて、従来の言語教育を刷新する教育法・教授法・教材の開発、そしてそのプログラムへの適応方法を研究しています。また新しい言語教授法とスキルを身につけた教員の養成も図ります。

■ 「自律・協働学習」の研究企画

- ・ 学校間連携による同期型・非同期型協調学習コミュニティ形成と学習環境デザイン研究
東アジア地域の異なる教育機関をつなぐ同期型・非同期型の言語協調学習コミュニティの構築をすすめ、次世代言語学習環境デザインの研究を行います。
- ・ Interactive Voice Community (IVC) の構築に関する研究
音声ファイルなどの相互閲覧環境を備えた IVC コミュニティを Moodle 上に構築し、自律協働学習力(メタ認知能力)が伸張するか、特に質的観点からの調査・分析を行います。

b) 学習環境整備

自律・協働学習環境や行動中心・タスクベースの複言語・複文化教育環境を情報化システム基盤構築の観点から総合的に整備することに取り組みます。また併せて、早期教育から専門教育までをカバーする、国際的かつ自律的な学習環境基盤の構築を目指します。具体的には、e-Learning 環境がマルチリンガル対応であるかの検証とその実践研究を行っています。また各ユニットが実施する実験授業等を技術面から支援するとともに、独自の教材を開発しています。特にテレビ会議システムは、これまでの地理的制約を超えた新たなカリキュラムデザインを可能にする次世代学習メディアであり、コミュニケーション能力養成の観点から学習環境を大幅に改善する可能性を秘めているといえます。このようなメディアを効果的に活用するための拠点形成を行なっています。またさらに、行動中心・タスクベースの学習を促進するために、次世代型外国語自律学習スペースも考案しています。

自律的学習者の育成とは

21 世紀の知識社会にあつては、知識は幾何級数的に増大し、昨日役立った知識は今日すでに役に立たないということも起こっています。このような時代にあつては、「学び」は一生涯のスパンで捉えられなければなりません。

すなわち、すべての学習は生涯学習であるといってもよいでしょう。ただし、人間が一生涯で学校という組織にあつて指導者の下に学ぶことのできる時間は限られています。従って、人生の限られた時間を過ごす学舎で学ぶべきことは、客体化された知識(のみ)ではなく、むしろ学習の技術やストラテジーであるということが出来ます。

学習者は「学びを学び」、自律的な学習者となることが求められます。全ての教育は自律的学習者の養成につながるものでなくてはなりません、外国語教育も当然その例に漏れません。すなわち、外国語教育とは、最終的には自律的な外国語学習者を育てるものであると定義することができるでしょう。

■ 「学習環境整備」の研究企画

・リソースシェアリングプロジェクト

学内の外国語教育リソースを整理・開発・補完する、参加型の学習コース構築研究を行います。将来的には理想的な教材を適切なタイミングで学習者に提供する環境の創出を計画します。

・ITを利用した外国語学習環境の構築

自習用IT教材が自律学習環境整備にどのように貢献できるかを具体的に検証することを目的に、podcasting教材の改善、携帯電話対応Web単語帳の開発・運用・評価、学習履歴データベースの構築を行います。

・多文化共生に向けた感性の涵養のための外国語ラウンジにおける異文化体験の機会創出の試み

年間4～6回程度、様々な文化にフォーカスを当てて、複言語・複文化環境を実体験し、言語・文化的気づきの機会を得るようなプログラムを企画しています。

・Blended Learningのための教育・学習環境創出研究

外国語教育研究センター、AOPプロジェクト内で行われるICTを活用した教育・学習環境整備、および研究活動の成果を、教育現場へと還元するための研修活動、調査研究、情報共有、教材開発、教育実践活動を行います。

4つの savoirs とは

CEFRの中で明示されている4つの savoirs とは、叙事的知識 (declarative knowledge ; savoir)、技能 (skills) とノウ・ハウ (know-how) (savoir-faire)、実存的能力 (savoir-etre)、学習能力 (savoir-apprendre) を指します。

叙事的知識とノウ・ハウの関係については、CEFR本文中で車の運転を例に説明されています。例えば、クラッチの構造について「叙事的知識」を持つことは大事ですが、それだけでギアを入れることはできません。実際に運転するためにはクラッチペダルを踏んで手でレバーを操作し、ギアを入れる「ノウ・ハウ」が身につけていなければなりません。

また「実存的能力」とは、『態度とか姿勢とか、物事と付き合っていくとき、何かをしようとするときに、それに対してどのような態度を取るかということ』(吉島茂「ヨーロッパの外国語教育を支える考え方」『英語展望』No.114, 2007, p.51)です。この能力は文化と関連が深く、ある文化圏でポジティブに取られる態度が、別の文化圏ではネガティブに取られることがあります。身近な例でいうならば、対話の際に人の目を見て話すことはある文化圏では必須であっても、別の文化圏ではむしろ失礼に当たり、避けなければならないというようなことです。外国語学習には、目標文化圏のこうした振る舞いを学ぶことも含まれます。

「学習能力」とは『実存的能力、叙事的知識と技能を動員するもの』です。例えば、学習過程で簡単な言葉で繰り返してもらい、理解を容易にするのは「実存的能力」によります。ある言語の語尾変化の知識は「叙事的知識」であり、辞書を引く力はまさに「技能」や「ノウ・ハウ」に当たります。学習はこうした力を総動員して行うものであり、それらを統括する力を学習能力ということができます。

言語学習における「独立自尊」の実現と言語ポートフォリオ

行動中心複言語学習プロジェクトの研究概要にもあるとおり、本プロジェクトは、一貫教育、複言語・複文化能力開発、自律・協調学習という三つの柱を念頭に置きながら、言語教育の最適化を図るとともに、研究成果による社会還元を目指しています。

ここでモデルとなっているのは、欧州評議会が開発した異文化・言語教育のフレームワーク、Common European Framework of Reference for Languages(以下「ヨーロッパ共通参照枠」)です。

このフレームワークは、従来の文法中心の言語学習に、異文化理解の側面をも意識しつつ「コミュニケーションのため人は言語を用いて何ができるようにならねばならないのか」という視点を加味しており、いわば立体的な言語学習モデルを提示しています。また、言語政策当局、教育者、学習者、ユーザー（人材を求める企業など）が共通の物差しに基づいて目標を設定し、かつ目標を達成しているかを確認できるよう、「私はこれこれができます」という形式の能力記述文を数種組み合わせ、A 1 から C 2 までの運用能力指標を打ち出しています。

こうしたヨーロッパ共通参照枠が言語学習の世界に新たに導入された海図だとすれば、その海図を使って航海するためのコンパスとも言えるのが European Language Portfolio (以下「ポートフォリオ」)です。

このポートフォリオのねらいは、欧州評議会加盟国の教育現場にヨーロッパ共通参照枠の言語モデルと共通指標を浸透させる一方、個々の学習者が共通指標を目安としながら主体的に学習を進められるようにするというもので、2008年2月現在、利用実績は累計で250万件に達しています。

ポートフォリオそのものは、自分の現在位置を記録する Passport、学習経過と次の目標を記録する Language Biography、それと学習言語を使ったメールの写しなど資料をまとめておく Dossier という三つのファイルで構成されています。単なる言語学習の記録に終わらず、コミュニケーションのあり方や異文化経験に関わる自己評価項目を設け、複言語複文化能力開発に留意していることが特色の一つです。

三つの中では、学習者が共通指標に照らしながら進捗と方向を見極めることのできるよう構成されている Language Biography が最重要です。ヨーロッパ共通参照枠という名の海図を使う人にとっての航海日誌です。

人に頼らず、自分の責任で言語学習を進めていく仕組みであり、言語学習における「独立自尊」を確保するツールと位置づけることもできます。

以下の URL から実際のポートフォリオをダウンロードできますので、どのようなものであるかをお確かめください（すべて英文）。いずれもイギリスの教育機関 CILT が制作したもので、欧州評議会の認定を受けています。

Passport: http://www.cilt.org.uk/qualifications/elp/adult_elp_passport.pdf

Language Biography : http://www.cilt.org.uk/qualifications/elp/adult_elp_biography.doc

Dossier : http://www.cilt.org.uk/qualifications/elp/adult_elp_dossier.doc

以下は、CILT が開発した、イラスト入りの「ジュニア版」で、一つのファイルに passport, biography, dossier の三つが収まっています。また、「ティーチャーズガイド」も用意されています。

「ジュニア版」言語ポートフォリオ :

http://www.nacell.org.uk/resources/pub_cilt/portfolio_revised.pdf

同「ティーチャーズガイド」:

http://www.nacell.org.uk/resources/pub_cilt/teachersguide_revised.pdf

社会構成主義

伝統的に知識は伝達できるものとして考えられてきた。それは持つ者から持たざる者へ、水が高きところから低きところへ流れるように伝えられるとされた。学校の教室は、こうした知の受け渡しの場として考えられてきた。従って、知識を与える教員がそれを受ける生徒の前に立ち、一段高い教壇から低い場所に座った生徒たちへと知識を流し込んだのである。

一方で、知識は単純に伝達によって獲得されるものではないという考え方がある。教師が語ったある事柄は、そのまま生徒の中に入ってまったく同型の知識となるのではなく、それは生徒ひとりひとりが自分の中に知識を新たに作り上げるきっかけになるに過ぎないという構成主義の考え方である。一クラスに生徒が三十人いれば、そのひとりひとりが異なった家に生まれ異なった環境で育ち、そして今までに蓄積してきた知識も異なる。だから、教師から同じ言葉を聞いても、それを受けたひとりひとりの中でその言葉が咀嚼され化学反応を起こした結果生成される知識はまったく異なると思うのである。

構成主義によれば、学習とは、外から来る知識の受容と蓄積ではなく、新たなインプットにより、学習者自らの中に知識を精緻化し（再）構築する過程である。既に述べたように、外からの情報は既知の情報（知識）と関係づけ解釈され理解される。そのため、同じ情報を得ても、理解や知の生成が人により異なることが起こりうるのである。

さて、このような知の構築は、当然のことながら学習者が個人で活動を行っている時にも生じる。しかし、人間は社会的な存在であり、他者と交わりつつそれぞれの社会的課題を解決するように行動している。こうした人間存在にとっては、学習は社会的なコンテキストの中でもっともよくその機能を発揮することができる。つまり、学習者に与えられた情報が、学習者に有意な（社会的）活動を通して精緻化され、一般化され、再構成されていく過程こそが学習であると考えられるのである。このような社会構成主義の考え方によれば、学習は個々人の単独行為ではなく、学習者の相互行為によって成り立つ。

これを外国語学習に当てはめて考えれば、それは学習者自身にとって意味のあるコミュニケーション活動によってこそ言語知が獲得されるということになるのである。ドイツ語学習を例に取れば、「デア、デス、デム、デン」という定冠詞の語尾変化を覚えることや、単語帳と首っ引きで一つでも多くの単語を覚えることがドイツ語学習の中核をなすものではなく、そしてそれらを組み合わせてカーリンやトーマスの役でロールプレーをすることでもなく、まさに自分が自分として本当に知りたいこと（例えばそれは、授業後に連絡を取り合うための相手の携帯電話の番号であるかも知れない）を目標言語による行為を通じて相手から引き出せた時に、言わば真の学習が成立するのである。すなわち、与えられた社会的コンテキストで本人にとって意味のある言語行為が行われることを通じて、例えば Telefonnummer（電話番号）という単語や数字などが学習されることになるのである。

境一三「豊かな学びの場としての LMS—ドイツ語学習における「振り返り」と「気づき」を例に—」（吉田晴世・松田憲・上村隆一・野澤和典 編著『ICT を活用した外国語教育』東京電機大学出版局、2008 年所収）より抜粋

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
学術フロンティア推進事業（2006年度採択）
行動中心複言語学習プロジェクト

研究代表 [2007年9月まで]：金田一真澄・センター所長 [2007年9月まで]；理工学部教授
研究代表 [2007年10月より]：境一三・センター所長 [2007年10月より]；経済学部教授

ユニットリーダー・サブユニットリーダー（2008年4月現在）

I. 言語教育政策提言ユニット

リーダー：境一三（幹事 [2007年9月まで]、代表幹事 [2007年10月より]）

II. 行動中心複言語・複文化能力開発ユニット

リーダー：金田一真澄（代表幹事 [2007年9月まで]、幹事 [2007年10月より]）

- a) 英語一貫教育（跡部智・センター副所長；普通部教諭）
- b) 複言語・複文化能力開発（金田一真澄）
- c) 異文化トレーニング（吉田友子・商学部准教授）

III. 自律学習環境整備ユニット

リーダー：倉館健一・センター専任講師（幹事）

- a) 自律・協働学習（太田達也・総合政策学部准教授）
- b) 学習環境整備（倉館健一）

研究メンバー（2008年4月現在）

跡部智（センター副所長；普通部教諭）
井上京子（理工学部教授）
岩波敦子（理工学部教授）
太田達也（総合政策学部准教授）
折笠敬一（高等学校教諭）
金田一真澄（理工学部教授）
國枝孝弘（総合政策学部准教授兼政策・メディア研究科委員）
倉館健一（外国語教育研究センター専任講師）
古石篤子（総合政策学部教授兼政策・メディア研究科委員）
齋藤太郎（センター副所長；文学部教授）
境一三（センター所長；経済学部教授）
佐藤望（商学部教授）
重松淳（センター副所長；総合政策学部教授兼政策・メディア研究科委員）
志村明彦（経済学部准教授）
シャールト, ミハヤエル（法学部准教授）
鈴木直樹（経済学部教授）
高山緑（理工学部准教授）
手塚千鶴子（日本語・日本文化教育センター教授）
中村優治（文学部教授）
西村太良（文学部教授）
平高史也（総合政策学部教授兼政策・メディア研究科委員）
藤田真理子（湘南藤沢中・高等部教諭）
森泉（理工学部准教授）
山下輝彦（文学部教授）
横山千晶（法学部教授）
吉田友子（商学部准教授）

謝

世界で一番話されている言葉

世界中に現在、約6000の言語があるとされています。ただし、そのうち、21世紀末までに90%の言語が死滅すると予測されています。

世界の母語人口(上位20言語)(単位100万人)

順位	母語	人口	出典: List of languages by number of native speakers, Wikipedia)
1	中国語(北方方言)	845	11 ジャワ語 85
2	スペイン語	329	12 バンジャブ語 78
3	英語	328	13 中国語(呉方言) 77
4	ヒンディー語(含ウルドゥー語)	243	14 テルグ語 70
5	アラビア語	221	15 ヴェトナム語 69
6	ベンガル語	181	16 マラティー語 68
7	ポルトガル語	178	16 フランス語 68
8	ロシア語	144	18 朝鮮語 66
9	日本語	122	18 タミル語 66
10	ドイツ語	90	20 イタリア語 62

注1. 中国語は、北方方言、吳方言など、相異なる8つの方言に分かれます。

注2. ヒンディー語はインドの公用語、ウルドゥー語はパキスタンの国語ですが、言語的には極めて近い。(『世界のことば小辞典』柴田武編、大修館、1993)

注3. ベンガル語、バンジャブ語、テルグ語、マラティー語、タミル語はインドとその周辺の言語です。(裏面地図参照)

注4. 英語は、公用語、準公用語を含めると、54カ国、約21億人にのびります。(『データブックオブ・ザ・ワールド』2005年度版)

注5. このWikipedia資料は、主にエスノログ2009年版のデータを下敷きとしています。

国連の公用語(6言語) 英語、フランス語、中国語、スペイン語、ロシア語、アラビア語

Wikipedia ウィキペディアの執筆言語数: 278言語(2011.1.1)

世界の総人口: 約69億人(2011年) その中で、中国(13億人)とインド(11億人)が突出しています。

街角の外国語



世界の言語を聴いてみよう

★NHKのWebページ(18言語)

<http://www.nhk.or.jp/nhkworld/>

★BBCのWebページ

<http://www.bbc.co.uk/worldservice/>

(アラビア語、インドネシア語、ウルドゥー語、スペイン語、スワヒリ語、タイ語、中国語、朝鮮語、ビルマ語、ヒンディー語、フランス語、ヴェトナム語、ベルシヤ語、ベンガル語、ポルトガル語、ロシア語、日本語、英語)

★VOAのWebページ

<http://www.voanews.com/english/>

この言葉話してみたい!



● いろいろな外国語で「ありがとう」「さようなら」と言ってみましょう!

Thank you.	<small>(カムサハムニダ)</small> 감사합니다.	<small>(グラフィエ)</small> Grazie.	<small>(スバシヨイ)</small> Спасибо.	<small>(グラシヤス)</small> Gracias.	<small>(ダンク)</small> Danke.	<small>(メルスイ)</small> Merci.	<small>(シューシキ)</small> 谢谢。
英語	朝鮮語	イタリア語	ロシア語	スペイン語	ドイツ語	フランス語	中国語
See you!	<small>(アンニョンイグセヨ)</small> 안녕히 계세요.	<small>(チャオ)</small> Ciao.	<small>(ダスヴィダニヤ)</small> До свидания.	<small>(アディオス)</small> Adiós.	<small>(アクフ・ヴィーダーゼーエン)</small> Auf Wiedersehen.	<small>(オモダワラー)</small> Au revoir.	<small>(ツイジエン)</small> 再见。

● 「四季」は各言語では何と呼んでいるでしょう?

英語 spring summer autumn winter		朝鮮語 봄 (ボム) 여름 (ヨルム) 가을 (カウル) 겨울 (キウル)		イタリア語 primavera estate autunno inverno		ロシア語 весна (ヴィーナ) лето (レト) осень (オースィン) зима (ズィマ)	
	スペイン語 primavera verano otoño invierno		ドイツ語 Frühling Sommer Herbst Winter		フランス語 printemps été automne hiver		中国語 春天 (チュンティエン) 夏天 (シェーティエン) 秋天 (チュウティエン) 冬天 (フンティエン)

まずこの一言を覚えよう!

Excuse me.	英語 エクスキューズミー	すみません! ちょっと来てください 道を空けてください ちょっとよろしいですか?
주세요!	朝鮮語 ジュセヨ	ください!
Per favore.	イタリア語 ペル・ファヴォーレ	お願いします (物を示して)これを下さい (地図を示して)ここへの行き方を教えてください
Пожалуйста.	ロシア語 パジャールスタ	お願いします どうぞ どうか~してください どういたしまして
Por favor.	スペイン語 ポル・ファボアー	お願いします (物を示して)これを下さい もう一度言ってください いいですか? 勘弁してよ
Bitte.	ドイツ語 ビット	お願いします (物を示して)これを下さい ~へ行ってください どういたしまして
S'il vous plaît.	フランス語 スィルヴプレ	これをお願いします (物を示して)これを下さい
不客气。	中国語 ブークーチ	(主人が客に)ご遠慮なく (客が主人に)どうぞお構いなく 遠慮なく頂きます

言葉の違いを比べてみよう!

◆ 語順

世界の言語は、主語(S)、目的語(O)、動詞(V)、の3つの順序によって6タイプに分かれます。

私は(S)本を(O)借りた(V)⇒SOV:日本語はSOVのタイプ

1. 私は・本を・借りた SOV (約 50%) トルコ語、日本語、朝鮮語、ラテン語、ヒンディー語、ウルドゥー語
2. 私は・借りた・本を SVO (約 35%) 英語、フランス語、ドイツ語、フィンランド語、中国語、スワヒリ語
3. 借りた・私は・本を VSO (約 10%) 古典アラブ語、ウェールズ語、サモア語
4. 借りた・本を・私は VOS (約 3%) マダガスカル語(オーストロネシア語族)、ツォツィル語(中米のマヤ語族)
5. 本を・私は・借りた OSV (約 1%) カバルド語(北コーカサス地方の言語)
6. 本を・借りた・私は OVS (約 0.1%) ヒシュカリヤナ語(ブラジルのカリブ語族)

(出典:バーナード・コムリー他著/片岡厚訳『世界言語文化図鑑』東洋書林、1999、P19) (一部加筆)

注:%の数字は、松本克己『世界言語への視座』三省堂、2006、P211の数字をまらめたもので、全言語に対する割合を示します。

◆ 名詞の性

ヨーロッパの言語には、名詞に性があるものが多く、ドイツ語、ロシア語、アイスランド語、ギリシャ語のように中性を含め3つの性がある言葉もあります。*

各言語の名詞の性: 男性名詞・中性名詞・女性名詞

	フランス語	ドイツ語	スペイン語	イタリア語	ロシア語
太陽	soleil	Sonne	sol	sole	Солнце
月	lune	Mond	luna	luna	Луна
山	montagne	Berg	montaña	montagna	гора
川	rivière	Fluss	ría	fiume	река
水	eau	Wasser	agua	acqua	вода

*性の区別の起源には、擬人化説、文法上の変化類型名称説などがあります。

◆ 単語の意味区分

言語によって世界の分け方が異なります。

それは言語がその民族の文化を反映しているからです。

日本語	中国語	英語	ドイツ語	ロシア語	フランス語
兄	哥哥	brother	Bruder	брат	frère
弟	弟弟				
稲	稻子	rice	Reis	рис	riz
お米	米				
ごはん	米饭				
ライス					

外国語を学ぶときの4つのポイント

違うところが面白い!

色々な言語、様々な文化に触れることで、人類の豊かさが見えてきます。挨拶も、食事も、文字もそれぞれに異なっていることが面白いと感じられますか? 異なった言語に親しむことは、異なった文化に親しむこと。それは人間の営みをより深く知ることにつながります。

習うより慣れてみよう!

どんな言語も人間が使うもの。人間の脳のしくみに合わせて作られているのですから、自然体で向き合えばいい。言語の習得は、勉強ではなく体験なのですから。

間違いを恐れなくて!

慣れ親しんだ言葉と違っているから間違えることもある。だから、面白いのです! 間違えることは「失敗」ではなく「発見」。普段と違った言葉話すひと味違った自分を演じてみましょう。できれば役者のように。変身と見知らぬ世界へのトリップは、外国語学習の大きな魅力です。

楽しく続けよう!

大切なのは楽しみながら学ぶこと。言葉を通していろいろな世界が見えてくる。君が学ぶ言葉は、憧れの世界の扉を開ける鍵です。

研究メンバー

跡部智（外国語教育研究センター副所長／普通部教諭）（2007年4月～）
石井明（経済学部教授）（～2007年3月）
井上逸兵（文学部教授）（2009年10月～）
井上京子（理工学部教授）
岩波敦子（理工学部教授）
太田達也（総合政策学部准教授〈有期〉）（2007年4月～2009年9月）
折笠敬一（高等学校教諭）
金田一真澄（理工学部教授）
國枝孝弘（総合政策学部准教授）
倉館健一（外国語教育研究センター専任講師〈有期〉）（～2010年3月）
古石篤子（総合政策学部教授）
斎藤太郎（文学部教授）
境一三（外国語教育研究センター所長／経済学部教授）
迫村純男（法学部教授）（～2007年3月）
佐藤望（商学部教授）
重松淳（総合政策学部教授）（～2010年3月）
志村明彦（経済学部准教授）
シャルト ミヒヤエル（法学部准教授）（2007年4月～）
鈴木直樹（経済学部教授）（～2009年9月）
高桑和巳（理工学部）（～2007年3月）
高山緑（理工学部准教授）（2007年4月～）
手塚千鶴子（日本語・日本文化教育センター教授）
中村優治（文学部教授）
西村太良（文学部教授）
平高史也（総合政策学部教授）（2007年4月～）
藤田真理子（湘南藤沢中・高等部教諭）
森泉（理工学部教授）
山下輝彦（文学部教授）
横山千晶（法学部教授）
吉田友子（商学部准教授）
薬谷郁美（総合政策学部准教授）（2009年10月～）

（カッコ内の年月はメンバーとして活動した時期。肩書は当時のもの）

研究協力者

會田素子（文学部非常勤講師）
秋山敬子（総合政策学部非常勤講師）
アドリアナ リコ 横山（関西大学文学総合人文学科准教授）
五十嵐玲美（横浜市立大学非常勤講師）
石井康史（経済学部助教授）
磯崎敦仁（法学部専任講師）
伊藤扇（幼稚舎教諭）
今井純子（普通部非常勤講師）
井本由紀（理工学部助教）
岩居弘樹（大阪大学教授）
岩崎栄一（群馬県立女子大学非常勤講師）
内山清子（国立情報学研究所特任研究員）
エインジ マイケル（経済学部准教授）

江面快晴（ユストゥス・リービヒ大学学生）
江波戸愼（中等部教諭）
オーグスティン メアリー エスター（カリフォルニア州エメリー校教頭）
大久保成（DMC 専任講師）
大久保教宏（法学部教授）
大久保正章（普通部教諭）
大竹優志（高等学校教諭）
太田達也（南山大学外国語学部准教授）
岡田吉央（志木高等学校教諭）
岡野恵（大正大学表現学部特命教授）
奥山美穂（高等学校講師）
小野文（理工学部専任講師）
ガイヤール ニコラ（総合政策学部講師）
笠井裕之（外国語教育研究センター副所長／法学部助教授）
加留部秀岳（外国語教育研究センター研究補助員）
菊池歌子（関西大学外国語学部教授）
北濱佳奈（女子高等学校非常勤講師）
許曼麗（商学部教授）
工藤多香子（経済学部准教授）
熊野谷葉子（外国語教育研究センター専任講師）
倉林修一（政策・メディア研究科助教）
倉本和晃（高等学校教諭）
黒河泉（ブリストル大学心理学部学生）
桑原亮（外国語教育研究センター研究補助員）
神原慧（外国語教育研究センター研究補助員）
小林潔（神奈川大学外国語学部特任准教授）
佐野彩（外国語教育研究センター研究員）
島田徳子（国際交流基金日本語国際センター専任講師）
島崎のぞみ（外国語教育研究センター PD）
清水建嗣（幼稚舎教諭）
志村佳菜子（高等学校講師）
シュッテレ ホルガー（麗澤大学嘱託専任講師）
白崎容子（文学部教授）
鈴木雅子（外国語教育研究センター助教〈有期〉）
鈴木有香（早稲田大学紛争交渉研究所客員研究員）
須藤真季（慶応義塾外国語学校講師）
石司えり（SFC 研究所上席訪問所員）
高橋朋子（大阪大学講師）
竹内理（関西大学外国語学部教授）
竹内良雄（経済学部教授）
種村和史（商学部教授）
垂井香（普通部講師）
津崎正行（文学部非常勤講師）
デイビス マーク（カリフォルニア州エメリー校教諭）
寺田雄介（女子高等学校非常勤講師）
土岐麻里（湘南藤沢中・高等部教諭）
伴野崇生（総合政策学部非常勤講師）
中島和子（トロント大学名誉教授）
中嶋雅巳（普通部教諭）
中谷潤子（大阪大学後期博士課程）
中津川みゆき（慶応義塾外国語学校講師）
長野智佳（高等学校教諭）

中村智栄 (政策・メディア研究科学生)
中村文紀 (外国語教育研究センター RA)
庭井史絵 (普通部司書教諭)
野村昌史 (理工学研究科修士課程)
萩野達也 (環境情報学部教授)
蓮見二郎 (九州大学法学部准教授)
長谷川淳一 (桜美林大学専任講師)
濱野英巳 (慶應義塾大学非常勤講師)
馬場秀行 (女子高等学校教諭)
林良子 (神戸大学大学院国際文化学研究科准教授)
原田依子 (日本大学非常勤講師)
日向清人 (慶應義塾外国語学校講師)
プール グレゴリー (多摩大学グローバルスタディーズ学部教授)
ブランダオ レナート (幼稚舎／普通部／中等部講師)
堀口佐知子 (テンプル大学准教授)
ボンジー アラナ (慶應義塾大学非常勤講師)
マイヤー アンドレアス (上智大学一般外国語教育センター嘱託講師)
前田華奈 (中等部教諭)
町恵理子 (麗澤大学教授)
松田かの子 (文学部非常勤講師)
ミギャン パトリシア (東京農工大学非常勤講師)
水野邦太郎 (福岡県立大学人間社会学部准教授)
三ッ石祐子 (文学部／経済学部非常勤講師)
三橋紫 (東京農工大学国際センター特任教授)
宮崎啓 (高等学校教諭)
メニッシュ マーク (青山学院大学経済学部准教授)
持原なみ子 (高等学校教諭)
森山徳之 (志木高等学校教諭)
モレッツ ドノバン (カリフォルニア州エメリー校教諭)
師岡カリーマ エルサムニー (文学部非常勤講師)
森朋子 (島根大学准教授)
谷内正裕 (ベネッセ・コーポレーション)
八代京子 (麗澤大学大学院言語教育研究科教授)
山城リタ (外国語学校講師)
山田恒 (法学部教授)
山根裕佳 (総合政策学部／環境情報学部／早稲田大学教育総合科学学術院非常勤講師)
ヤング ジェローム (文学部講師)
横川真理子 (慶應義塾大学非常勤講師)
吉村創 (高等学校教諭)
ラインデル マルコ (総合政策学部訪問講師〈招聘〉)
ラップリエ ジェレミー (日本学術振興会 PD)
ルイス クライド (外国語教育研究センター研究協力者)
ルラディック モニク (同志社大学言語文化教育研究センター准教授〈有期〉)
ルロワ パトリス (総合政策学部訪問講師〈招聘〉)
渡谷京子 (普通部司書教諭)
SFC ドイツ語教材開発研究プロジェクト

(メンバーの肩書は協力当時のもの)

行動中心複言語学習プロジェクト

Action Oriented Plurilingual Language Learning Project (AOP)

平成 18 年度～平成 22 年度私立大学学術研究高度化推進事業
(学術フロンティア推進事業) 研究成果 報告書

発行 慶應義塾大学外国語教育研究センター
〒 223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1
編集・制作 慶應義塾大学出版会株式会社
発行日 平成 23 年 3 月